
MARIGOLD - マリーゴールド -

アヒル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MARIGOLD - マリーゴールド -

【Nコード】

N66140

【作者名】

アヒル

【あらすじ】

僕は変わらなくちゃいけない。

ありふれた日常の中、高校二年生の《東条直樹》は一人悩んでいた。

周りに恵まれていない訳ではない。貧乏でもない。友人もいる。成績も良い方だ。

けれど、全てが与えられたもの。振ってきたもの。いつの間にかそこにあつたものだった。

その中に自分から手を伸ばし、掴んだものは何一つとして無かつ

た。

そんなある日、何者かの手によって《リセット》という人生をやり直すことができる機械が送り届けられる。もちろん単なるいたずらだと思いい気にも留めなかった。

ところが、憧れの女性《相澤美玲》に告白するもあっさりと振られ、更には幼馴染の《渡瀬愛》を傷つけてしまったという大きな後悔に苛まれてしまう。

直樹は藁をも掴む思いでリセットを手に取り願った。 やり直したい、と。

眩しい閃光。気付くと直樹は不思議な空間で一人の女の子と対峙していた。

「ようこそ、リセットの世界へ」
銀色の美しい髪、吸い込まれそうな青い瞳。彼女は自らを《マリー》と名のる。

未だに信じることの出来ない直樹に、彼女はリセットの概要を教えにくれた。

《リセットの有効範囲は4月7日》

《引き継げる記憶は3つまで》

そこから彼の正解だけを選ぶ人生が始まった。

マリーの正体は……。

何故僕にリセットが送られたのか……。

二つの謎を抱えながらも、前へ前へと突き進む直樹。
見つけたのは未来か過去か。

もし、リセットの世界へ行けたなら、あなたは何処へ向かいますか？

序章 【いざない】（前書き）

MARRIGOLD - マリーゴールド -

人間が自己の未来について熟知してしまったら、その人の一生は、つねに限りない喜びと恐怖がまざりあって、一瞬といえども平和な時がなくなる。

ホーソン・デイヴィッド・

スワン」

序章 【いざない】

序章 【いざない】

全く同じ現象を体験したとしても、感じ方は人それぞれだと思う。夢、現実、幻想、怪奇、色々な答えがある。少数派だろうと、多数派だろうと、とにかく、今、自分の身に訪れた現象は《死》なのだと思っていた。

だって、それも悪くないから。それに、とても適切だ。

けれどひとつだけ……、その死は、自らの手によって引き起こされた、いわゆる自業自得というものなのか、それとも不運にも偶然の渦に巻き込まれてしまったのか、それだけが気がかりだった。

恐らくは一瞬の出来事。

最初は眩い閃光を受け、視界が真っ白になる。

次の変化は音だった。

全て音にフィルターが被さり、曇っていく。元は声だったのか、物音だったのか、それすらも曖昧になってゆき、やがて消えてしまった。

きつとそれはどうでもいいこと。

たぶん、あまり意味の無いことだから。

音が完全に消えてしまうのと同時に、真っ白だった世界は、ゆっくりと、おぼろげな風景に変わりつつあった。

目が慣れるまでの間は何も動かせない。動かせないと言うよりも、動かしたくないと言った方が近いかもしれない。

ここは違う場所。どこをどう通ってここへ来たのか、それは分からない。分かるのはさっきまでいた空間から、何らかの力で身体を引き剥がされ、違う空間に貼られたという感覚だけ。そんな直後に身体を動かしたくなるわけが無い。

どれくらいの時間が経ったのか、自信など無いに等しいけれど、恐らく二十秒前後だったと思う。ようやく目が慣れてくると、そこは不自然なほどに鮮やかな 青と緑だけの世界だった。

驚いて辺りを見回すと、右も、左も、後ろでさえも、全てがあても無く、ただ、平原と空。

なんとなく両手を広げて見ると、そこには確かに両手があった。少しだけホツとする。

きちんと両手があったからではない。その下に鮮やかな花が咲いていたからだ。

どうして花を見ただけでホツとしたのか。それは多分、ここは《意味のある場所》だと感じたからだと思う。わざわざあつらえたかのように自分を囲んでその花は咲いていた。何度か目にしたことのある鮮やかな黄色い花。小さい頃に育てた記憶がある。

三六〇度に延々と広がる緑の中に、ぽつんと存在した円状の花畑。だから多分、ここは意味のある場所。そう思った。

ここが死の世界だろうと、別のどこかだろうと、全てが平原だけであったなら、今頃、心は恐怖に支配されていたことだろう。

「ようこそ……」

なんの前触れもなく背後から女性の声がして、驚く間もなく後ろを振り向いた。

そこには間違いなく、さっきまで存在していなかったはずの女の子が立っていた。

シンプルな白いワンピース。羽も輪っかも着けていない。銀色に輝く長い髪をもった、《恐らく》人間の女の子。

両手を下腹部の前で組み、かしこまった体勢で彼女はもう一度言った。

「ようこそ、リセットの世界へ」

その美しく透き通った声で発せられた言葉の意味を、理解することは出来なかった。

ただ理解できたのは、彼女が、大人びた声に不釣り合いな小さな身体であることと、瞳の色が、頭上に広がる空と同じ、綺麗な青色だということだけだった。

頭の中で復唱する。

リセットノ、セカイ？

「不思議そうな顔をするのね。でも、ここはあなたが望んで、自ら訪れたのよ」

自ら訪れた？ 未だに頭がはつきりしないせいでよく分からない。それでも、彼女が言うのだから、きっとそうなのだろう。

要するに、自ら望んで『リセットノセカイ』とやらへ訪れたのだ。死後の世界ではないことに、少しだけ安堵している自分に気付く。「あなたが望むなら、ここから連れて行ってあげるわ。あなたがやり直したいと願う場所まで」

彼女は一ミリも体制を崩すことなく言葉を繋いだ。銀色の髪だけが流れるように動いていて、この空間に風が吹いていることを知った。

やり直したいと願う場所。

後悔が生まれた場所。

悲しくて……、辛い。

それ以上深くは考えず、その言葉のまま、ゆっくりと頷いた。

「そう……、分かったわ」

彼女はそう言うのと、身を反転させ、黄色い花の外側に向かって静かに歩き出した。

花畑から出ると、「その代わりに」と言いながらこちらを向き直す。

「ひとつだけ、私の願いを聞いて……」

両手を胸に当てている彼女の顔は、どこか悲しげに見えた。それ

は青い瞳のせいか、それとも本当に悲しいことがあったのか……。
とにかく、内容を聞く前から彼女の願いを叶えてあげたいと、そ
う思わずにはいらなかった。

「あなたの世界から、ここに咲いているものと同じ、黄色い花」

マリーゴールドを摘んできて欲しいの……。

> i 1 4 5 8 5 | 2 0 2 4 <

一章 【リセット】

一章 【リセット】

『……………ッ、プ。プ。プ。ッ、プ。プ。プ。ッ、プ。プ。プ。ッ、プ。プ。プ。ッ』
僕は眠りから引きずり出された怒りを、けたたましく鳴り続けている目覚まし時計にぶつけた。

『プ。プ。プ。ッ、プ。プ。……………』

アラーム音が止まったのを確認すると、身体が冷えていることに気づき、いつものように足元に追いやられている布団をたぐり寄せて体を温め始める。

布団の温もりを感じていると、まだ頭の中でアラームの残響が鳴っていた。身体は眠りたがっているのに、頭が起きると言わんばかりに僕をまくし立てているようだ。

仕方なく片目だけをゆっくり開けて、さっき叩いた時計に注目した。

デジタル時計には大きな文字で『AM7:32』と表示されていた。両目が開くようになってようやく思い出す。この時間にアラームをセットした理由。

四月七日、今日から新学期の始まりだった。

「面倒臭いなあ……………」

それが高校二年生として初めて口にした言葉だった。

なんとか重い身体を起こすと、サイドテーブルの上にペットボトルが置いてあるのが目に入る。僕はそれを手に取ると、半分だけ入っていたバナナオレを一気に飲み干した。

少しでも多く寝ようと遅めにセットした昨日の自分のせいで、あまり時間に余裕が無い。それを確認すると、約一ヶ月前まで毎日こなししていた一連の行動に移った。

シャワーを浴び、歯を磨き、制服に着替え、髪型をセットし、市

販のバターロール二個とコップ一杯の牛乳を胃に流し込み、昨日準備しておいたカバンを持って颯爽と玄関を飛び出した。

身体に染み付いた習慣というのは、一ヶ月の間が空いても実に正確だった。目覚ましを止めてから動き出すまでの二分も計算していたかのように、家を出た瞬間に見た腕時計は八時ぴつたりを指していた。

体内時計が狂っていないことに安心していると、二軒隣の家からブレザー姿の愛が勢いよく飛び出してきたのが見えた。

トレードマークのポニーテールが今日も元気に揺れている。

彼女も僕に気付いたようで、大きく手を振りながら「おはよー」と声を掛けてきた。

僕は愛のように大きな声で挨拶する気力も無いので、立ち止まってこちらを見ている彼女に充分近付いてから、朝だというのにはっきりと元気に開かれたまあるい瞳に向かって声を掛けた。

「おはよう。今日は遅いんだね」

「始業式の日から朝練があるわけじゃないでしょー」

僕は適当に「ふうん」と相槌をうつと、学校に向かって歩き出した。

愛とは幼稚園の頃からの幼馴染で、今でこそ無くなったが、中学にあがるくらいまでは何をするにも一緒だった。遊ぶときはもちろん、家族同士仲が良かったせいもあり、食事の招き合いや、旅行まで一緒になることもざらだった。

それが中学にあがるとぱったり途絶えてしまった。はつきりとした原因はなんだったか忘れてしまったが、きっと思春期にありがちな異性を避ける習性を、お互いにとり合った結果なのだろう。

「クラス分けどうなるかなあ、また一緒だったりしてー」

そう言っただけで愛は『あははー』といたずらっぽく笑っている。

「それはちよつと……」

心とは裏腹な言葉で返すと、愛は「なによもう」と少しムツとした表情に変わってしまった。僕なりの照れ隠しは彼女を少し怒らせ

てしまったようだ。「冗談だよ」とフォローを加えると、肘で小突きはしたものの、彼女は満足そうな表情に戻ってくれた。

今年も一緒のクラスになれたらいいな。本当はそう思った。

丁度一年前のこの日、彼女は高校一年のクラスで僕を発見すると、真っ先に話しかけてくれた。それからほとんど毎日話しかけてくれるようになったのだ。

救われた。と言っても過言ではないかもしれない。

僕は人付き合いが苦手なため、自分からはほとんど他人に話しかけることはない。彼女がいなかったら孤独な一年を過ごしていたに違いない。少なくとも彼女を見つけても、僕からは声を掛けなかっただろう。

一緒のクラスを願った理由はそれだけではない。

単純に彼女が可愛いからだ。一緒に遊んでいた頃は男の子のような格好で年中走り回っていたせいもあって、女の子らしさとはかけ離れた印象だった。男の僕よりも絆創膏が似合う子供だったのを今でも覚えている。

それがたった数年でこうも変わるとは、つくづく女とは不思議な生き物だ。

愛がこれほど女らしく見えるのは、単に僕が彼女の成長する過程を見逃したからなのだろうか、それとも他の要因があってそう見えているのだろうか……。

学校に近づくにつれて、同じ制服の学生がぼつぼつと増えてきた。うちの高校は僕らのような徒歩か自転車通学が三割程度で、残りの七割は電車を通っている。次の角を曲がると、その七割の生徒で賑わっているはずだ。

「あーあ、うちの桜、もう散り始めてるね」

「そうみたいだね」

僕達の通う私立桜ヶ丘学園高等学校、通称桜学^{おっかく}は、その名の通り

正面の塀に沿って二十本の桜が植えられている。

桜の木そのものはまだ見えないけれど、ひとつ、ふたつと、春の穏やかな風に吹かれて桜の花びらが宙に舞い、僕達の足元にひらひらと落下していた。

一歩ずつ学校に近付くにつれて、徐々に空とアスファルトを彩る花びらの数が増えてゆく。

僕にはその光景が、新学期を憂鬱と考える生徒のために学校が用意した一種の高揚剤のように感じられた。

角を曲がると、案の定、六メートルの公道は桜の花びらと生徒の姿であふれていた。

ピンク色の絨毯の上で一ヶ月ぶりに交わす挨拶の音がところどころで聞こえている。

「みれーい！ おーい！」

隣を歩く愛が急に叫ぶので、心臓がドキリと大きく跳ね上がった。どうやら愛が親友の相澤美玲を見つけたらしく、僕にしたように大きく手を振っている。僕も目を凝らして愛の視線を追ってみると、ずいぶん離れたところに相澤さんの姿を見つけた。その瞬間、さっきとは違う種類の痛みが胸を襲うのが分かった。

相澤さんは既に校門をくぐるところで、愛の大袈裟なアクションにも気付くことなく門の中に消えてしまった。

「ごめん、先行くね！」

そう言つと、僕の返事も待たずに、愛は走って相澤さんの後を追って行ってしまった。

飛び跳ねる身体に合わせてポニーテールがゆらゆらと揺れている。その姿が消えるまで無意識に目で追っている、今度は校門に目が留まる。そこには大きなアーチが立てられていた。僕らが高校生になる日、最初に見た光景と全く同じだった。アーチはピンク色の造花で飾られていて、大きく『入学おめでとう』と書かれていた。

その光景を見た僕は、あの日のことを思い出さずにはいられなかった。

桜学に入学したその日、僕は生まれて初めて一目惚れというものを経験した。

あの日も今日と同じように、満開の桜が僕の憂鬱な心を無理やり励まそうとしていた。ほとんどの新入生が新しい生活に胸を躍らせている中、僕はただ不安でしかなかった。小、中と九年間一緒だった友達と違い、今から顔を合わせる大半の人間は僕のことを何一つ知らない。

一から僕という人間を説明してまで友達を作るなんて、僕にとっては単に億劫な行為でしかなかった。当然つまらない三年間の始まりだと決め付けていたのだ。

そんな高校生活初日に光を与えてくれたのは桜の木なんかではなく、二人の女の子だった。一人は幼馴染の愛。そしてもう一人は現在愛の友達であり、僕の一目惚れの相手でもある相澤さんだった。

体育館で延々と続く校長の挨拶やPTAの祝辞、先輩の歓迎の言葉を聞き流していると『新入生代表、宣誓』とアナウンスが流れた。僕の知らないところで新入生の代表が決まっていたことに少し驚いて壇上に顔を向けると、そこに立っていた一人の女性の姿に僕は目を奪われた。

彼女は、本当に僕と同じ一年なのかすら疑うほど端正な姿をしていて、遠目から見ても圧倒的な存在感を放っていた。

今でこそ入試成績トップの人間が新入生代表を務めるものだと知っているが、当時の僕はそんな仕組みを知らず、彼女はその綺麗な顔立ちで選ばれたのかと思っていた。馬鹿な話に聞こえるかもしれないが、そのくらい綺麗に見えたのだ。

よく通る声で肅々と宣誓を終えると、彼女は最後に『新入生代表、相澤美玲』と言ってお辞儀をした。式場に拍手が沸きあがる中、僕は相澤さんから目を離すことが出来なかった。

紙を畳む仕草も、階段を降りる姿も、全てが凜としていて格好良かった。僕達よりもひとつ高いところがとても似合っていて、同時にそれは手の届かない場所であることを教えてくれた。

きつと僕と同じように、この宣誓で彼女の魅力に気付いた男子も多いはずだ。拍手が鳴り止んだ後も、ざわついている声 that それを物語っていた。

その日から僕は相澤さんに憧れを抱き、そしてそれは当然のように恋へと変わっていった。

相澤さんと初めて声を交わしたのは、それからたった一カ月後の昼休みだった。

購買のパンを買って教室に戻ってくると、どういうわけか愛と相澤さんが楽しげにお弁当を食べていたのだ。

僕と愛は一組で相澤さんは八組。クラスが違うばかりか、階もひとつ離れている。僕の知っている限り、共通の接点はないはずの二人が何故一緒にお昼を食べているのかをドキドキしながら考えていると、事もあるうに愛が僕を見つけて呼びつけたのだ。

おそらく僕は気持ちの悪い笑顔だったと思う。愛に紹介され、いくつか相澤さんと会話をしたはずなのだが、持病である赤面症を抑え込むのに必死になっていたため、どんな会話だったかは全く覚えていない。

その滑稽な様子から、愛には一瞬で見抜かれてしまったようで、相澤さんが自分の教室に戻ったあとに、笑いながら『やめときなさい、直樹じゃ無理よ』と言ってきた。一瞬腹が立って愛を睨もうとしたが、確かにその通りだと思い、『そんなんじゃないよ』と軽くあしらった。

相澤さんは入学式から一ヶ月で、既に三人から告白されていた。

その内の一人はなんと三年の現生徒会長らしい。

生徒会長が相手でも駄目だった彼女を、あまつさえ何のとり得も無い僕にどうにかできるわけが無い。そう思ったのは僕だけではなかったらしく、生徒会長の次に告白する輩が現われるのはずっと後のことだった。

それからも度々昼休みにうちの教室で顔を合わせているうちに、少しずつ話すようになっていった。未だに他人の域を出てはいない

のだが、少なくとも、遠くからずっと見ているだけの人間と比べれば随分と優位な立場にいるはずだ。

いつかは告白する日が来るのだろうか。一年経ってもこのペースではまず無理だろう。どこかで流れを変える。そんなこと、僕には……。

そんなことを考えていると不意に背中を叩かれた。

「おす、直樹イ」

その声の主を分かりきっていたので、僕は振り返らずに「おすとだけ応えた。

「相変わらず辛気臭いなあ、新学期だつーのに、よっ！」

そう言い終ると同時に馴れ馴れしく肩を組んできたので、仕方なく視線を向けると、僕より頭半分程高いところに哲平の顔があった。もう、いい加減見飽きた顔だ。僕はこの顔を見ると悪態を付かずにはいられない。

「哲平は相変わらずバカそうな顔してるよね」

僕らは体をくっつけたまま、いつものように気持ちの悪い笑みを交わした。視線を前方に戻すと、そこには人だかりが出来ていた。

哲平もそれに気付いたらしく「行こうぜ」と言っ、組んでいた肩を解いて歩き出した。

人だかりの先には大きな掲示板があり、新しいクラス名簿が貼られていた。二年の名簿の前までたどり着くと一組から順に目を走らせた。

そのとき僕は不思議な見方をしていた。二列に別けられている各クラス名簿の片側を、上と下だけ確認しては次のクラスへ、そして再び上を下を確認する。その繰り返し。

その作業が止んだのは四組に移ったときだった。まず始めに上を見て『相澤美玲』という名前を見つけ、次に一番下に移す。僕の思った通り、そこに『渡瀬愛』を見つけた。そこから隣の列の中央に向けて、恐る恐る視線を動かすと、最後に自分の名前を見つけることができて、僕は心の中で派手なガッツポーズを繰り返した。

「おい直樹。喜んでるところ悪いが、お前、俺を忘れてねえか？」
たまに哲平は鋭いことを言う。その声を聞いてから、『東条直樹』の少し上にきちんと『園塚哲平』と書かれているのを見つけて、彼に向けて親指を立ててやった。

「ったく、親友は女より後かよ。悲しいねえ」

哲平は拗ねているようで、首の後ろを掻きながらそっぽを向いている。どうせ、違うクラスになったってしょっちゅう遊びに来るくせに、とも思ったが、素直に嬉しかったので、僕は哲平の機嫌を取ることにした。

「また一年間よろしく、哲平」

僕がそう言うと、単純な彼はすぐに「ああ、こちらこそ頼むぜ」と笑顔になった。

早速僕らは昇降口に向かい、新しく割り当てられた出席番号の下駄箱探しに取り掛かった。

「あつ、直樹」

愛の声が出た方に顔を向けると、予期せぬ人物の姿に一瞬息が詰まってしまい、思わず手に持った革靴を落としそうになってしまう。目の前に居る人物は愛ではなく相澤さんだった。

「今年も同じクラスになった以上、体育祭と文化祭、勝ちにいくわよー」

相澤さんの背後から顔だけを出して愛が喋っていた。それに合わせて相澤さんも微笑みながら「頑張りましょうね、よろしくお願いします」と挨拶してくれた。

「こ、こちらこそ……よろし」

「あああ！？ マジかよ！ また渡瀬と同じクラス？」

哲平が元気良く被せてきたせいで、僕の決死の挨拶は無情にもかき消されてしまった。

「あら、それは、どういう意味かし……らあ？」

言い終わると同時に愛の目が猫科動物の様にキラリと光る。

(やれやれ、高二最初のゴングは教室に入る前だったか……)

この二人はどうかやら心底相性が悪いらしく、去年の夏頃から事あるごとにいがみ合っている。僕にとっては日常茶飯事の光景なので、特に気にすることは無いのだが、飛び交う罵声の真ん中に立たされている相澤さんは困っているようだ。少し気の毒に思えたが、僕としては悪くない高校二年生の始まりだった。

二年四組の教室に入ると、席に名前を割り当てたものが黒板に書かれていた。それは出席番号順らしく、丁度教室の中央から右が男子の一番から十五番まで。左が女子の一番から十五番までといったふうに割り振られていた。

僕の番号は十番。右から二列目の一番後ろだった。他の三人とは結構離れてしまったが、同じ教室というだけで、今朝感じていた面倒臭さはいつの間にか消えていた。

今年初めの頃だったか、二年の選択授業を提出する日、聞いてもいないのに愛が相澤さんと全く同じ授業を選択したことを告げに来た。二年以降のクラス分けは、なるべく同じ授業を選択した生徒と一緒にとなると聞いていたので、特に受けたい授業の無かった僕は、愛と全く同じ授業を受けることにした。必然的に、僕と仲の良かった哲平もそうしたのは言うまでもない。

しかし、こうもうまく四人が一緒になるとは想像していなかった。先程からこのクラスの女子について熱弁を振るう哲平に対し、適当に相槌を打ちながら、きつと楽しい学園生活が待っているに違いないと、そう思っていた。

チャイムが鳴ると同時に担任が入ってきた。掲示板のクラス表で確認するのを忘れていた僕は、そのとき初めて《マリ夫》が担任だと知った。

彼は保健と体育の両方を受け持っている中年の男性教師で、何故マリ夫なのかと言うと、小柄な体格である彼の髭が、言わずと知れた某有名ゲームのキャラクターにそっくりだからだ。女子は遠慮な

くその愛称で呼んでいるが、不公平にも男子が言つと怒るので、僕らは遺憾ながら直接話しかけるときだけきちんと岡崎先生と呼んでいる。

小柄とはいえ、きちんと体育教師特有のオーラを纏っており、たまに涙目になった生徒の髪を引つ張っているのを目にすることがある。教師に対していつも生意気な口調の哲平でさえ、マリ夫の前では途端に良い子になるから面白い。

教壇に立ったマリ夫は軽い自己紹介を始め、それが終わると出席を取り始めた。

マリ夫の点呼と生徒の返事が教室内にテンポ良く交互に響き渡る。ところが、ある生徒のところでマリ夫が止まった。

「立花、ちょっと立ってくれ」

立花と呼ばれた女の子は「はい」と小さな声で返事をし、ゆっくりと椅子を引いて立ち上がった。そこへ全員目が集まるのが分かる。

見たことの無い子だった。

長い黒髪の大人しそうな女の子。遠めから見ても美しい顔立ちだということが分かる。けれど、そのたたずまいはどこか哀しそうに見える、何故か切ない印象を受けた。

「春休み中にこっちに越してきた立花優歌さんだ。今日から転入ということになる。勝手が分からないだろうから、皆よろしく頼む」まばらに返事が聞こえ、所々でひそひそと会話がこぼれ始める。

それを制するようにマリ夫が「立花、座っていいぞ」と言って、再び出席を取り始めた。

彼女が座る間際、ほんの一瞬目が合った。恐ろしく冷たい目。どうしてかは分からないが、僕は彼女に睨まれたのだ。言い表せない焦りを感じたが、すぐに気のせいだろうと思いなおした。

点呼が終わるまで、僕は彼女の美しい黒髪から目が離せなかった。さつき哀しそうだったのも、睨んだように見えたのも、きつと転校初日による彼女の不安が僕の目にそう映させたのだと勝手に考え

ていた。

新入生の入学式を終え、再び教室に戻るとHRが始まった。マリ夫に指名されたそれぞれ出席番号一番の男女が進行を行い、各実行委員が次々に決められてゆく。普通なら詰まるころではあるが、進行役の片方が相澤さんというのもあってスムーズに進んでいる。

予想通り、文化祭実行委員のところでは愛が元気良く手を挙げた。彼女は小さい頃からお祭りが大好きで、去年も文化祭実行委員をやっていた。

男子を募るところで、黒板に名前を書き終えた愛に目で催促されたが、面倒臭いので首を横に振って答えた。しばらくして適当な男子が手を挙げ、前に出た二人の挨拶が終って最後の委員選出に移る。しかし、さすがの相澤さんによる名進行もここで止まってしまう。

美化委員。面倒臭い仕事ばかりで一番目立たない委員会だ。確か主な仕事はゴミ拾いや花壇の世話、それから使っていない教室や部室の整理とかだった気がする。

案の定誰も手を挙げていないと、相澤さんの表情が徐々に陰っていくのが分かった。責任感の強い相澤さんなら、損な役割をかって出るところだが、彼女は生徒会役員であるため他の委員会に属することが出来ない。静かな教室に『カチツ』という時計の音だけが痛々しく響き渡った。

助けてあげたい……。そう思ったとき、ふと彼女の顔に光が差した。なんと、転校生の立花さんが手を挙げているのだ。教室全体が「おお〜」と唸りをあげた。

「それでは、立花さん。よろしくお願いします」
ホツとした表情で相澤さんがそう言うと、先程と同じように静かに席を立った立花さんは、チョークを受け取り美化委員の下に小気味良く自分の名前を書き込んだ。……と思った矢先。彼女はとんでもない行動に出た。

「え？」と思わず声が漏れてしまった。教室全体がひっくり返る程の衝撃を受けたに違いない。一番驚いたのはもちろん僕だ。

彼女は勝手に、自分の名前の横に『東条』と書いていたのだ。

振り返った彼女の無表情な顔と、あっけにとられた僕の顔を皆の視線が行ったり来たりしている。相澤さんまで驚いた表情で僕を見ていた。

誰もが言葉を失っている中、マリ夫だけが落ち着いていた。

「東条。指名だ、頑張れよ」

「……はあ。あ、いや、え？　なんで？」

断れなくするためだろう、男子を中心にわざとらしい拍手が起こる。口笛まで吹いて楽しく盛り上げているバカまでいた。（この場合のバカとは言うまでもなく哲平のことを指す。）

相変わらず頭の中は困惑のままだが、相澤さんの可憐な笑顔による催促に逆らえず、僕は仕方なく前へ出て立花さんからチヨークを受け取った。

近くで見ると、彼女は思いのほか綺麗な顔をしていて、押し付けられた美化委員もまんざらでもなく思えてきた。相変わらず哀しげな印象のままだけど、彼女の白い肌や肩まで伸びた漆黒の髪は、純正の日本といった感じで、きつと和服がものすごく似合うのだろうな、と思った。

「えと、どつかで会いました？」

「いえ」

あまりにもきつぱりと答えが返ってきたので、それ以上は聞けなかった。仕方なく『東条』の下に『直樹』と書き加えて振り返ると、無表情の立花さん、笑顔の相澤さん、含み笑いの哲平、それから少し怒っているような愛と順に目が合った。

楽しそうだと考えていた一年間を、僕はとんでもない方向にスタートを切ったのだった。正しくは、切らされたのだった。

当然何か起こると思っていた放課後、僕の予想は外れ、重要参考人である立花さんはあっさり帰ってしまった。（というか、気付いたらいなくなっていた。）代わりに僕を待ち受けていたのは友達三人による質問責めだった。

「ちょっと直樹。あれは一体どういうこと？」

「さあ……」

「直樹くんのお知り合いだったの？」

「違う……」

「転校初日に食パンを喰えた立花と曲がり角でぶつかったのか？」

「縞パンだったのか？ も、もしかして 水色と白だったのか！」

「知らないってば！」

「そんなわけないじゃない、どこかで会ったのを忘れてるんじゃないの？」

（そんなわけあるよ、僕は彼女を知らないし、ぶつかってもいなければ縞パンも見えていない。）

「もう……放つといってくれ……」

進行を務めていた相澤さんが責任を感じたのか、幼馴染に責められてる僕に助け舟を出した。

「明日、彼女に訳を聞いてみましょう？」

寝る前に記憶の隅々まで徹底して探してみたが、僕にはどうしても立花優歌という人間を見つけることは出来なかった。もちろん美化委員に指名される理由も全く思い当たらない。一体彼女は何を考えて僕の名前を書き込んだのだろうか……。

*

それから数日、初日の事件以来、取り立てて大きな問題は起こらなかった。結局三人の質問にも「別に」「やら「なんとなく」といった返答しか得られず、その度に僕が責められる羽目になった。三人の気が済んだのか、ようやくあの事件は単なる彼女の気まぐれということで落ち着いたが、指名された張本人である僕はそう簡単に納得できなかった。

それに、三人のように納得してくれる人間よりも、そうでない人間の方が圧倒的に多く、僕と立花さんの噂がどんどん尾ひれを付け

て拡散していった。

今日哲平が教えてくれた話によると、どうやら僕は国家秘密組織の偉い人の息子のようで、立花さんはその組織で僕の父親によって作られたクローン人間であり、作ってくれた父親とダブらせて僕のことを好きになるよう仕組まれているのだとか……。残念なことに、どうやらバカは哲平だけでは無いらしい。

今日は初の美化委員会が放課後に行われる。彼女から理由を聞き出す絶好の機会。……のはずだった。

あろう事か、僕らは一言も声を交わすことなく、あっという間に委員会は終了してしまった。

委員会の開かれる教室に入ると、既に立花さんは着席して配られた資料に目を通していた。隣に座った僕は、委員会が始まる前に何度か声を掛けようと試みたものの、なんとというか、話しかけるなオラが全開に展開されていて、とてもじゃないけど指名理由を聞き出すどころか挨拶すら出来なかったのだ。我ながら本当に情けないと思う。

いつも通り、終わりの挨拶が済んだところで立花さんはさっさと帰ってしまった。

待っていてくれた哲平と校門を出ようとすると、役目を終えた新入生のためのアーチを数人の生徒が片付けていた。その中に相澤さんの姿を見つけ、僕は簡単な挨拶をした。

「じゃあなー、相澤ー、頑張れよー」

哲平の声に続いて僕もなるべく普通に「じゃあね」とだけ言った。

「あっ、直樹くん」

校門を出たところで相澤さんに名指しで呼び止められ、胸が急に高鳴った。

小走りで駆け寄ってくる相澤さんは、アーチから外れてしまったピンク色の造花を両手で持っていた。安っぽい造花も相澤さんが持つと、なんだか清楚な物に見える。その姿はまるでロマンス映画のワンシーンのようで、哲平に背中を小突かれるまでその姿に思

わず見惚れてしまっていた。

「美化委員会、どうだった？」

ウェーブのかかったやわらかそうな髪から、女の子の良い匂いがふわりと遅れてやってくる。

それを嗅いでしまった僕は軽くパニックになってしまった。

「あー、うん……えーと。あ、なんだか校内清掃とか部室とか、えと、なんか、色々やることになっちゃった」

喋りながら既に後悔を感じていた……。

相澤さんは口元を隠して小さく肩を震わせている。

ボツと顔に火が点くのが分かった。恥ずかしいのもそうだけど、

彼女の笑顔が可愛い過ぎるせいだ。

「そっかあ、ふふっ、大変でしょうけど頑張ってるね」

「うん……」

最後にもう一度別れの挨拶をすると、彼女はアーチの解体作業に戻っていった。

帰りの途中、僕達はコンビニで飲み物を買ってから、すぐ隣にある小さな公園のベンチに腰掛け、何をすることもなく、ただ時間を潰していた。

もう一度さっきの会話を思い返してみる。相澤さんはきつと僕のことではなく、立花さんとどうだったかを聞いたかのように違いないけれど彼女は問い直すことなどしなかった。そんな些細なやさしさが、僕にとってはマリア様の慈愛のように感じられ、彼女に対する思いを、より一層強いものへと変えてゆくのがあった。

あるいは本当に僕のことを気にかけてくれたのかもしれない。そんな期待を膨らませながら、バナナオレに刺さったストローを歯で弄んでいると、哲平の呆れた声が邪魔をした。

「お前さあ、小学生じゃねえんだからよお……」

ペットボトルのお茶をひとくち飲んでから哲平は続けた。

「いつになったら告んのよ？」

思わずバナナオレが器官に入り、僕はしばらく大袈裟に咳き込んでしまう。

「乙女だねえ〜」

尚もバカにする哲平にいい加減腹が立った。

「バカには分からないよ、デリケートなの、僕は」

「意気地なし、と呼ぶ方が一般的じゃねえか？」

「……そうかもね」

デリケート、と弁解したものの哲平の言う通り、それには無理があった。僕は自分で言うのもなんだけど、男らしさとは遠く離れた体格と性格を持って育ってしまった。今でこそ無くなったが、小さい頃は女みたいだと、よくいじめられる程だった。

なよなよしているからという理由で『なよ助』とネーミングされ、何かとつけてネタにされていた。ときには誰かの悪戯で、上履きやランドセルなどの私物が勝手に可愛くデコレーションされたりもした。情けないことに、それを庇ってくれたのも女子だった。愛なんていじめっ子のリーダーに平手打ちをお見舞いして、逆に泣かせてしまうこともあった。

そんな僕が女の子と付き合ったことなどあるはずも無く、むしろ異性に興味が沸いたのだから中学も後半に差し掛かってからだった。誤解しないで欲しいのだが、同性に興味があったわけでは決して無い。

それまでは、どちらも嫌い、という感情が強かったからだと思う。いじめられて以来の僕は、低脳な男子も、僕にやさしくする女子も、両方嫌いだったのだ。

そんな経緯もあって、僕は恋愛に関しては低学年なのだ。好きな異性に告白するどころか、どう接していいのかすら分からない。何人も女の子と付き合ったことがある哲平がバカにするのも無理はない。

「ま、折角同じクラスになれたんだ。チャンスはいくらでもあるさ」「うん……」

そう弱々しく答えると、僕は、ピンク色の造花を大事そうに抱える彼女を、もう一度思い浮かべてみた。

日の落ちかけた公園に吹く風は春でも少し肌寒く、遠くに聞こえるカラスの鳴き声と一緒に、僕の切なさをじわじわと煽っていた。

家に着くと、郵便受けから封筒を取り出し、手を洗い、うがいをし、帰りに買った食材を冷蔵庫に入れ、部屋に戻って私服に着替える。それからベッドに横になり、オーディオの電源を入れ、綺麗なピアノのメロディを聴きながら読みかけの恋愛小説を開いた。朝と同じく、これも毎日欠かさず行う一連の行動だ。

今読んでいる小説は、主人公の男の子がいとこの女の子の家にお世話になるところから始まり、久しぶりに目にした年上のいとこが物凄い美人に変貌を遂げていて、更には自分の通う高校の先生になっているという、あり得ない設定だった。当然二人は恋に落ちていき、一年後には付き合うことになる。そこから様々な障害や、浮気心と戦っていくストーリーだった。

僕が恋愛小説から学びたいのは付き合うきっかけ。特に、何とも思われていない女の子と付き合う方法が知りたかった。けれど、どんなに本を読んでもそんな話は見つからなかった。どれも告白する頃にはお互いを好き合っていて、必然的に付き合うのだ。確率で言うとも100パーセント。

今の僕が相澤さんに告白すると、成功率は一体何パーセントなのだろうか。そんな事を考えていたら、口から大きな溜め息が勝手に漏れていた。

しばらく本に集中していると、オーディオから流れるメロディの間を縫って「ピンポン」とチャイムの音が聞こえた。

玄関を開けると、作業服を着た運送屋の男性が、小さなダンボールを抱えて立っていた。サインをして受け取ると、その箱は空のようになく、振っても音がしなかった。

上部に貼られた紙を見ると、差出人にどこかの会社らしき名前と、宛先に僕の名前。それから品名に精密機械とだけ書かれていた。思い当たる節も無いので、振って大丈夫だったかと心配しながら、とりあえず箱を開けてみる。

するとそこには、ぎゅうぎゅうに詰められたエアークヤップと一枚の封筒が入っていた。僕は先にエアークヤップを引っ張り出し、丁寧にテープを剥がして中身を取り出した。

これはなんだろう。最新式の携帯電話かと思ったが、スイッチらしきものが見当たらない。表には（表と呼べるのか分からないが）液晶画面ではなく、変わったデザインの絵が描かれていた。

地球らしき球体に土星みたいな帯が付いていて、四隅には天使、鷲、雄牛、獅子がそれぞれ可愛らしく描かれていた。なんとも形容し難い不思議な感じの絵だったが、少なくとも悪い感じはしなかった。

それにしても精密機械にしては軽いと思ったので、他に何か入っていないかもう一度エアークヤップとダンボールを確認してみるが、何度見ても結果は同じだった。

そこでようやく封筒を開けて、中から二枚の紙を取り出した。

一枚目の見出しに、『リセットのテスト様へ』と飾り気の無い文字で書かれていた。（リセット？ テスター？）と思いながら続きを読むと、どうやらこの軽くて四角い物体がリセットと呼ばれる物であることと、それをテスターとして使用し、感想を送って欲しいとのことがあった。その下には送り先と連絡先しか書いておらず、肝心の『リセット』についての説明が無かった。

僕は二枚目の紙に目を通すと、肩の力が一気に抜けた。

そこには確かにこう書かれていた

『リセットを使用すると、あなたが後悔を抱いている時間から人生をやり直すことができます』

『使用方法はとても簡単。リセットを手を持ち、やり直したいと願

うだけ』

その下にも色々書かれていたが、そこまで読むと馬鹿らしくなり、僕はその紙を無造作に封筒へ戻した。もう一度機械を手にとつて眺めてみると地球に巻かれている帯は、小さなハートが重なって出来ていることに気付いた。

すぐに捨ててもよかつたのだが、もしかしたら請求とか来るかもと思い、とりあえず箱に戻して玄関の脇に置いておくことにした。ふと時計を見ると既に七時を過ぎていて、同時にお腹が空いていることに気が付いた。

僕はいそいそと夕食の支度をして、テレビを見ながらそれを食べ始めると、さっきの悪戯のことなどすっかり忘れてしまった。

僕は今、半強制的に一人で暮らしている。

家族構成は母と僕の二人だけ。その母は長年務めていた大学の講師を辞め、二年前に友人と貿易関係の会社を立ち上げた。それから日本と海外を行ったり来たりしている。そのサイクルは様々で、短ければ一週間、長ければ三カ月も帰ってこない。

春休みの間に「今度のは今までよりも長くなりそうなの」と言つて出掛けて行つたので、次に帰ってくるのはきつと夏を過ぎてからだろう。

半強制的というのは、出掛ける数日前に「渡瀬さんのご両親にお願いしてあるから、しばらくお世話になりなさい」と勝手に決められていたのを、それだけは絶対に嫌だと抵抗し続けた結果、前日になつてなんとか認めてもらえたからだ。要するに半分は母親の都合による強制、もう半分は自分の意思、というわけだ。

一人で暮らす間は身のまわりのことを全てやる代わりに、銀行のお金を好きに使つて良いことになっている。

夕食を作るのは確かに面倒ではあるが、毎日愛と顔を合わせて食事をするよりは遥かにマシだ。

ちなみにこのことは僕と愛だけしか知らない。口外しないと約束

まで取り付けた。何故口外してはいけないのかと言うと、哲平の耳に届くようなことは絶対にあってはならないからだ。もし彼がこのことを知ってしまうと、ほぼ確実に毎日泊まりに来るだろう。

それは、水槽で優雅に暮らしている熱帯魚を、回っている洗濯機に放り込むのと同じくらいに酷いことだ。愛もその辺は理解してくれているらしく、今のところは誰かに言った様子は無かった。

*

翌日、これとって何か起きるでもなく一日が終わった。愛は朝と放課後に部活のバスケット。相澤さんは生徒会の仕事。哲平はラーメン屋のバイト。皆それぞれ忙しく毎日を動いている。僕はというと勉強の他には家事くらいしかやる事が無いのだった。

けれど、これでいい。少し寂しい気もするけど、今までだっけとところろろ生きてきた。これが僕なんだ。悪くない。

何事も無く一日が過ぎてゆく。

きつと楽しい毎を送る生活なんて、どこにもありはしないのだから。あるとすれば、そう、ずっと先の話。今はただ、大人になるまで我慢していればいだけ。何も無かった一日が終わるとき、決まって僕はそう自分に言い聞かせていた。

毎晩のように恋愛小説を読んでいたせいもあるかもしれない。これらは大抵三十ページ毎に物語が隆起する。僕とは正反対の物語。小説なんて娯楽のための単なる作り話でしかない。それは分かっている。けれど、どうしても寝る前に自分と比較してしまい、悲しい気分になりながら目を閉じるのだ。

朝になると、よせばいいのに、今日こそは自分を変える何か降ってくることを、願ってしまうのだった。

そうしてまた、何事も無く一日が過ぎてゆく……。

「自分を変えるにはどうしたら良い？」

そう哲平に相談したのは四月も残り僅かになってからだった。

「そんなの、動けばいいんじゃない？ 動けば周りも動く、そのうち自分が変わって、最後は全てが変わるんじゃないの？」

哲平はそう言うつと残りの肉まんを口の中に放り込んだ。もごもごと口を動かしながら「よくわかんねえけど」と続けた。

「少なくとも、お前がそう思ってるってことは、動いてないからなんじゃねえの？」

驚いた。いつものように茶化すかと思っていたのに、まさかあの哲平の口からもっともらしい答えが返ってくるなんて。それほど今の僕は弱っているように見えるのだろうか。いつものバナナオレをひとくち飲むと、その心地良い甘さに溜め息が漏れた。

「相澤のことだろ？」

それを聞いて僕は返事を出来ずにいた。哲平の言う通り、相澤さんのことが一番大きい。けど、それだけじゃない……。

僕は今まで何もしてこなかった。哲平の言葉を借りて言うならば、何一つとして自分から動いていない。周りが動くのを、ただひたすら受け入れてきたただけだ。愛に話しかけられて、相澤さんと話せるようになって、哲平に話しかけられて、一人で下校することが無くなった。

居心地は悪くないけど、なんか、進んでいる気がしない。

「よしっ！ じゃあ明日告っちまおうぜ」

「ばっ！ ばかじゃないの！ そんなこと、出来ないよ……！ いっ！」
肩を思い切り叩かれたので、抗議しようとして顔を睨みつけた。案の定、彼は面白そうに顔を歪ませて笑っていた。

「もういいよ、そうやって一生ふざけてる」

僕が怒りを口にした後も、彼はしばらく笑い続け、『ふう』とひと息ついてから再び口を開いた。

「ふざけたわけじゃない。変わりたいなら、そうするしか無えんだよ」

「だからって、明日は無理だよっ」

「そうか？ 明日も明後日も、来月でも再来月でも、どっちだって

「一緒だと思っぜー、俺は」

そこまで言うと、哲平はペットボトルの蓋を開け、中身のお茶をぐびぐび飲み始めた。

半分は残っていたであろうお茶が、みるみるうちに哲平の中へ消えていく。なんとなく気持ちの良い光景だ。

全部飲み干すと、まるで仕事の後の一杯を飲んだ大人のように、大袈裟な息を漏らしてから再び僕を見る。

「だったら、残り時間が多い方がいいだろ」

「そんな簡単なことじゃないよ……」

哲平はスツと立ち上がったかと思うと、五メートル先の鉄でできたゴミ箱に向かって空になったペットボトルを投げつけた。

宙を舞う半透明の緑色が、回転しながら弧を描く。

派手な音を立てて見事にゴミ箱へ収まると、彼は自信に満ちた表情を僕に向けた。

「まっ、お前が決めることだしな。……でもさあ、お前が考えているよりもずつと簡単だと思っただよなあ、俺」

自ら動いた者は、皆哲平みたいになるのだろうか、だとすればきっと彼は正しい。けど、やっぱり少し哲平の場合は極端すぎる気がしてならない。相澤さんや愛はどうなのだろうか。僕は彼女達の行動をひとつひとつ思い返そうとして、すぐにそれを止めた。

いつの間にか視線が下に落ちていて、両手で抱えたパックを見つめていた。

ちびちび飲んでいたせいで、僕のバナナオレはまだ半分以上も残っている。

よし、僕だつて。

パックからストローを引き抜いて、上部の三角に折り畳まれた口を開ける。

哲平の不思議そうな顔に一瞥をくれてから、勢いをつけて胃の中にバナナオレを流し込む。

甘いバナナが喉を駆け抜けて、ごくごくと勇ましい音を鳴らした

……のもつかの間。すぐに苦しくなつて減速してしまう。

……あ、駄目、これキツイ。

バックから口を離すと、勝手に『ぶぁー』と息が漏れる。

かなり減らしたつもりなのに、中身はまだ三分の一も残っていた。やっぱり、簡単にはいかないな。

少し上がってしまった息を、充分に落ち着かせてから哲平を見上げる。

「僕なりに決めてみるよ」

そうしてまた二人で気持ちの悪い笑みを交わした。

きつと、これから僕は変わっていきける。

四月最後の日、新緑に色づいた大きなケヤキが微かに揺れる校舎裏で、相澤さんと向かい合うことができたのは、間違いなく僕が動いた結果なのだから。

そうして相澤さんが変わり、僕が変わってゆく。それまでの僅かな時間は、潰れそうな喉の痛みと、酷く騒がしい心臓の音。それだけが僕だった。

今までどれくらい彼女を想ってきただろうか。登校、午前の授業、昼休み、午後の授業、下校、夕食、部屋、そして登校。多くの時間相澤さんのことを想ってきたはずなのだけど、その僅かな時間以上に苦しいことは無かった。それは、僕が動かなければ知ることの無かった感情だ。僕は変わり始めたんだ。

だから相澤さんに『ごめんなさい』と言われたときも、僕は決して後悔などしなかった。いや、本当は必死でそう思い込んでいただけなのかもしれない。

噂は一日を待たずに校内に広まっていた。

僕が動いた結果、確かに変化が訪れ、それは悪い方向へ進んでいた。相澤さんとは話すことが無くなり、間に立たされている愛までもが元気を無くしていった。哲平は相変わらずの調子だったけど、

僕の方からしばらく放っておいてくれと頼んでしまった。

自ら招いた数年ぶりの孤独。皆とまともに会話をしないまま、無情にも五月の大型連休に入ってしまった。

僕はその連休を、買い置きしておいたインスタント食品を食べ、何度も読んだ漫画を読み、見たくもないテレビを見つめて過ごしていた。

三日目の夕方。何度もチャイムが鳴るので仕方なくドアを開けると、そこには大きく膨らんだビニール袋を持った愛の姿があった。久しぶりに見る愛の私服はどことなく新鮮で、そのなんでもないプリントシャツも、膝まであるデニムのスカートも、彼女の可愛さを充分に引き立てていた。

「遅い！ 重たいんだから早く開けてよねー」

それだけ言うと僕をすり抜けて勝手に家に入ってしまった。彼女が起した風からふんわりと柑橘系の良い香りがして、僕は少しだけうるたえた。

「ちよつ、なに？」

愛を追いかけてキッチンに入ると、丁度テーブルに袋を置いたところだった。

「ごはん、作りに来たよ」

「い、いいよそんなの、いつも自分でやってるの知ってるだろ」

「これが？」

片付けるのを忘れていた即席ラーメンの袋を、指でつまんでひらひらさせていた。

「こんなの食べてるなんて知ったら、私が叔母様に怒られちゃうじゃない。いいから直樹は座ってて」

そう言っただけ彼女はトレードカラーの黄色いエプロンに首を通した。諦めた僕はダイニングチェアに座り、黙って愛を観察した。エプロンの紐を結び終えた彼女は、次にポケットからヘアゴムを取り出し

て口に啞え、両手で髪の毛を後ろに集め、それをゴムで一本に纏めた。本人は知らないだろうが、こうするときの愛が一番可愛い。

小さい頃から見えてきた仕草。愛は結び終わった後に、首を左右に振る癖がある。そうすると、文字通り馬の尻尾のように髪が揺れて、それは可愛くて元気な愛の象徴だった。自然に目を細めて見つめてしまう。

「なによお」

「べつに」

愛が手を洗い始めたところで、僕は袋に目をやった。ごっごっしたいくつかの野菜と調味料が入った袋、そしてパツクにきれいに並べられた車えび。(車えび?)

「あ、あの、愛?」

「んー?」

「何を……お作りになられるのでしょうか?」

「えびぐらたん」

「へ、へえ〜」

「……」

「……」

「作ったこと……あるの?」

「ないよ?」

「ですよね〜……」

愛の手料理を食べる機会は、およそ一年に三回程度訪れる。僕の誕生日や、風邪で休んだ日なんかがそうだ。そしてそのほとんどが悲惨な思い出となっている。

彼女は料理に対して歪んだこだわりを持っている。それは『一度挑戦した料理は二度と作らない』というものだった。曰く、家で作らせてもらえない分、料理を作る数少ない機会を、同じものを作つて無駄にしたくないから、だそうだ。

愛にとつての料理とは、レパートリーが全てであり、質より量なのだ。更に付け加えると、いつもやたらと難しい料理に挑戦する。

そんな彼女の料理が美味しいわけがなく、数時間後の僕は新鮮な車えびと共に悲しい運命を辿ることだろう。

(なんとかしないと……)

僕は丹田呼吸法を数回繰り返し、覚悟を決め、とびきりの笑顔を作り上げた。

「愛、ありがとう。僕のために料理を作ってくれるなんて、とっても嬉しいよ。よかったら僕も一緒に……」

「やーだ。邪魔だからあっち行って」

(終わった……さようなら、車えび……)

僕はよろよろと居間にたどり着くと、ちから無くソファに倒れこんだ。

およそ二時間後。いつの間にか眠ってしまった僕は、愛に揺さぶられて目が覚めた。

またあの夢を見てしまったせいで、体中に嫌な汗を掻いていた。僕の顔を心配そうに覗き込んでいる愛に気付いて、僕はわざと明るく振舞った。

「やっと出来たの？ もうお腹減って死にそうだよ」

「う、うん。でも直樹、平気なの？」

「なにが？ あ、ごめん、ちよつと着替えてくるね」

そう言い残して僕は二階の部屋へ急いで戻った。

(最悪だ、こんなときにあの夢を見るなんて、本当に最悪だ……)

驚く程の速さで弾む鼓動を無理やり抑えながら、新しいシャツに着替え、鏡の中の僕と対峙した。

酷い顔だった。元々白かった顔は、更に青みが増し、まるで死人のように映っている。こんな顔で戻ったら愛を余計に心配させてしまう。どうして良いか分からなくなった僕は、ひとまずベッドに腰掛けた。

「直樹のせいじゃないよ」

驚いて顔を上げると、ドアの前に愛が立っていた。

「絶対、直樹のせいなんかじゃない」

愛はやさしく呟くと、僕の隣に座った。

「直樹は頑張ったよ、だから、堂々としていいんだよ」

愛の切ない声で、僕の心に絡み付いていた何かが砕けてしまう。

同時に今まで塞き止めていたものが、濁流となって体中を駆け巡った。

気が付くと、僕は愛をきつく抱きしめていた。次々と溢れてくる涙を見せないように、これ以上格好悪いところを見られないように。驚いた彼女は一瞬身悶えたが、すぐに諦めたように動かなくなり、それからやさしく頭を撫でてくれた。愛が僕の頭を撫でる間隔は昔と全く同じだった。それはとても心地よくて、辛いことや悲しいことが少しずつ拭われていく感じがした。

けれど昔とは明らかに違う部分がひとつだけあった。僕らはもう子供ではない、男と女だ。それに今の僕は前と違い、自分で決めて動くことができる。

腕を解いた僕は、欠けてしまった心を埋めるように、愛を見つめ、震える唇に向かってゆっくりと顔を近付けた。

愛はすぐに体を離し、驚きと哀れみが混ざったような複雑な表情で僕を睨みつけた。

その目はうつすらと潤んでいて、いつもの元気な丸い目ではなくなっていた。何故だか分からないが、それは数日前に相澤さんに与えられた苦しい感情を僕に思い出させた。

「どうして……」

愛は蚊の鳴くような声でそう言うと、僕が口を開くのを待たずに家を飛び出していった。

その後の僕は自身の重い体に耐えられず、座ってさえいられなかった。体を横にしても尚、自責の念に押し潰されそうになり、泣き声なのか呻き声なのかよく分からない音が口から漏れ出してくる。その音が誰にも聞こえないように、布団に顔を押し付け、ただ収ま

るのを待ち続けるしかなかった。

また失敗してしまった。

そう思った瞬間、苦痛に歪んだ父さんの顔が脳裏を過ぎる。さっき見た夢と同じ顔だ。途端に激しい痛みが頭を襲った。

(もう、嫌だ……)

ふらふらになりながら一階へ降りると、いつもの薬を取り出し、キッチンで水を汲んで、それを飲んだ。振り返るとテーブルの上には冷めきったグラタンが二つ置かれていた。

『どうして』と愛は言った。もう一度考えてみるが、僕にはその答えが思い浮かばなかった。

(どうしてあんなこと……)

この間まであんなに相澤さんを好きだったのに、慰めに来てくれた愛に、僕はなんてことを……。

(最低だ)

寂しそくに並ぶ二つのグラタンを見つめると、再び涙が溢れ、頬を伝い、床に落ちた。

そこで僕は思い出してしまう。

『リセットを使用すると、あなたが後悔を抱いている時間から人生をやり直すことができます』

僕は無心で玄関に行き、隅に置いてあるダンボールからリセットを取り出した。

『使用方法はとても簡単。リセットを手に持ち、やり直したいと願うだけ』

もう一度リセットに描かれた不思議な地球の絵を見て、そして願った。

(やり直したい……)

次の瞬間、リセットが光りだしたかと思うのと同時に、家の中が真っ白になり、体が硬直した。何が起きたのか分からずにいると、やがて白い世界がゆっくりと暗闇に変わってゆく。

*

気が動転した。

ここは、ここは家の中じゃない。どこか別の場所。

慌てて辺りを見回すと、かなり広い空間に手すりの付いた椅子が規則的に並んでいて、その先にはえんじ色の幕が降ろされた舞台らしきものがあつた。

(どこかの、劇場……?)

もう一度全体を見渡し、誰もいないことを確認すると、僕は舞台に向かって緩やかな階段を下り始めた。

最前列までたどり着くと、今度は出口を探した。すると視界の端で何かが動いたのが見え、再び体が硬直する。恐る恐るその方向に目を向けると、そこには銀色の綺麗な髪を背中まで伸ばした僕と同じ年頃か、いくつか年下と思われる女の子が立っていた。

彼女はこの劇場の客なのだろうか、黒いシックなワンピースドレスに身を包み、腰には白いリボンを合わせ、肘まであるロンググロブまで付けていた。慌てて自分の服装に視線を向けると、相変わらず僕はダサイ部屋着のままだった。当然彼女も僕の存在に気付いており、目が合うと、落ち着いた足取りでゆっくりと僕に向かって歩き始めた。

(うわっ！ ど、どうしよう！)

彼女は微かに銀色の長い髪を揺らしながら、緩やかな歩調を狂わすことなく近付いてきている。僕はどうしていいか分からず、慌てふためきながら彼女を待つことしか出来なかった。

目の前まで来ると、僕の顔を見て微笑んだ気がした。その瞳は吸い込まれそうな深い青色をしていて、ずっと見ていると自分が汚い

存在に思えて逃げ出したくなってしまう。

沈黙と恐怖に耐えかねて、思わず情けない声が口をついて出ていた。

「あ、あの、ここは」

言葉が通じていないのか、彼女はやさしい表情のまま、僅かに顔だけを傾けた。

「僕は、その……死んだ……の？」

すると今度は軽く握った手を口元に当てて、楽しそうにクスクスと笑い始めた。

（外国人なのかな……）

笑い終わると再び僕を見つめ、そして、両手を広げて丁寧なお辞儀をした。

「ようこそ、リセットの世界へ」

人形のような外見とは裏腹に、とても瑞々しい透き通った声で、はつきりと、確かにそう言った。

「さあ、あなたのやり直したいと願う場所へ、お連れ致しますよう」
そう言うとき彼女はゆっくりと小さな手を差し出した。

「ちよ、ちよっと待って。いったい君は……、それに僕は」

「難しく考えることはありませんわ。あなたが考えるよりも、ずっと簡単なことなのです」

（難しくない？）

「さあ、お手を」

（簡単？）

考えても考えても答えが出ないことばかりだ。どれが正解でどれが間違いかなんて、どうせ今の僕にはどんなに時間があっても分からないんだ。そして何よりこの女の子はきっとその答えを持っている。

（それなら……）

僕は考えるのを諦め、差し伸べられた手に答えを求めた。

（え？）

彼女の手はグローブ越しにも分かるほどヒンヤリと冷えていて、それはひとつの恐ろしい考えを僕の頭にもたらした。彼女は怖がっている僕を諭すように、にっこりと無邪気な笑みを浮かべていたが、急に魂の抜けたような表情に変わってしまった。

その刹那、世界が一瞬震えたかと思うと、足元の床から光の輪が現れ、僕を筒状に包みながら浮き上がってきた。そしてその光が通過するのと同時に僕の足が消えていった。気が動転し、腕を引いて彼女の手から離れようとすると、僕の手を握る力が急に強くなった。「怖がらないで」

「で、でもっ！ これ！」

既に光は腹部まで到達しており、気のせいか、ぬるま湯に浸かっているかのような、徐々に体温が奪われていく感覚がしていた。

(あっ……)

光が胸を飲み込んだとき、頬に冷たい物を感じて顔をあげると、彼女がもう片方の手で僕の頬をやさしく撫でていた。

その手のひらは確かに冷たく、相変わらず人間のように思えなかったが、不思議と彼女の温もりを感じた気がして、とても安らいだ気持ちになった。

(もう、なんかどうでもいいや)

光の輪が顔を飲み込む前に、自ら目を閉じて、何もかもを受け入れるつもりで全身の力を抜いた。

「戻りたい時間を思い浮かべてください」

その声を聞いて目を開けると、そこは光の無い世界で、身体の感覚は有れど目で捉えることは出来なかった。本当に目を開いているのかすら怪しく感じる程に、全てが闇そのものだった。

戻りたい時間。そう思った瞬間、目の前にぽうつと丸い窓が現れた。縁がぼんやりと曖昧なその窓の先には、部屋で愛が僕に哀れむような目を向けている光景が映っていた。

(違う、もっと前だ)

そう願うと、映像は巻き戻り、部屋でのことを飛び越えて、愛が料理を作っている場面で停止した。

(もっと……)

再び映像が動き出すと、今度は物凄い速さで巻き戻る。

(あの日の最初に……)

映像は音も無くピタリと止まり、登校している僕を映し出した。

「この時間でよろしいのですか？」

「……はい」

相澤さんへの告白。あれさえ無ければまたいつもの平凡な日常に戻る事が出来る。それが僕の願いだった。

「それでは次に、残したい記憶を三つ、お選びください」

「残したい、記憶、ですか？」

「はい、残さない記憶は全て消去されます」

「そう……」

しばらく考えてから、彼女が居るであろう方向に言った。

「残さなくていいです」

「……」

「むしろ、消してもらった方が……と言っか……その」

「よろしいですね」

「は、はい」

「それではお連れ致します」

彼女がそう言い終わると、『ブウン』と機械の唸るような音が耳元で聞こえ、さっきも感じた、ぬるま湯に浸かるような感覚を足先に感じた。

両脚、お腹、胸と、徐々に這い上がってくる感覚に少しだけ恐怖を感じていると、再び彼女の声が聞こえた。

「また、お会いしましょう」

「え？」

「……頑張ってね」

そこまで聞こえると、ぬるま湯は頭まで完全に包み込んでしまい、最後に聞こえた彼女の不可解な応援だけを残して、僕は考える力を失った。

二章 【正解】（前書き）

【登場人物】

東条 直樹 とうじょう なおき

情けない自分を変えたい願う平凡な高校二年生。真面目で大人しい性格。その中性的な顔立ちから、女子達の間ではひっそりとした人気がある。

ある日、誰かの手によって『リセット』という機械が送り届けられる。

渡瀬 愛 わたせ あい

直樹の幼馴染。中学では疎遠になっていたが、高校で再び話すようになる。明るく活発な女の子で、バスケット部ではエースとして活躍している。

本人は料理が得意だと思っているが、その味はとても不味い。

相澤 美玲 あいざわ みれい

直樹が憧れを抱いている女性。才色兼備なお嬢様。愛と仲が良く、そのおかげで直樹と話すようになる。生徒会役員の仕事が忙しく、皆とゆっくり話をする機会は少ない。

園塚 哲平 そのづか てっぺい

直樹とは親友なのだが、愛とは犬猿の仲。いつもバカなことばかりしているが、たまに大人な一面を見せたりする変な奴。
部活や委員会には入らず、いつもバイトをしているらしい。

立花 優歌 たちばな ゆうか

二年始業式の日、桜学へ転校してきた不思議な女の子。初対面にも拘らず美化委員の相手として直樹を指名する。無口な性格で、近寄

りがたい雰囲気をしている。

二章 【正解】

二章 【正解】

ふと、校門の脇で桜の枝を眺めていた。

四月最後の日、桜の花はとつくに散っていて、その代わりに茶色と緑が混ざったような新芽がちらほらと見て取れた。

「なおき〜」

朝だというのに哲平の声は疲れているようだった。哲平が傍まで来ると、僕は並んで門をくぐり昇降口へと向かった。

心配してくれと言わんばかりに哲平が大袈裟な溜め息をつくので、仕方なく心配してあげることにした。

「なに、どうかしたの？」

「聞いてくれよお、昨日珍しく姉貴が家に帰ってきてき、彼氏と別れたから慰めるとか言っつて、俺の部屋で酒盛りを始めやがったんだよお」

確か哲平のお姉さんは自分の借りたアパートで彼氏と同棲中だったはずだ。つい最近知ったからどれくらい続いた仲なのかは知らないけど、同棲するぐらいだ、きつと長年付き合っていたに違いない。「それでももう泣くわ絡むわ暴れるわで、結局五時ぐらいまで付き合わさず全然寝れてねえんだよお」

「うわあ、それはご愁傷様、今日一時間目から体育だったよね」

「うお〜い、まじかよお〜、ぜってえ何か買ってもらわないと浮かばねえよおれ〜」

確かに哲平が可哀想に思うけど、きつとお姉さんも、思い出のたぐさん詰まった部屋に昨日だけは帰りたくなかったんだろう。そう考えると、哲平と一緒に僕もその場で慰めてあげたかっと思つた。教室に着き出席確認が始まると、立花さんが病欠だとマリ夫が言った。彼女が学校を休むのは初めてだ。あの一件以来、取り立てて

彼女とは何も起きていないのだが、何故だか少しだけ心配になっていた。

体育の時間、僕らは砂場に伸びた高い鉄棒で、ひたすら懸垂を続けるクラスメイトの呻き声を聞きながら、遠くのコートで行われている女子のぎこちないバスケを眺めていた。

すぐに周りと違う動きの二人に気付く。相澤さんと愛だ。愛はそもそもバスケ部員なので上手なのは分かるが、相澤さんも愛に負けないほど華麗にボールを操っている。勉強だけでなく運動も得意だとは聞いていたが、改めて見ると本当に非の打ち所が無い人間だと認識させられる。

丁度相澤さんが放ったシュートが決まり、愛とハイタッチを交わしているのが見えた。

「いいなあ、あっちは遊びかよお」

そう言っつて、砂の上に寝転がる哲平に、昨夜散々考えて決めたことを宣言した。

「今日、告白するよ」

「……まじ?」

「マジ」

ただ哲平にそう告げただけなのに、僕の胸は窮屈になっていた。

僕が冗談で言っているわけじゃないと分かると、哲平はそれ以上何も聞かずに、僕の背中を強く叩いた。

「頑張れよ」

「うん」

昼休みがやってきて、相澤さんと愛が弁当を食べ終えたのを確認すると、僕は覚悟を決めて近付き、二人の視線を浴びて固まった。

「どうかした?」

愛のもっともな疑問に答えるべく、やっとの思いで喉から声を搾り出した。

「あ、相澤さん」

「わたし？」

不意を突かれた相澤さんは、切れ長で美しい目を何度も瞬きさせながら僕の顔を見上げていた。

「少し話があるんだけど、いい、かな」

「えっ？」

二人は座ったまま驚いた顔をお互いに見合わせて、それから愛だけがひとつ、こくりと頷いた。それを見た相澤さんは再び僕に顔を向けて返事をし、ゆっくりと立ち上がった。

教室を抜けてから、相澤さんに確認をとる。

「静かな所でも構わないかな？」

彼女は少しだけ考えた後に、「いいよ」と言った。

僕は相澤さんがついてきているか不安になり、彼女の姿を何度も確認しながら、昨日言おうと決めた台詞を頭の中で繰り返していた。しばらく歩いて目的地に到達すると、大きく深呼吸してから、勢い良く振り返った。

ここは哲平サボリスポットの中でも一押し場所。

滅多に人の訪れない校舎裏、通称『裏ケヤキ』だ。

その名の通り、二階まで高く育ったケヤキが誰に見せるでもなく等間隔に植えられていて、新緑に染まったケヤキの葉が、春の終わりを告げるさわやかな風に吹かれて歌っている。

哲平のサボリスポットの中で僕が一番好きな場所だ。

きっと振られてしまっても、良い思い出として残ってくれるはずだ。

だからこの場所を選んだ。

「相澤さん」

「はい」

きつと、彼女は既に気付いている。なのに、どうしてこんなに落ち着いていられるのだろうか。僕の手はひどく汗ばんでいて、緊張で足が震え、今朝から続いている胸の高鳴りは、たった今頂点を迎

えているというのに、相澤さんは全く姿勢を崩すことなく、ただ、僕をじっと見据えて次の言葉を待っていた。

(言わなくちゃ……)

「僕……」

(もう待っているだけの人生なんて嫌だ……)

「相澤さんが」

(自分の力で変えるんだ！)

「好きですっ」

僕と相澤さんの間を一陣の風が通り抜け、ケヤキの葉がひとしきり大きな音をたてて揺らめいた。

瞑っていた目をゆっくり開けると、相澤さんは先程と寸分違わぬ凜とした表情で僕を見続けていた。変わっているのは彼女のウエーブのかかったやわらかそうな髪が、ゆらゆらと揺れていること、それだけだった。

その途端、情けなく震えてしまった声や、瞑ってしまった目、手に掻いている汗、それから、勇気を出して口にした言葉でさえも、とても恥ずかしく思えて、この場から消え去りたい衝動に駆られてしまう。今更ながら、僕と相澤さんが不釣り合いだということを確認してしまっただの。

(喉が痛い……、胸が苦しい……)

二つの痛みに手を当ててしまわぬよう、必死に堪えていると、相澤さんの口がゆっくりと開き始めた。もう答えなんて聞きたくない。そんなの分かりきっている。きつとそんな想いが彼女の動きをスロ―モーションに変えてしまっているのだろう。

「ごめんなさい」

相澤さんは濁すことなく、はっきりと僕にそう返事をした。

「今は男の人とお付き合いますとか、そういうの考えられないの」「僕はもう彼女の強い眼差しに耐えられず、自分の靴だけを見るしかなかった。

「本当に、ごめんなさい」

そう言うと彼女は僕に頭を下げ、この場所から離れていった。残された僕は、収束していく胸の鼓動と共に全身の力が抜けていくのを感じて、ケヤキの根元に腰を下ろし、葉っぱの合間から射す木漏れ日を追って視線を彷徨わせていた。

(これで変わるのかな……、こんなんで、変わるのかな……)
しばらくそうしていた僕は、立ち上がろうと腕に力を加えかけて、それを止めた。

(五時間目が終わるまでこうしていよう。)
十分に過ぎ、五時間目を知らせるチャイムが鳴り、さらに十分に過ぎた頃、胸ポケットの携帯が震えた。

きつと哲平が愛だろう。そう思っ上着の内ポケットに手を入れると、携帯の他に、もうひとつ硬いものが指に当たった。僕はつかえながらその二つを取り出し、両手に持って見比べた。

いつの間に入れたのだろうか、折りたたみ携帯の半分ほどの厚さしかない白い物体。それは数日前に、誰かのいたずらで届けられた『リセット』と呼ばれる機械だった。

(どうしてこれが、ここに……?)
得体の知れない気持ち悪さを感じ、僕は、携帯を開いて受信したメールを読むことにした。

『件名：ちよつと』

『今どこにいるの？ 早退？ 美玲に聞いても何も答えないんだけど、一体何の話したの？ 何か落ち込んでるっぽいよ？』

愛から送られたハテナマークばかりのメールは、相澤さんが何も言わなかったことと、彼女が落ち込んでいることを教えてくれた。どうして相澤さんが落ち込む必要があるのだろうか。悲しいのは僕だ、相澤さんじゃない。相澤さんはさっきまでそうしていたように、凜としていればいいんだ。生徒会長を振ったときも平然としていたじゃないか。

僕は、傷つけてしまったのだ。きつと、相澤さんは全てを自分のせいに感じているに違いない。僕に告白されたことも、僕が落ち込んで授業をサボっていることも、明日から訪れる気まずい空間も、全部自分のせいだと思っっているんだ。

違う、相澤さんのせいじゃない、相澤さんから笑顔を奪ったのは僕だ、悪いのは全部僕だ。そんなふうにならなくて欲しくなんかない。こんなことなら……。

その瞬間、手元が急に激しい閃光を放った。思わず目を閉じるが、薄い瞼では強烈な光を遮ることはできず、僕は白い世界に引きずり込まれてしまった。

*

しばらくして、恐る恐る目を開いてみるが、白以外何も見えず、僕は瞬きを繰り返したが、果たして本当に瞼を閉じているのかすらもあやふやなほど、内も外も、全てが白だった。

そのうち僕は諦めて、視力が回復するのを少しでも早めようと、目を閉じてそのときを待つことにした。

どのくらい経っただろうか、次第に光が弱くなり、瞼の裏に赤黒い色に戻ってきたのを充分に確認すると、ゆっくりと時間をかけて目を開けた。

目の前に現れた光景を見て、元々混乱していた頭は、更に混乱していった。見渡しては考え、また見渡しては考えを繰り返すが、どうしても答えが見つからない。

延々と広がる白い砂浜と水平線、遠くの空に浮かぶ入道雲、そしてその方向から絶え間なく吹きささぶ強い風、更にその風が運ぶ潮の香り、海水の動きに合わせて聞こえる穏やかな波の音。

そこは紛れも無く、海だった。

それをやっと認識すると、海と反対の方向を見て、僕がどうやってここに来たのか、どうやって帰ればいいのかを交互に考えた。

ふと背後で砂が鳴り、気配を感じて振り返ると、およそ海には似つかわしくないヒラヒラのレースがついた純白のブラウスに、裾の広がったポリウレーム感のある紺色の派手なスカートを合わせた小さな女の子が立っていた。足元を見ると白いニーソックスにキラキラ光るエナメルの靴まで履いている。その風貌よりも更に驚いたのは少女の髪だ。彼女のそれは僕達とは明らかに違う鮮やかな銀色をしていたのだ。

歳は小学生か中学生か、そのどちらとも見えた。どこかの国のお姫様のように、他の人間の手によって結われたのであろう仰々しい複雑な髪型が幼さを強調する一方、微動だせずはこちらの様子を伺う様子はひどく落ち着いていた雰囲気をもし出して、それは成熟した大人のそれに近いものを感じさせた。

不思議の国のアリス。物語の内容にはそぐわないかもしれないけど、言葉として表すのなら、それが一番合っている気がした。

「あ、あの、ここは」

僕はその少女に頼るしかなく、思い切って通じるか分からない僕の言葉を投げかけた。すると少女は海と同じ青色の澄んだ目を僅かに細め、にこやかな笑顔になって答えた。

「お帰りなさい、直樹」

「……は？」

予期せぬ挨拶に全身が硬直し、唯一動くことのできる頭でなんとか少女の言葉の意味を理解しようとする、考えるなど言わんばかりに僕の頭は警鐘を鳴らし始めた。

少女はそんな僕の状態を知ってか知らずか、お構いなしに次々と言葉を並べ始めた。

「直樹がここに来るのは二度目、そうね、前にここへ来たのは経過時間で言うと五時間と十七分前ね」

ぼかんと口を開けている僕を、面白がるように無邪気に笑った。

「ふふふっ、ごめんね、こうなるのは分かってたんだけど、つい意地悪しちゃった。でも、きちんと説明書を読まない直樹が悪いのよ

「？」

「一体、君はさっきから何のこと……それに、何で僕のこと……」

「リセット」

「リセット？」

そう言われてようやく僕は両手に携帯とリセットと呼ばれる物体を握り締めていることを思い出した。

「これのこと？」

「そ」

「……」

僕の顔を覗き込んでいる満足気な表情と、手に持ったりリセットを交互に見て再び記憶を探り始めると、少女は『もお』と呆れたような溜め息を吐いた。

「はいはい、なんにも覚えて無いんだもんね、しょうがないからお姉さんが説明してあげるわ」

(子供じゃん……)

「そこ、うるさい」

「え？」

ひとつ咳払いをしてから偉そうに腕を組んで、少女は説明らしき言葉の羅列を並べ始めた。

「リセットとは、記憶を電子化し、外部記憶媒体への転送、そして更に超光速による外部間の転送を繰り返すことによって、過去への通信を可能とさせるシステムの総称であり、直樹が今持っている記憶変換と外部転送機能を持った小型端末の名称でもあるわ」

「……はあ」

「まあ、言ってみれば簡単なタイムマシンのことよ、過去限定のね」「過去限定の、タイムマシン……」

「そーゆーこと、分かった？」

「ああ、まあ……なんとなく？」

再び大きな溜め息をつかれてしまった。

「それと、直樹がそんなふうになっている理由だけど」

人差し指を立てて少し怒ったような顔になる。

「一度のリセットで持って帰れる記憶は三つまで、そして前回のリセットで直樹は何も持って帰らなかった。だからリセットのことや自分が過去へ戻ったことすらも忘れてしまったってこと、そして全ては安易な直樹の考えと、説明書を最後まで読まない横着な性格がそうさせたのよ」

そう言い放つと、再び腕を組んでフンと鼻を鳴らした。まず間違はなく怒りを表しているのだろうけど、なんだか拗ねた子供のようで、僕から見たら可愛いだけだった。

僕はその可愛らしい少女を見つめながら話をまとめてみた。以前僕はここを訪れ過去へ戻った、しかしどういふ考えがあつてか何も記憶に残さないまま戻ったおかげで、リセットのことや少女のことを忘れ、ひいてはまた同じ理由でここに来ることになってしまったに違いない。

そして彼女は僕の名前を知っているのに、僕は名前どころか会ったことすら何一つ覚えていないのだ。この少女が怒るのも当然だ。

「あの……」

「なに」

「なんか、ごめんなさい……」

「うむ、よろしい、他に何か質問は」

「えーと、もしかしたら前に一度聞いてるかもしれないんだけど……、君の名前は？」

「はあ？　なんで最初にそこ？」

「だって、なんて呼んだらいいのか」

少女は何故か『うーん』と唸りを上げてから、知らない漢字を読み上げるように、ぼそつと名前らしき言葉を呟いた。

「……マリ？」

「まり？」

「あー、違うわね……マリー……うん、マリーって呼ぶといいわ
なんだか今決めたような口ぶりだ。」

「外国人なの？」

「そうね」

「日本語ペラペラなの？」

「そうよ」

「どこの国？」

「彩の国」

「え？」

「……っさいなあ！ どこだっていいでしょ！ 他に質問無いのっ？ バカ！」

マリーのこと以外で、という事だろう。それにしてもなんだか理不尽な怒り方にも感じたが、これ以上機嫌を損ねても良いことは無いと思い、素直に質問を変えることにした。

「じゃあ、ここは一体何処なの？」

「海よ」

なんだか少し疲れてきた。

「えーと……なんで僕は海にいるの？」

「リセットを使ったからでしょうがー、なんなのあんた、バカなの？ 死ぬの？」

(そんなに言わなくても……)

「ちよ、そこなんだけど、リセットを使うとどうして海に来ちゃうのさっ」

「ああ、なんだ、そういうことか。それはね、ここがリセットの設定空間であって、リセットを使用した人間は必ずここで設定をして過去へ行くの、そしてこの空間は私の意のままに変えることができる。今、ここが海なのは私がそうしたからよ」

「ふうん、なんで海？」

「なんだって良いでしょ」

面倒臭そうに僕の質問を切り捨てると、マリーは腕を組んだままの体勢で、僕とは反対方向の海を向いて黙ってしまった。

(なんだかヒドイよこの子……)

「最後に、ひとつ聞いても良い？」

「なに」

「夢、じゃないんだよね……」

「……そう、夢なんかじゃない。直樹は人生を間違えた。やり直したい、無かったことにしたい、元に戻りたい、そう考えたからここに来た……。そして今からそれを直しに行くのよ」

「そっか……」

それを聞いても、もう驚きはしなかった。むしろ少し喜んでいて自分がいた。もしこれが夢なら、どこからが夢だったのか、考えるのが怖かったからだと思う。相澤さんに振られたところなのか、二年の初日に皆と同じクラスになれたところなのか、『なよ助』とバカにされているところなのか、それとももつと前から夢を見続けていたのか……。

そうじゃないと分かっただけで、すんなりこの不思議な世界を信じてしまう自分がとても情けなく思えて、ひとりでに笑いが込み上げてくる。

（もういいや、ならとことん楽しんでみよう。僕が考えるよりも、もつと世界は簡単なんだから）

「分かった、じゃあ、後はどうすれば良い？」

マリーは勢い良く振り向くと、少し意外なものを見るような顔をしてから、最初に見たときと同じ、とても可愛い笑顔になった。「じゃあ、セットアップを始めるわね」

そう言つと、ずいっと僕の傍に来て、『はい』と無邪気に手を差し出した。

「ん？」

「掴んで」

わけも分からず、手に持った携帯とリセットをポケットにしまったから、マリーの手を握る。

（冷たっ）

彼女の手は驚くほど冷たく、それは、寒い季節に付ける銀の腕時

計を連想させた。

「いくわよ」

「う、うん」

僕が答えると、彼女の目の雰囲気が変わった。光を失った、とか、生気を失った、という表現の方が近いかもしれない。しばらくその様子を心配そうに見つめていると、世界が一瞬震え、足先に違和感を感じた。

見ると、足元から光の輪が現れ、筒状に僕を包んで昇って来ていた。

「わっ！」

よく見ると、光の輪が通過した後には僕の足が残っておらず、代わりに、ぬるま湯に浸かっっていく感覚だけが残っていた。

「大丈夫、直樹はこれが二度目なのよ、怖いなら目を閉じてなさい」
「う、うん……」

それに従い、固く目を閉じてこれが終わるのを待つことにした。ぬるま湯はそのまま両脚を飲み込み、腹部、胸部と上がってきて、首のところまで来ると僕は息を止めた。

頭をすっぽり包み込まれたところでマリーの笑い声が聞こえた。

聞こえたというよりも、さっきまでの会話と違い、頭に直接響いている感じがした。

「バカね、大丈夫よ、息してごらんなさい」

その声に安心して目を開けると、さっきまでであった砂浜や海、それから空までもが消え、代わりに闇だけが広がっていた。周りを見渡してみるがもちろんマリーの姿も見つからず、急に心細くなってしまう。

「そのまま息しないつもり？ 死にたいの？」

そうだった、あまりにも世界が急変していたので息をするのを忘れてしまっていた。僕は恐る恐る空気を吸ってみると、きちんと空気が存在していることに安心し、思い切り深く呼吸をした。

「じゃあ、まず戻りたい時間を思い浮かべて」

相変わらずマリーの姿は無く、声だけが聞こえるのだけど、さっきよりもずっと近くに彼女がいるような気がした。なんと言うか、彼女と身体を重ねているような感じがして、なんだか無性に恥ずかしくなる。

「バカ！ 何考えてんのよ！」

「え？ あ、ごめんっ」

反射的に謝ってから、僕がもっていた世界を思い浮かべると、目の前にぼんやりとその思いが映像になって現れた。丁度相澤さんに告白しようとしている場面だったので、再び恥ずかしくなってしまう。僕はその恥ずかしさを誤魔化すために、しどろもどろになりながらマリーに話し掛けた。

「あ、あのっ！ どこまで戻れるのっ？」

「それも説明書に書いてある」

「ごめんなさい……」

「今年の四月七日」

「えらく中途半端だね」

「そう制限されているのよ、でも四月七日までだったら何度でも戻れるわ」

僕は少し考えた。何故四月七日なのかはこの際置いていて、何度も戻れるのなら限度まで戻った方が多くのことをやり直せるんだ。

(なら……)

そう思うのと同時に、目の前の映像は逆再生を始めたかと思うと一気に加速し、あっという間に四月七日の朝らしき僕の姿を映して停止した。

「いいのね？」

「うん」

「じゃあ次、持って帰る記憶を三つ選んで」

「えっと、そこがいまいちよく分からないんだけど」

「つとにしようがないわねえ」

溜め息までしっかり頭に響いてくるので、少し笑いそうになって

しまつ。

「いい？ 一回で覚えるのよ？」

「はい」

「持ち帰る記憶とは、あるひとつの事柄に対する知識でも良いし、物事を経験した記憶から、それを避けるための行動意識でも良い。各定義や範囲等は自己の決定に任されているわ」

「うん……え？」

「ばかつ！ 要は何でも良いってこと、今日の天気のことだって良いし、テストの回答でも良い。それに行動意識を付け足して『あの日は午後から雨が降るから傘を持っていこう』とか『テストの答えを紙に書いてカンニングしよう』っていうのも有りよ」

マリーはそこで一旦説明を区切り、ひとつ息をついてから「その代わり」と説明を続けた。

「記憶容量の制限があつたり、持ち帰るのが禁止されている記憶なんていうのもあるの。記憶容量については詳しく言っても分からないだろうから、容量を超えそうになったら私が言っわ。禁止記憶とは犯罪行為、またはそれに準ずる行為のこと、道徳とも言っわ。そのあたりは全て私が審査することになつてる」

「犯罪に準ずるって？」

「例えば女の子に乱暴してからリセットしたいとか、賭け事の結果を知って大金持ちになるとかそういう類のことよ。そういうことを目的としてのリセットは禁止されてるの、あくまで道徳的に人生をやり直してちょうだい」

「よく分かつたよ」

道徳的に人生をやり直す、という言葉に物凄い違和感を感じたが、マリーの性格を少し理解してきた僕は、それについて深く追求しないことにした。

「それと」

「ん？」

「あんたバカだから、ひとつ助言しておいてあげる」

「はあ……………」

「これからは毎回、一つ目の記憶は『リセットに関する知識』にしなさい。また一から説明するのなんてぜえっ……………ったいに嫌だからね！」

「分かりました……………って、これも考えるだけで良いの？ マリーに言うの？」

「考えるだけで良いわ」

「分かった、じゃあいくよ？」

「いちいち聞くな」

「……………」

「はい、次」

マリーの心無い催促に少し躊躇いつつも、相澤さんに告白するこ
とで、彼女を傷つけてしまったことを思い浮かべた。

「次、最後」

最後の記憶が思い浮かばなかったので、空いた記憶を使い、ある
二つのことを試すことにした。多分それは、今後リセットの世界で
生きていくにあたり、とても重要なことだと思う。

「……………へえ、直樹って結構強欲なのねえ。 この三つで良いの？」

「え、今の、良いの？」

「うーん、まあギリってとこかな。駄目なら駄目って言うわよ」

「分かった。じゃあその三つで頼むよ」

「じゃ、転送するね。 あ、さっきと同じ感覚になるけど、うる
さいからいちいち驚かないでね」

「はい、すみませんでした……………」

彼女の言うとおりに、一瞬機械の起動音みたいなものが聞こえると
ぬるま湯が這い上がってくる感覚を足に感じた。僕はさっきと同じ
ように、その感覚が通り過ぎるのを目を瞑って待つことにした。

頭が飲み込まれる間際、少し寂しそうな声で「またね」と聞こえ、
銀色の美しい髪と青い瞳が特徴的なマリーの姿が思い浮かび、僕も
心の中で「またね」と言った。

ぬるま湯が頭まで到達すると、彼女が頭から抜けていくのを感じ、そこで急激な眠気に襲われ、僕は意識を失った。

*

朝、目覚ましの音で目が覚めると、鮮明すぎる記憶が頭の中で騒ぎ立てていた。日付を確認するために携帯を探して辺りを見回すと、サイドテーブルの上にその姿を捉え、さっきまで僕が居た世界が夢でないことを悟った。隣にはリセットも一緒だったのだ。

それから携帯を手に取り開いてみるが、確認するまでもなく液晶の画面は今日が四月七日であることを示していた。

間違いない、僕は数分前までリセットの世界でマリーと話をしていた。きちんとマリーの話を一言一句を思い出せる。それは、『リセットに関する知識』とはリセットの使用方法や原則のみならず、あの世界の中で起きたこと全てが含まれているということだ。

(それにしても……)

僕はマリーとの会話を思い出して頬を緩ませていた。少女と言えども愛以外の女の子(それもとても可愛い子)とあんなに会話をしたことなんて久しぶりだった。そんな小さなことで心を弾ませながら、いつものように登校するまでの一連の行動をとった。

八時丁度、狙った通りに玄関を出ると愛が飛び出してきた。早速僕に気付いて大きく手を振りながら「おはよー」と言っている。僕は記憶を辿り、あの日と寸分違わぬ動きで彼女に近付き、同じ語句で話しかけた。

「おはよう。今日は遅いんだね」

もちろん返ってくるのも同じ言葉であるはずだ。

「始業式の日から朝練があるわけないでしょー」

(うん、これでいい)

そして学校へ向かって歩き出し、次に愛から発せられるはずの言葉を待った。

「クラス分けどうなるかなあ、また一緒だったりしてー」

そう言って、記憶の中の彼女と全く同じ表情で笑い始めた。

僕はそうなることを知っていたので、自信満々の表情で彼女に言った。

「きつと一緒だよ」

「えっ」

元々丸い目を更に丸くしてきよんとしたかと思うと、慌てるように前を向き直した。

「なっ、直樹らしくないよそれ、……へんなのー」

(う……、なんかこれはこれで……)

やや視線を落として歩く愛は、少し照れているように見えるのだが、そんな表情をされてはこちらの方が恥ずかしくなってしまう。変な沈黙に耐えられず、僕は慌てて口を開いた。

「えつとほら、選択授業一緒だからさ、哲平も相澤さんも、きつと一緒にになれるよ。なんてね、あははー」

「そ、そうね……。そうよね！ あ、でもあのバカだけは嫌、死んでも嫌」

(はは……哲平のせいで死人が……)

その後の愛は哲平との喧嘩の話や、冬休みの間に起きた出来事の話を楽しげに話してくれた。そして校門まで来ると新入生のためのアーチを一緒にくぐり、新しいクラス表も一緒に眺めた。期待通りの結果に分かりやすく飛び跳ねて喜ぶ愛の姿を見ると、僕まで胸が躍るような気分になった。しばらくして掲示板に群がる生徒の中に相澤さんの姿を見つけた愛は、勢いよく相澤さんに抱き付くと、今度は二人で喜び始めた。

僕はこのとき、三つ目の記憶を使った実験の結果を分析していた。

僕が三つ目に記憶したものの、それは《四月七日の出来事》だった。それを記憶したのには二つの理由がある。

一つ目は記憶容量の制限を調べるためだ。僕が三つ目の記憶を思

い浮かべたとき、断られるかと思っていたのだけど結果は大丈夫だった。更にそのとき『ギリギリ』だとマリーは言ってくれた。それで充分、要は一日丸ごとを記憶できるのだ。

制限と言うからどんなものかと思えば、僕の予想を軽く上回る大容量だった。

二つ目の理由は僕の行動に対する他人の反応が、一体どのようにして変わるのかを試すためだ。変えたいこともあれば、変えたくないこともある。それをどう調整すれば良いのかを知っておくことはとても重要だ。

さつき家を出たとき愛と挨拶を交わしたが、僕はそのとき記憶と全く同じ行動をとった。そうして返ってきた愛の行動も記憶と同じ。そこまでは予想通りだ。

問題はその後のこと。

愛がクラス分けの話を振ってきたとき、僕はあえて記憶とは正反対の返答をした。もちろん愛も違う反応をする。それはあたりまえなのだけど、その会話以降の彼女は記憶と合致しない点が多々見受けられた。会話の内容から行動までそのほとんどが僕の知らない愛の姿。

たった一言違う言葉を掛けただけで、この世界は大きく変わってしまう。更に言うと、僕が変えてしまった愛が記憶とは違う行動をとる事によって、彼女に関わる人間の行動までもが変わってしまうのだ。

これでは四月七日の出来事を全て記憶してもあまり意味が無いということだ。自分の思い通りに人生を変えるには、案外慎重に考えて行動しなくてはならないのかもしれない……。

それからの僕は教室に着くまで色々と考え、この記憶と少しズレが生じた世界を、あまり深く考えず普段通りに過ごすことに決めた。と言うのも、四月七日を記憶したのは実験がしたかっただけで、特に変えたいと思うことなど無かったからだ。

哲平も合流し、四人で教室に入ると、ある人物が目に入り急に胸がざわついた。

綺麗な黒髪の哀しげな表情をした女の子、立花優歌だ。

(立花さん…… そうだ！ 美化委員！)

およそ一時間後に身に降りかかる災厄を思い出し、どうにか回避しなくては考えた。マリ夫が教室に現れ出席を取り始めると、やはり彼女のところで止まる。

「立花、ちよっと立ってくれ」

「はい」

静かに彼女は立ち上がる。

「春休み中にこっちに越してきた立花優歌さんだ。今日から転入ということになる。勝手が分からないだろうから、皆よろしく頼む」
ひそひそと会話が漏れ始め、マリ夫が座ることを許可し再び点呼に戻る。

そのときだった。

立花さんは立ったときと同じように静かな動作で座った。

(あれ……?)

起こるべきことが起こらなかった。彼女は僕を睨むどころかチラリともこちらを向かなかったのだ。注視していたから間違いない。これは一体どういうことだろうか。僕は彼女に変化を与えていないし、あの日とズレてしまった愛や相澤さん、それに哲平だってずっと僕の近くにいたから立花さんに話し掛けてなどいないはずだ。もしかしたら直接話し掛けなくても世界が変わってしまうのかも……。しかし、それにしてもマリ夫の言動や行動が記憶と一致し過ぎている。これはいよいよ訳が分からなくなってきた。もっとこの世界の理を理解しなくては……。

新入生の入学式を終えて再び教室に戻ると、やはり同じタイミングで各委員決めが、相澤さんを進行に迎えて始まった。

文化祭実行委員で愛が元気良く立候補し、黒板に名前を書くとき

ラチラと僕を見て相方にと指名している。美化委員を逃れるためならここで手を挙げてても良いのだが、変化の加わった立花さんは僕の名前を書かないかもしれない、それにやっぱり委員会など面倒臭い。どちらかというところっちが本音だ。僕は再び首を横に振った。

そして問題のとき。予想通り美化委員で進行はピタリと止まるが、記憶よりも若干早く立花さんが立候補した。彼女は立ち上がり黒板に名前を書き始める。僕は意識を集中してその様子を眺めていた。

『立花優歌』と書き終えたとき、チョークの動きが止んだ……のもつかの間、すぐに次の文字を書こうとした。（まずい！ どうにかしないと！）

「はい！」

気付いたら大声で立候補していた。

立花さんを除く全ての視線が僕に集まってくれたおかげで、彼女が既に『東』を書き終えていることはバレていないようだ。急いで立ち上がり教壇に駆け込むと彼女は黙ってチョークを渡してくれた。黒板には既に『東条』と書かれていた。

「ありがとう、直樹くん」

相澤さんは可憐な笑顔で僕にお礼をした。立花さんの不思議行動を阻止しただけではなく、相澤さんの好感度まで上げてしまったようだ。美化委員に立候補してしまったのは不本意だが、これはある意味正解かもしれないと思った。

それにしても立花さんは一体頭の中で何を考えているのだろうか。彼女と一緒に皆の拍手を浴びながら、いよいよそれを確かめてみたいと考えていた。

HRが終わると、いつもの三人が僕の机に集まった。

「直樹、おまえ何？ どういう風の吹き回し？ もしかして転校生のことが気に入ったのか？」

「いや別に、ただなんとなく」

言って後悔した……。

愛が『バン』と机に片手をついて、見下すような視線を僕に向け

た。

「ふうん、なんとなくで幼馴染よりも知らない子を選ぶんだあ、そうよね、あの子可愛いものねえ」

「ち、違っ」

「こおら、愛、直樹くんが困ってるじゃない。直樹くんだって悪気があってそうしたわけじゃないくらい分かるでしょう?」

「むー、だってえー」

「そ、そうだよ！ 僕はほら、相澤さんが困ってたから、助けよう……」

「えっ?」と声を揃えて女性二人が言う。

しまった……。二人ともそれぞれ複雑な表情を浮かべ、居心地の悪い雰囲気の流れ始めてしまう。それもそうだ、相澤さんが困っているからといって、誰もやりたがらない美化委員に立候補するだなんて好意を抱いている人間でないと普通はしない。それも人一倍面倒なことを避けてきたこの僕が、だ。

反射的に哲平に助けを求めると、彼は微笑ましいというような表情で僕を見ていた。

(助けて)(任せとけ)的な視線を交わすと、哲平は急に「ああ!」と何かに気付いたような声を上げた。

「やっべ！ 今日えりんぎの特売日だ！ 急ぐぞ直樹!」

哲平は僕の襟を掴むと「そんじゃ、こいつ借りてくぜ!」と叫んで外に連れ出してくれた。

「じゃ、じゃあまた明日っ」

引つ張られながら慌てて二人に挨拶をすると、彼女達はぽかんとしたままひらひらと手を振ってくれた。

(哲平……。えりんぎの特売は無理があるよ……)

昇降口まで来ると僕らは一息ついてから、靴に履き替えて下校した。

「直樹ー、ありゃ駄目だ。あそこはもっところ、目をキラキラさせてだな」

そう言いながら哲平は鞆を地面に置くと、おもむろに片手を胸に当て、もう片方の手を空中に彷徨わせながら実演を始めた。

「僕が何故美化委員に立候補したかだつて？ 学校を美しくするために決まっているじゃないか！ 君達はもつと美しい場所に居なくてはいけない、だから僕はそうするんだ……美しい花は、美しい大地に咲くものなんだぜっ（エコー効果）」

最後にひと際大袈裟なアクションを織り交せて哲平劇場は幕を降ろした。気付くと僕らを囲むように生徒達が群がってきている。

「ご、ごめん哲平……。母さんが哲平と遊んじゃ駄目って言うから……またっ！」

そう言い残し、痛い視線から逃げ出すと、背後から「ああっ！ 僕の美しい花よ！」という声が聞こえたので更にスピードを上げた。本当に哲平はまずい状態なのかもしれない、そう考えると彼の両親が不憫に思えてならなかった。

帰りの途中、僕は遠回りをしてスーパーに夕食の材料を買いに来た。ひとつずつ食材を丹念に選び、買い物かごへと入れていく。ふとエリンギが目に入って仰天した。

値札の横に黄色いポップが加えられており、そこには間違いない。『今日の特売！』と書かれていたからだ。哲平は日頃から嘘を嫌う性格だと知っていたけど、まさかここまで徹底していたとは……。疑ってしまったことに少し申し訳ない気持ちになり、僕は野菜炒めの材料にエリンギを追加した。

あらかた食材を選び終わって適当なレジに並び、待っている間に今日一日のことを思い返してみた。

やっぱり相澤さんは綺麗で優しかった。でもどんなに願ったって彼女と付き合うことは叶わない。自分の予想ではなく、現に一度振られているのだから……。

それにしても、今朝の愛はいつもと違う可愛さがあったなあ、な

んだかああいう愛も悪くない。それと放課後のあの態度、あれはひよっとして僕が立花さんに近付いたことへのやきもちだろうか、もしそうだったら……。

レジが進み、僕の番が来てもその考えは止まらなかった。

思い返せば愛と僕は小さい頃本当に仲良しだった。四六時中彼女の無茶な提案に引きずり回されて迷惑していたが、他に友達のいない僕のことを、可愛らしいくりくりした目でずっと見ていてくれた。いつしか彼女のが好きになっていて、僕の方から好んで彼女の後を付いてまわるようになっていたなあ……。

（あれ、愛と遊ばなくなつたのって何でだった？）

「二千五十二円になります」

「あ、はい」

慌てて財布からお金を取り出そうとしてハツとした。

（足りない……）

財布の中には千円札が二枚と、一円玉が数枚入っていただけだった。

「あ、あの、すみません」

「はい？」

頭に三角巾を巻いた不機嫌そうなおばさんの顔が、みるみるうちに怪訝そうな表情に変わってゆく。

「やっぱりそのエリンギいいです……」

決死の覚悟でそう言うと、おばさんは面倒臭そうに無言でレジ金額を修正し始めた。後ろに並んでいる客の視線が背中に痛い。僕は恥ずかしくてたまらなくなり、瞬時に顔が赤くなってしまった。少しでもその様子を誤魔化すために携帯を取り出して眺めることにした。

（あつ！）

ポケットから取り出したのは携帯ではなくリセットだった。考えたときには遅く、既にリセットは眩しく光りだしていた。

（僕のばかあああああああああ！）

しばらくして目を開けると今度はずいぶん狭い空間だった。とい
うより部屋だった。

ぎゅうぎゅうに敷き詰められた固そうなソファと無駄に大きなテ
ーブル、隅には大きな液晶テレビが置いてあり、部屋全体が黄色電
球によってぼんやり照らされていた。何度か見たような光景だ。
(カラオケボックス?)

「ご名答っ!」

驚いて振り向くと、見たことのない学校の制服を着たマリーが、
ソファとは別の丸椅子に座って僕を指差していた。

「歌ってく?」

「い、いや、遠慮します」

「なーにより、折角用意したのに」

マリーはがっかりしたように肩を落とした。

「マリーって中学生だったの?」

「へ?」

彼女は相変わらず日本人らしからぬ銀色の髪と青色の瞳をしてい
たが、体格から言葉遣いに仕草、それになんといっても中学っぽい
制服を着ている。これはもう間違いないだろう。僕は今まで中学生
に馬鹿にされていたのだ。マリーがどんなにこの世界で特別な存在
だとしても、もう敬語を使う必要は無いと思った。

「へ、じゃなくて、それ、中学校の制服だろ?」

「あ、本当だー、うっわあー、懐かしいなあー」

立ち上がって自分の背中を見たり、スカートの裾を広げたりして
いる。

「ねえ! どお? 似合う?」

「お前なあ……そんなことより……」

「に・あ・う・か! って聞いてんの!」

「は、はいつ、とても」

(あれ……?)

僕はとことんこういう性格らしい。嬉しそうに一通り自分の制服姿を眺めた後、もう一度丸椅子に座ってから彼女はこう言った。

「私だつて詳細まで自分で考えてるわけじゃないの、なんてゆーか場面を想像するっていう感じかな、あとのことはなんか適当に決まってるのよねえ」

「ふうん」

「それにしても」

「ん？」

「随分しようもないことでリセットを使ったわね」

目を半開きにして僕を見る。まるで汚い物でも見るような目だ。

「げ、何で知ってるの」

「つたりまえでしょー、私はこの世界の……えーと、アレよ」

「どれ？」

「ん……管理する人？ 違うなあ……あ、分かった、番人！ そ
うよ記憶の番人！ 英語でなんて言うんだっけ」

「ガーディアン？ だつたよな」

「ひよわー、格好良い！ 決まり、メモリーズガーディアン！」

「あはは……」

(なんだか前にも見たようなやり取りだな……名前を聞いたときだっけ)

「私はメモリーズガーディアンだから直樹のことは全て分かるので
す。今あなたは『名前を聞いたときと同じだ』と思いましたね」

マリーに指をさされるのと同時に声を失ってしまった。

「……」

度々心の中を読まれている気がしていたけど、本当に読めるのか……。これはかなり怖いことだ。ここにいるときはなるべく変なことを考えないようにしなくては……。

「そゆこと、だから直樹がここに来た理由も全部お見通しなわけよ」

お得意の腕組スタイルで『ふふん』と鼻を鳴らす。

「まあ、確かにあれは恥ずかしいから直樹の気持ちも分かるけど、携帯とつ、間違えるとかっ……ぷふっ！　つくははははっ！」

急に噴出したかと思うと「あー、だめ！　これッボる！」とか言いながらお腹を抱えて笑い転げている。そんな中学生の姿を見ると、自分が惨めに思えて泣きそうになってくる。

散々笑った拳句の果てに、目じりに溜まった涙を拭ってようやくマリーが話を再開した。

「ふう……ま、そういうことだから別にどんな使い方しても良いのよ、好きに使って恥ずかしくない自分になりなさい」

そう言つとまたケラケラ笑い出した。もう嫌だ、とにかく話題を変えないと本当に泣いてしまいそうだ。

「あの、マリー」

「ん？」

「ちょっと聞きたいんだけど、僕が干渉してない人も、前と違う行動をとることってあるの？」

「んー、基本的には無い、かなあ？　でもまあ、干渉してないかなんて分からないわよ？　極端に言つと、空気や雰囲気ですら物事を変える要因になり得るものね」

「そっかあ」

てことはやっぱり、いつの間にか僕は立花さんに干渉していたんだ……。

「色々試してみることもね、私でも分からないことだってたくさんあるもの」

「うん、分かった。……ところでさあ」

「なあに？」

「何度も僕がリセットを使って……その……」

「何よ？　ハッキリ言いなさいよ」

「えと、マリーは迷惑じゃない、かな？」

「なあんだ、そんなこと？　別にそんなの気にしなくていいわよ。」

むしろ私はちよこちよこ直樹が来てくれた方が……」

「え？」

喋っている途中で固まったかと思っただら、急に立ち上がってテレビの前まで歩きだした。

「いい……、暇つぶしになるのよ」

そう小さな声でそう言うと、なにやらカラオケのリモコンらしき物を持って戻って来る。

「え、歌うの？」

「なによ、ここを何処だと思ってるの？」

「はあ……」

しばらくリモコンを操作した後、カラオケ本体に向かって曲を転送した。テーブルの上に置いてあったマイクを取ると、スピーカーから少し前に流行った女性シンガーのバラードが流れ始めた。

僕は黙ってマリリーの歌声を聴くことにしたのだけれど、次の瞬間驚いて言葉を失っていた。およそ彼女の憎まれ口からは想像も出来ない程にその歌声は美しく、歌詞に沿って彼女の心が伝わってくるようだった。大人が書いた恋愛の詩を、中学生の格好をしたマリリーがこんなにも切なく表現できるなんて、凄いを通り越して尊敬してしまう。

僕は、曲が終わっても感動して言葉が出なかった。

(……………すごい)

「えへへー、ありがとっ」

「あっ、うん、本当にすごいよ、感動しちゃった！　綺麗な歌声だねえ」

言うってから顔が熱くなる。褒められてマリリーまでもが赤くなり、少し甘酸っぱい沈黙が流れてしまった。

自分でも不気味な程すららと褒め言葉が出てきたことに少々驚いたが、隠したって無駄なのだからこれでいいんだと思い、これからもマリリーの前では思ったことを素直に話すことに決めた。

ちらっとマリリーを見ると、いつの間にかグラスに入った茶色いド

リンクをストローで飲んでいた。よく見ると僕の前にも同じ液体の入ったグラスが、ストロー付きで置かれている。

「私のおごり」

「これ、マリーが出したの？」

「そう、意のままにできるって言ったでしょ」

リモコンで曲を探しながら、彼女はそれが当たり前のごとくに平坦な口調でそう言った。

「へえー、すごい、じゃあ、いただきます……」

グラスを手に取りひとくち飲んでみると、それが真正銘僕の知っている世界のウーロン茶だということが分かった。

「あれ……？　じゃあ……」

「何よ、ウーロン茶嫌いなの？」

「そうじゃなくて、何でいちいちリモコン使ったりするの？　思いのまま動かすことが出来るんでしょ？」

「気分よ」

「気分って……」

「別になんだっていいじゃない、次、入れないなら私歌うからね」

「うん、歌って」

マリーは立て続けに四曲歌い、僕は一曲終わる毎に素直な感想を伝えた。

楽しかった。こんなに楽しいと感じたのは何年振りだろうか。ふと子供の頃に愛と遊んでいた記憶が脳裏を過ぎり、ハツとなった。

そうか、これはあのときにそっくりだ。

楽しいと素直に思う気持ち、もっと居たいと願う気持ち、きっとこの感情もマリーに読まれてしまっているのだろうけども、もう恥ずかしくは思わなかった。けれどいつまでもここに居るわけにはいかない。僕には僕の世界がある。それに、これからはいつでも好きなときにここへ来ることができる。

そんなことを考えながらウーロン茶を飲み干し、僕は元の世界へ戻ることを彼女に伝えた。マリーは笑っていたが、設定空間に入る

ときに彼女の手の冷たさを感じて、なんだかとても寂しい気持ちになっってしまう。

別れ際、今度はきちんと口に出して「またね」と言った。

*

あれからの僕は、事あるごとにリセットを使用した。

あるときは女の子に気に入られるため、あるときは成績を上げるため、あるときは軽い怪我をしたとき、またあるときは特売商品を買い逃したとき。リセットを使う理由がどんどん低レベルになっていき、その度にマリーと楽しい時間を過ごしていた。

五月の半ばに差し掛かった頃、ここまで全てを完璧にこなしてきた僕は、とんでもない事をしてしまう。

あろう事か、全国一斉学力テストで満点を叩き出してしまったのだ。教科は国語、数学、英語の三つ。その全てが八万人中トップという結果だった。これにはさすがに教員を含め桜学全体が驚いたらしく、僕の名前は一気に有名になってしまった。

数日後に僕だけ問題を変えたテストをやらされる羽目になってしまったが、調子に乗った僕はもちろん満点をとってやった。その結果を知った校長は、僕に特別授業を受けることを勧めたが、僕はそれをあっさり断った。

その頃から僕の世界は急転してしまった。一年生から三年生、様々な女性に交際を申し込まれるようになったのだ。中には相澤さんと同等とも思える女の子も居たが、僕は敢えてその全てを丁重にお断りした。

普通なら同性に嫌われるところだが、僕は男子にも気に入られる振る舞いをとっていたため、むしろその硬派な姿勢が素晴らしいと尊敬の眼差しを向けられていた。

ただ一人、立花さんだけは絶対に自分から話し掛けてくれることは無かった。むしろ前よりも冷たくなっている気がする。美化委員

の仕事るときですら、たまに無視される程だ。相変わらず彼女は何を考えているのか分からないが、今の僕にとっては些細なことではない。

立花さんがどうあれ、夢に描いていた生活を実際に手にしているのだ。何も怖くない、失敗してもすぐに正解へと導き出すことができる。僕にはリセットがあり、マリーがいつも待っていてくれる。

今なら……。

五月が終わろうとしたとき、僕は再び『裏ケヤキ』で相澤さんに告白をした。

「相澤さん、僕は君が居たからこそまで頑張ることができたんだ。ずっと前から好きでした」

僕は本当のことを言ったつもりだ。嘘はついていない。全ては相澤さんに気に入られるためにそうしてきたのだ。

けれど返ってきた答えは以前と全く同じだった。僕はリセットを使い、違う方法で何度も告白を試してみたが、どんな言い回しで告白しても全ては同じ。

『今は男の人とお付き合いすることが出来ない』、その一点張りだ。

食い下がってその理由を問いただしてみたが、彼女はその胸の内を一切語ってくれなかった。一体彼女はいつになったら付き合うことを許すのだろうか、そして何を隠しているのだろうか……。

僕は告白すること自体を諦め、再び自分の株を上げる作業へと戻っていった。いや、むしろそれからの僕は前よりも貪欲に正解だけを選ぶようになった。成績や性格だけでなく、容姿にも人一倍気を使った。お陰で僕の名前は他校にまで届くようになり、交際の話も次第に多くなっていた。

相澤さんが振り向いてくれるまで、僕はずっと続けるつもりだ。今では皆が僕を慕ってくれている。どんどんやらなくてはいけない仕事が増え、毎日のように誰かの相談が舞い込んでくる。いつしか

愛や哲平、相澤さんとも話す機会が減っていき、僕らのやり取りはメールが主流になっていった。

そして梅雨の長雨が降る頃にはそれすらも少なくなり、七月に入ると遠慮のない夏の太陽が、重苦しい雲と一緒に、僕らを繋いでいた線までをも消し去ってしまった。

そんな夏休み前のある日のこと。

僕はいつものようにリセットを多用した一日を終え、一人で昇降口から出たところを名前も知らない女の子に呼び止められ、恋愛相談を持ちかけられた。

普段通り、僕は女の子の喜ぶ答えを探し当てるために、ポケットの中のリセットを握り締めた。

そのときだった。愛と哲平、そして相澤さんが談笑しながら僕と女の子の脇を通り過ぎてゆく……。そのまま三人は僕に脇目も振らず外へ出て行ってしまふ。

(僕に気付いていないのだろうか……)

そう思った瞬間、愛と目が合った。そしてすぐに逸らされてしまふ。

他の二人はともかく、間違はなく愛は僕に気付いていたのだ。そして敢えて僕に声を掛けなかった……。

これは一体なんだろう。僕は完璧な世界が欲しかっただけだ。こんな、こんな世界が欲しかったわけじゃない。僕はどこかで何かを間違えてしまったのだろうか。だったら何で誰も教えてくれないんだ？ 哲平はいつだって僕を助けてくれたじゃないか！ 愛はいつでも僕を守ってくれたじゃないか！ 完璧な相澤さんは今の僕の気持ち分かるんじゃないのか？

誰か……教えてよ……。

頭を垂れ下げた僕を、目の前の女の子が心配そうに覗き込んできた。

次の瞬間、その顔は真っ白な光に遮られ、どこかに消えてしまった。

*

もう何度訪れたか分からないリセットの世界。僕は無意識にその扉を叩いてしまったらしい。いつものように辺りを見渡すと、すぐに今までとは違う雰囲気だと気が付いた。

平原、全てが平原。それは地平線から僕を通って反対側の地平線まで、あてもなく広がっていた。他には太陽の無い不思議な青空だけ。こんな不気味な空間は初めてだ。マリーの身に何かあったのだろうか？僕は心配になって声を出した。

「マリー？　ねえ、どこ？」

返ってくるマリーの声は無く、いよいよ心細くなり始めたとき、ようやく背後に声が聞こえた。

「ここよ」

「マリー、これは……」

そう言って振り返ると、そこにマリーの姿は無かった。

代わりに僕と同じか、いくつか年上に見える女性が静かに立っていた。彼女はとてもシンプルな純白のワンピースだけを身に付けており、足にすら何も履いていなかった。そしてマリーと同じ銀色の髪は腰まで伸びていて、澄んだ青色の瞳はマリーと同じだった。

「マリー、なの……？」

彼女は弱々しい微笑みを浮かべ、現れたときと同じように静かに頷いた。

「その姿、どうしたの？」

僕の質問に答えようと口を開くが、音は出てこなかった。それから彼女は顔を歪ませたかと思うと、そのまま首を下に垂れて黙り込んでしまった。

（何か哀しいことでもあったのだろうか？）

そう思った瞬間、彼女は肩を震わせて顔から一粒の雫を地面に落
下させた。

「えっ……ちょっと」

どういふわけか大人の姿になったマリーは、次々と涙を落として
いき、仕舞いには両手で顔を拭いながら少女のように泣き出してし
まった。

「どうしたっていうの？　ねえマリー」

「……なさい……っ」

「えっ……？　なに？」

「ごめん……なさいっ……うう……」

……どうして謝るんだ？　……どうして泣く？　それに、その姿
は……。

僕はどうすれば良い？　くそっ！　何も分からない！　なんでそ
のくらい自分で考えられない！　何が完璧だ！　これのどこが完璧
なんだよ！

「ごめん、なさい……ごめ、んなさい……」

「謝らないでよっ！」

尚も泣き続けながら、尚も謝り続けるマリーを、僕はただ困惑し
ながら見守ることしか出来なかった。意味不明の悔しさと哀しさと
苛立ちが一度にやってきて、それを抑え込むのがやっとだ。

もっいつそのこと目と耳を塞いで、抗うことを止めてしまおうか
……、そんなふうを考え始めた頃、ひとつの思いが涙と一緒に流れ
落ちた。

この世界でだけは絶対に後悔したくない。

僕はいつから固まっていたのか分からない身体を奮い立たせ、泣
き続けているマリーに一步ずつ慎重に近付き、そして

本当は抱きしめてあげたかった……けれど一度も女性を抱きしめ
たことのない僕にそれは無理なことだ……。僕にできることは、唯
一触れたことのある彼女の手に、僕の手を合わせてあげることだっ
た。涙を拭う両手を僕の両手で包んであげると、彼女は少しだけ泣

き止み、そして再び泣き出した。

彼女の涙の理由ばかりか、自分の涙の理由すらも分からないまま、ただ僕らは感情を吐き出し続けた。

僕の世界も彼女の世界も本当に分からないことだらけだ。けれど、ただひとつ、彼女の酷く冷たい手も、握り続ければ温かくなることが、分かった……。

しばらくして僕が泣き止むと、マリーも泣き止んだ。

手を離そうとすると、逆に彼女の方が僕の手を掴んできた。驚いて顔を覗くと、彼女は最初と同じ弱々しい笑顔をしていた。

「このまま、送るね」

「……………うん」

光の輪に包まれ設定空間に入った僕は、すぐに戻るべき時間を決めた。

「本当に、この時間で良いの？」

「うん、この時間で良い」

「そう……………分かったわ」

それから三つの記憶を選び、自分の世界へ転送してもらった。

結局マリーが何故大人の姿だったのか、何故泣きながら謝っていたのか、それを聞くことは出来なかった。……………違う、聞かなかったんだ。自分のことも分かっている僕に、人の気持ちなんて分かっていることなんか出来やしない。それならば、きちんと分かっているようにしてから改めて聞こうと思う。だから、まず自分と正面から向き合うことに決めたのだ。

そしてそれはこの時間からでないかと駄目だ。そうじゃないと本当の意味で自分のことを分かったとは言えない。

……………
(マリーの世界で出来たんだ……………。僕の世界で出来ないはずが無い……………)

僕は意を決して口を開くと、三人に届くように大きな声で言った。

「愛！ 哲平！ 相澤さん！」

一度離れてしまった視線が、再び僕の方を向いてくれた。

「僕も、一緒に……、一緒に帰りたい！」

三章 【巻き添え】（前書き）

【登場人物】

東条 直樹 とうじょう なおき

情けない自分を変えたい願う平凡な高校二年生。真面目で大人しい性格。その中性的な顔立ちから、女子達の間ではひっそりとした人気がある。

ある日、誰かの手によって『リセット』という機械が送り届けられる。

渡瀬 愛 わたせ あい

直樹の幼馴染。中学では疎遠になっていたが、高校で再び話すようになる。明るく活発な女の子で、バスケット部ではエースとして活躍している。

本人は料理が得意だと思っているが、その味はとても不味い。

相澤 美玲 あいざわ みれい

直樹が憧れを抱いている女性。才色兼備なお嬢様。愛と仲が良く、そのおかげで直樹と話すようになる。生徒会役員の仕事が忙しく、皆とゆっくり話をする機会は少ない。

園塚 哲平 そのづか てっぺい

直樹とは親友なのだが、愛とは犬猿の仲。いつもバカなことばかりしているが、たまに大人な一面を見せたりする変な奴。
部活や委員会には入らず、いつもバイトをしているらしい。

立花 優歌 たちばな ゆうか

二年始業式の日、桜学へ転校してきた不思議な女の子。初対面にも拘らず美化委員の相手として直樹を指名する。無口な性格で、近寄

りがたい雰囲気をしている。

マリー

リセット空間に現れる謎の美少女。とてもわがままで直樹を恰好の遊び相手に仕立て上げる。多くのことは分からないが、とても美しい声で歌う。

三章 【巻き添え】

三章 【巻き添え】

七月十三日、気温三十五度、晴れ。

「こおんの暴力女がつ！ ちったあ加減しろ！」

「あんたが変な物見せるからでしょ！」

「お前が勝手に覗いたんじゃねえか！ このドスケ、ぐはっ！」
再び愛の鞆が哲平の顔面に突き刺さる。

「きゃあ！ 園塚君、鼻血が！」

「ふん、いやらしいことばっか考えてるからよ、触るとうつるからやめときなさい美玲」

「お……おま……おまえなあ……」

うだるような暑さの中、いつもの騒々しいやり取りが繰り広げられていた。

帰りのHR後、おもむろに僕の前にやって来た哲平は『夏休みのアバンチュールに向けて』という前置きの後、いきなり破廉恥な雑誌を広げた。僕が目のやり場に困っていると、そこに愛と相澤さんが登場してこの事態になった訳だ。

「うらあああああ！」

哲平が漢らしい怒号を上げるや否や、辺りはスローモーションに包まれた。

固く握られた右手拳が愛の顔面に近付いていく。哲平の表情は本気だ。

（まズい！）

その反撃に驚いた愛はギュツと目を瞑った。その刹那、拳がピタリと停止したかと思うと、愛の膝元に何かがものすごい速さで接近しているのを捉えた。速すぎてブレてしまい、はっきりと確認出来ないが、状況から見てそれはきつと哲平の左手だ。

(そんな……まさか！ 止める哲平、死ぬつもりか！)

僕は止めることを哲平に目で訴えた。だが、そんな必死の制止も彼には届かず、無情にもその左手は愛のスカートを掴んでしまった。(もう駄目だ、声を出してでも止めないと！ 今の彼を救えるのは僕だけだ！)

そう思つて口を開きかけた瞬間、哲平と目が合った。

……彼は優しい笑顔を僕に向けていた。

僕は何故か彼が遠くに行つてしまふ気がして、途方も無く悲しい気持ちになつていた。いつも僕の一步前を歩いていた哲平、バカだけど根は優しく、いつもピンポイントで的確なアドバイスをしてくれた。僕は君が居たからこそまで来れた、そんな気さえするよ。お姉さんには僕から伝える……。辛いけど、そのくらい親友としては当然だろ？ だから……。

さようなら、哲平……。

スローモーションが解かれ、愛のスカートが勢い良く捲れ上がった。僕は目を逸らすつもりが、思いの他ばっちりと彼女を守る神聖な布を拝観してしまった。

いやらしさを微塵も感じさせない純白の生地。可愛らしさを強調する小さな黄色いリボン。その神聖な布は、心なしか愛に履かれて幸せそうにも見えた。

次の瞬間、愛は女の子として当然の声を上げ、舞い踊るスカートを押さえつけてしまった。

数分後、僕はヒリヒリする頬を撫で付けながら、例によって自分が招いた余計な仕事を片付けるために、ジャージに着替えて昇降口へと向かつていた。

あの日、一番大事な物をリセットに頼らず自分の力で取り戻した。かといって相談事や雑用の依頼を無碍にする訳にはいかないの、登下校や休み時間を常に哲平達と一緒に過ごしていた頃のように

戻れていないのが現状だ。

けれど、僕が必死になつて彼らを呼び止めたことで、一緒に居たという気持ちは分かつてもらえたと思う。相変わらずメールでの会話の方が多いが、今では忙しいときこそ、その確かな繋がりを嬉しく感じられるようになった。

それにしても……。

放課後の午後三時半とは、一日を通して一番暑い時間帯だ。こんな時間にこれからする作業のことを考えると途端に足が重くなる。

美化委員の仕事は、キツイ、汚い、臭いの三拍子が揃った仕事が多い。そしてそのどれもが強制参加となっている。その為、他の自由参加の仕事はほぼ全員がパスする次第だ。参加人数がゼロだと知った美化委員を担当する教師は、ご丁寧にもわざわざうちの教室に足を運んでまで僕を直接指名してきたのだ。

もちろん快く引き受けたが、正直なところ僕にだつて嫌だという気持ちが無い訳ではない。しかし、僕を頼って毎日飛び込んでくる仕事は、僕がリセットを所持したスーパー高校生である以上当然の責務だと思っている。

仕事内容は中庭の修繕。差し当たり今日の作業は花壇の入れ替え準備だ。

『今日の』というのは明日も、という意味だ。先生の話によれば、今日は枯れた花の除去と土の入れ替え。明日は届いた花の植え込みをするらしい。

靴に履き替えてから外へ出ると、既に先生と二名の生徒が作業をしていた。

レンガ敷きの立派な花壇。その上に乗った男の教師が古い土をスコップで取り出し、ゴミ袋の中に次々と入れている。

二人の生徒は華奢な体つきで両方ともすぐに女の子だと判る。きちんと軍手をはめているが、やっている作業はというと、一人はゴミ袋の口を広げていて、もう一人は立ってその光景を見ているだけだ。

パツと見たところ、花壇は昇降口を挟んで両脇に三つずつ配置されている。計六つ、それをこの四人でやるのか……。しかも半数は女の子ときたもんだ。これを終わらせるには結構な時間を要するな……。

そう思っていると、額の汗をタオルで拭った男の先生が僕の姿に気が付いた。

名前は思い出せないが三十代前半の若い先生で、確か三年の生物を教えている。なんだかのんびりした性格らしく、委員会でも生徒の方が進行を仕切っている程だ。

「おおー、来たか東条君。助かるよー、今日はよろしく頼むねー」
教師の声と共に二人の女生徒の顔が僕に向けられる。

(げっ！)

あろうことか二人の女生徒の内の片方、ゴミ袋の口を広げている方が僕の苦手な立花優歌だったのだ。

僕はなるべく平然とした表情を崩さないようにして三人に挨拶をした。

「よろしくお願いします」

「おいつすうー」

「……」

ジャージの色から三年の先輩と思われるショートカットの女の子がフランクな挨拶を返してくれたのに対し、立花さんは僕に何か言うでもなく、黙ったまま頷いただけですぐにゴミ袋に視線を戻してしまった。

(ははは……相変わらずか……)

彼女は今、男子生徒の間で結構有名な存在だ。その端整な顔立ちと無口な性格から、黒髪の撫子や愁いの姫君といった異名で呼ばれ、一部のコアな層に人気があると耳にしたことがある。

確かに傍から眺めている分には害は無く、正直可愛いとさえ思える。けど美化委員と一緒に仕事をする立場からすれば、そんなのは彼女の良い面しか見ていない男子達による偶像の産物でしかない。

「それじゃあ星野ー、君は東条君と一緒に反対側の花壇をやつても
らえるかな」

「あいよあーティーチャー」

星野と呼ばれた先輩は元気良く敬礼をして僕に屈託の無い笑顔を
向けた。

彼女はリンゴの形をしたヘアピンで茶色く染まった髪を留めてい
た。僕は露になったその可愛らしいおでこや言葉遣い、仕草から元
気ハツラツ娘といった印象を受けていた。

「東条君、そのスコップと軍手使っていいからね」

先生はのんびりとした口調でそう言いながら、花壇の脇を指差し
た。

「分かりました」

僕は軍手をはめてスコップを拾い上げると、星野先輩に準備が出
来たことを目配せして知らせた。

「うしつ、そんじゃー行こっか東条氏」

「はい」

そう言つて、僕達は昇降口を挟んで反対側の花壇へ歩き出した。

途中、チラリと振り返り立花さんの様子を伺つてみたが、彼女は微
動だせずに先生の作業を見ているだけだった。

花壇に着くと、僕らの他にも作業をしている生徒達がいることが
分かった。

屋上から垂れ下がった『目指せ！ 全国大会！ 桜学水泳部』や

『今年も夢の舞台へ！ ブラスバンド部』等と書かれた垂れ幕を覚
束ない手付きで外そうとしている二名の女生徒だ。まったく桜学の
男子生徒達は一体何をしているのだろうか。なんだか少し腹が立つ
てくる。

「それじゃあ僕がやりますんで、先輩はゴミ袋を広げてて下さい」

「うむつ」

早速花壇の上に登り、スコップで土を掘って、その土を星野先輩
が広げている袋にそっと入れていく。案外重い。僕は疲れないよう

にスローペースでその作業を繰り返した。

「いやあー、噂に名高い東条氏と一緒に作業が出来るなんて、光栄の極みであります」

いきなりの変な褒め言葉に驚いて先輩を見ると、キラキラした瞳ともろに目が合ってしまった顔の温度がほんのりと上昇してしまう。

「そんな、よして下さい……よつと」

僕は手を動かしながら先輩の会話に付き合った。

「まったまたあー、ご謙遜ご謙遜、君、三年生にもすごい人気だよん」

「先輩だって有名じゃないですか、星野って言ったらうちの水泳部のエースですよ。幾つかの大学から声が掛かっていると、尊敬しますよ」

「やめてよお、照れるじゃないかあー、にひひー」

「先に始めたのは先輩です。先輩が止めれば僕だって止めますよ」

先輩に対しては少し失礼だったかなと思い、チラリと彼女の様子を伺うと、唇を尖らせた拗ねたような表情になっていた。

「むむう、話と違うなあ、もっと可愛い子って聞いていたのになあ」

「」

「すみませんね、ご期待に添えなくて」

「ちえー」

それから黙々と作業をこなしているとようやく底が見えてきた。

腰を伸ばして額に浮いた汗をジャージで拭っていると、パンパンに膨らんだゴミ袋を乗せた一輪台車を転がした立花さんが僕らの横を通り過ぎていった。

左右にブレることなく一直線に進んでいく彼女を見て、意外に力があるんだなと少し感心してしまった。

「ねねね」

ふと星野先輩が興味津々な顔をして声を掛けてきた。その表情は飼い主と遊びに出掛けた小型犬のそれとあまりにもそっくりなので、つい笑ってしまいそうになる。

「なんですか？」

「あの子ってさ、何ていったっけ」

「立花さんのことですか？」

「だっけ」

「ええ」

「あの子と東条氏って、何かあるの？」

「はあ？ なんですかいきなり」

本当にこの人は急に何を言い出すのだろう。思わず手を止めてしまった。何かってなんだ。

「どうなの？」

「別に何もありませんよ」

「本当にい？ 彼女とかじゃないのお？」

「……？ どうしたらそうなるんですか、どこからどう見たって仲良く見えないじゃないですか」

「ふうーん……」

星野先輩は顎に手を当てて悩みこんでしまった。僕は深く追求することなく再び作業に戻ると、一つ目の花壇の土が無くなっていることを確認して花壇から飛び降りた。

ジャージの裾に付いた土を掃ってからゴミ袋の縁をきつく縛っていると、頭上で星野先輩がぼそりと喋る声がした。

「だって」

「えっ？」

「私、さつきから睨まれてるんですけど」

その言葉の意味が分からず、彼女の視線を目で追ってみると、少し離れた先から空になった台車を押して帰ってくる立花さんの姿があった。

僕はそれほど目が良くないので星野先輩が言うようなことは確認出来ないが、確かにこちらを向いている気がした。

ふと星野先輩がしゃがんだかと思ったら、急に僕の腕に巻きついてきた。

「なっ！」

「モテ男は辛いねえー、うりうりー」

星野先輩の小ぶりな胸がふにふにと腕に当たる感触がして、免疫の無い僕は驚く程の早さで頬が上気していった。

「ちよつと！ 止めて下さいよお！」

「よいではないかー、よいではないかー」

「星野先輩っ！」

僕は必死になつて腕を解こうとするが、案外強い力で巻き付いているせいでなかなか離れることが出来ない。そここうしていると「あ」という彼女の声と同時に、加えられていた力が急に抜けて、ようやく僕は彼女の腕から開放された。

恐る恐る顔を上げると、僕達を見下ろす格好で立花さんが立っていた。

彼女は間違いなく僕達に何かを言おうとしている。と言うのも、ご丁寧に台車が脇に退かされているからだ。真面目に作業しろとも言われるのかと思い、僕は身構えて立花さんの口が開くのを待った。

立花さんがゆっくりと口を開き始めたその時、男とも女とも区別のつかない叫び声が辺り一帯にこだました。

「あぶなああああい！」

その声は立花さんよりも更に上から聞こえた。驚いて視線を向けると立花さんの頭に向かって何か落下してきていた。(まずい！)と思つた瞬間、『ごっ』という鈍い音が響き渡る。それに続いて鉄製の棒がアスファルトに落下したような、耳をつんざくような不快な音。

いつの間にかギョツと瞑っていた瞼をゆっくり開けると、ほんの数センチ先に立花さんの白い顔があつた。近くで見ると驚くほど端正な顔立ちだ。肌荒れのひとつも見つからない。そんなことを考えながら彼女の瞳に視線を移すと、ようやく彼女が僕に怯えていることに気が付いた。

それもそのはず、僕は彼女に覆いかぶさる格好をしているのだ。
「わっ！ わっ！ ごめんっ！」

慌てて彼女から離れようと上体を起こそうとしたとき、彼女のしつとりとした頬に赤い水滴が落下した。

「えっ？」

その刹那、頭頂部にズキンという激痛が走った。頭の上半分が異常に熱い。

（ああ、そっか……）

落下してくる物を頭で受けたことを思い出して、次々と彼女の白い肌を汚していく赤い水滴の正体は血液であり、それは僕の頭から流れているということを理解した。

血管の脈打つ音が次第に大きくなっていき、ぐらりと世界が傾いたかと思うと、体を支えていた両手の力が抜けてしまった。

「東条……！？ ちよつと！ だ…… ようぶ！？」

立花さんの身体から、どこか懐かしい石鹸の良い香りがした。

（良い匂い……。それに、やわらかくて、温かい……）

急に痛みが和らぐ感覚を覚え、星野先輩が僕を心配する声も、ついに足形も無く消え去ってしまった……。

（どうしよう……。立花さんに……。抱きつい、ちゃった……）

*

消毒液の匂いがする。つい最近プールの授業で嗅いだあの独特の匂いだ。

それに、これはページをめくる音？

少しだけ目を開けてみると、ここが真っ白なカーテンに囲まれた閉鎖的な空間であることが分かる。一瞬病院かとも思ったが、すぐに保健室だと気付いた。窓越しのくぐもった声で運動部らしき掛け声が聞こえているからだ。

そしてまたページをめくる音。

僕はその正体が気になって音のした方向に顔を向けると、ベッドの脇に腰掛けて何かの雑誌を読んでいる星野先輩の姿を見つけた。

「あの……」

「おっ？ あ、東条氏が目覚めた」

彼女はすくつと立ち上がると「せんせー、東条氏が目覚めたー」とカーテンの向こう側に話し掛けた。するとキヤスター付きの椅子から立ち上がる音が聞こえ、丁寧にカーテンの一角が開かれた。

現れたのは、普段着っぽいベージュのブラウスとタイトな黒いスカートの上に立派な白衣を羽織った、いかにもな感じの保健室の先生だった。初めて見るその先生は他の教師達と比べて見るからに若々しく感じた。うちの保険の先生がこんなに美人だなんて知らなかった。哲平のアンテナは年上には反応しないのだろうか。

僕は初対面の人に対して寝ながら挨拶をするのは失礼だと思い、なるべくゆっくりと上体を起こすと、薄い朱色の紅が引かれた艶やかな唇が僕の身を案じる声を上げた。

「あ、こら、まだ痛むでしょう」

その通りだった。頭頂部に一定間隔でズキズキと痛みが走っている。ふと頭が窮屈に感じて手を当ててみると、顔の側面が包帯でぐるぐる巻きにされているではないか。

「こ、これは」

「取ったら駄目よ」

「こんな大怪我なんですか、僕」

「傷口はそうでも無いから安心して頂戴、その大袈裟な包帯はガ―ゼを押さえるためのものよ、傷口さえ塞がれば取っても平気。でも今日一日は覚悟しなさいね」

「……はい」

「良かったじゃん、あんだだけ盛大に血を流しておいて一日で済むんだよ？ 東条氏は運が良いんだよおー」

星野先輩の言葉を聞いて、血に汚された立花さんの顔が頭を過ぎった。彼女を助けるためとはいえ、少し後味の悪い場面だった。け

れど、この場所に居ないとみると、どうやら彼女は無事らしい。それだけは救いだ。

そんなことを考えていると、おもむろに先生が僕の傍に来て上体を屈めた。

どうやらずれてしまった僕の包帯を直してくれるらしい。その様子を黙って見ていると、ブラウスの隙間に胸の谷間を発見してしまい、慌てて視線を他の場所へ移すが、心なしか頭の痛みが強くなった気がする。

僕が目のやり場に困っていることなど露知らず、先生は尚も細い指で丁寧な包帯を直しながらゆっくりとした口調で話し始めた。

「その通り、ぶつかつたのが鉄とか重い物だつたら今頃は病院、それも集中治療室のお世話になってるところよ」

「えっ？」

じゃあ僕の頭には一体何が当たつたというのだ。かなりの衝撃を感じたし、それにあの耳をつんざくような音は確かに重い金属が落下したときの音だった。僕は訳が分からなくなって、あの出来事を終始見ていたであろう星野先輩にその答えを求めた。

「あれって、鉄じゃなかつたんですか？」

「……安心しろ若いのが、あれはステンレスぢや……。それも中身がスラスカのなっ」

星野先輩が目を瞑って弱々しい爺さんの口調で説明し出したかと思つと、『のなっ』のところで目をくわつと見開いた。その憎らしい表情をもろに見てしまい、思わず笑ってしまった。

「ぶははっ、痛てて……」

「ふふっ、意識は大丈夫そうだけど、もう少し落ち着いてから帰りなさい。私も六時まではここにいます」

「はい、ありがとうございます」

僕の返事を聞いた先生は大人の表情を崩さずニコリと微笑むと、来たときと同じように丁寧にカーテンを閉めて戻って行った。

少し待って、キャスター付きの椅子が転がる音が聞こえたのを確

認してから、すかさず星野先輩に話し掛ける。

「先輩、もしかしてずっと居てくれたんですか」

「まあねー」

「そんな、僕はどれくらい……」

彼女は携帯をパチリと開いて「えつとお」と考え始めた。

「まあ、小一時間つてとこかなあ。……あ、別に気にせんとつてや、ウチも美化委員の仕事サボれた訳やし、それに何と言っても東条氏の可愛い寝顔を仰山見れたさかい、正直得したでほんまにー」

星野先輩が何故途中から関西弁らしきものになったのかは全く分からぬが、僕に気を遣って言っていることは確かだ。人懐っこい喋り方のせいで忘がちになってしまいが、先輩とは今日初めて会った仲なのだ。僕はきちんとお礼を言わなくてはいけないと思い、上半身だけでもなるべく丁寧に見えるようにお辞儀をした。

「本当に、ありがとうございます」

「たははー、ええねんええねん」

星野先輩の照れ笑いを横目に、僕はポケットの中にきちんとリセツトが入っていることを確認した。

「ところで、一体あのとき何が起きたんですか？」

「えつとね、降ってきたのは垂れ幕を押さえる金具ね、落としたのは気の弱そうな生徒会の女の子だったなあ、結構可愛い子よ。ちょっと前まで居ただけけど、あまりに泣くもんだから帰しちゃった。多分後で謝りに来るんじゃないかな」

なるほど、確かに言われてみれば屋上から垂れ幕を外していた女子が居たな。顔までは分からないけど、生徒会の人だったのか。相澤さんなら知っているだろうか。

「ああ！ そうだ！ 東条氏も人が悪いぞおー、何も無いなんて言つてさあー」

「何がですか？」

「びつくりしたよおー、東条氏が気を失った直後にね、あの子、君の名前を何度も呼ぶんだもん、『なおきー、なおきー』って、それ

も泣きながらよ？」

「はああああ!？」

僕はあまりにもあり得ない光景に、片方の眉が思い切り吊り上がってしまった。

「その後どっか走って行ったかと思っただらタオルをいっぱい持ってきてね、ついでに先生まで連れてきちゃって、手際良かったわよー、私なんてただ突っ立ってただけだもん」

「冗談、ですよね……」

「本当だつてばあ、もうなんて言うのかなあ、愛の成せる業？　みたいなの」

そんなバカなことがあるか？　僕は立花さんとともに会話なんてしたことなければ、下の名前で呼ばれたことなんて一度たりとも無かつたはずだ。むしろ苗字すら呼ばれた記憶も無い。

立花優歌。

僕は彼女が桜学に転校してきて初めてその顔と名を知った。以前に会った記憶などは一ミリも無い。けれど彼女は転校初日に僕を美化委員に指名した。かと思えば以降は僕に対してずっと冷たい態度だった。そして今回、どういう訳か僕を下の名前で呼び、拳句の果てには僕を心配して涙を流したという。

訳が分からない。けど、何か引っ掛かる。

僕には彼女が単に変わった子で、今までも突拍子の無いことをし続けて生きてきたようにはどうしても思えないのだ。

先輩の説明を聞く前に、事と次第によってはリセットを使おうかとも考えていたのだが、ここでリセットするわけにはいかなくなってしまった。折角彼女の片鱗が見えてきたんだ。僕は、これを機会に立花優歌の全てをハッキリさせようと考えた。もし逆に嫌われてしまってもリセットがある限り何度でも好きなところからやり直せる。

ふと星野先輩の声が聞こえて考えるのを止めた。

「それとも、東条氏にとっては何でもない女の子に下の名前で呼ば

れたり、泣かれたりするのって日常茶飯事なのかい」

「違いますって、ていうかその『東条氏』っていう方がよっぽど珍しいですよ。なんですかそれ」

「えー、おかしかなあー、じゃあ私も『なおきー』って呼んでいい？」

「勘弁して下さい」

「ほれみろー、じゃあ東条氏しかないでしょうにー」

この人が変わった子であることは誰の目から見ても歴然だ。

その後星野先輩が奢ってくれたパックのお茶を飲みながら、十分くらい他愛もない会話をしながら保健室で休んでいると、うっかり屋上から金具を落としてしまった生徒会の女の子がやって来て、僕に泣きながら謝っていった。

あまりにもしつこく謝るので、途中からは彼女が傷付かぬようにうまく会話を選びながら、如何に早く帰ってもらうかを考えていた。なんだか気を遣う立場が逆の気がする。星野先輩の判断は正しかったようだ。

結局リミットの六時きつかりまで保健室で休んでしまった。

先生が車で送ると言い出したが、近いから大丈夫だと断り、途中まで星野先輩と一緒に帰ることになった。

昇降口を出て花壇を見渡すと、既に作業は終わっているらしかった。星野先輩の話によると、立花さんは僕が教師達に運ばれるのを見届けるとすぐに仕事に戻ったとのことだった。保健室までついてこないあたり立花さんらしいとも言えるが、この量を教師と二人で片付けたのは大変だったに違いない。明日はきちんと最後まで働こう。

校門を出たところで僕らは別れた。星野先輩は電車通学なので、僕とは正反対の方向だったのだ。近くまで送るといふ申し出もあったが、遅くなってしまうからと僕はそれを丁重にお断りした。

僕は一人になると、セミの鳴く夏の夕暮れの中を、頭が痛まないよう、滑るようにゆっくり歩いた。仰々しい包帯を巻いているおかげで通行人の視線が痛い。

ようやく最後の角を曲がると、僕の家の前に誰かが立っていた。

ジャージ姿のポニーテール。愛だ。

何の用事かと思いつながら近くまで辿り着くと、丁度振り返った彼女と目が合った。

「……え？ 直樹？ ちょっとそれどうしたの!？」

「どれ？」

僕は知っていないがらわざと気付かないふりをした。なんだか久しぶりに愛に会った気がして、彼女のまともな反応が嬉しくて、そしてそう感じたことが恥ずかしかったのだ。

「どれ……って、頭のそれに決まってるじゃない」

「ああ、うん、なんか美化委員の仕事してたらステンレスが降ってきてさ」

「はあ？」

愛には悪いが、僕は心の中で笑っていた。

「大袈裟な包帯だけど軽傷だから大丈夫。それより、僕に何か用だったの？」

「ええ？ あ、えっと、今日お父さんの帰りが遅くなるらしくて、茹でたそうめんが残っちゃうのよ。それで、直樹一緒に食べるかなって、お母さんが……」

「うーん」

今日は夕食を作る気になれなかったのでインスタントで済ませようと考えていた。愛のお母さんとも暫く会っていないし、丁度良い機会かもしれない。

「うん、それじゃあご馳走になるっかな」

断られるかと思っていたのだろうか、僕の返答を聞いて愛の顔にパ

ツと花が咲くのが分かった。

「ほんとう！？ やったあ！ お母さん喜ぶよあー」

(うつ……)

「あ、ねえ、どうする？ このまま食べてく？」

久しぶりに会うのにこんな頭じゃ色々と心配を掛けてしまう。それに、このままでは顔が蒸れて仕方ない。先生には今日一日外すなと言われたが、血も出ていないようなので一旦家に帰って外してしまおう。

「えっと、着替えてから行くよ、これも外したいし」

「外して大丈夫なの？ なんかそうは見えないけど……」

「大丈夫、もう血は止まつてるって先生が言ってたから」

「そう……じゃあ用意して待つてるね」

そう言つと、軽く手を振つてから十メートルも離れていない自分の家へ戻つていった。愛の歩調に合わせて、いつの間にか少し長くなっていくポニーテールが元気に揺れている。僕はその様子が見えなくなるまで見送つてから帰宅した。

今が夕方で助かった。僕の顔は赤く染まっていたに違いない。夕焼けの眩しいオレンジ色にうまく照らされていたので、なんとか自然を装うことができた。

ここのとこ愛の顔が急に大人っぽくなった気がする。けれど言葉遣いや仕草などは相変わらず子供のままだ。そんなギャップが余計に彼女の魅力を引き立てているのかもしれない。

それにしても、あの『やったあ』はどちらに掛かっているのだろうか……。

僕はそれから色々とおかしなことを考えながら、普段着のTシャツとハーフパンツに着替え、手洗いうがいをし、鏡を見ながら慎重に包帯を解いていった。

するすると包帯が床に落ちていくと、代わりに僕の頭に現れたのは意外にも小さなガーゼだった。頭のとっぺんよりも少し右にずれたところにそれは乗せられていた。恐る恐るその部分を手で押さえ

てみると少しだけ痛むのが分かる。

意を決してそのガーゼを引っ張ると、一瞬嫌な音がしたが簡単に剥がすことが出来た。ガーゼの中央には一センチ大の赤黒い血がくつきりと染み付いていたが、ガーゼを裏返してもう一度傷口に当ててみると新しい血が出ている様子は無かった。今更だけど、落ちてきたのが鉄じゃなくて本当に良かったと、心底そう思った。

僕は巻かれていた包帯のせいで変な形になってしまった髪を適当に直すと、少し緊張しながら愛の家へと向かった。

インターホンのボタンを押すと、そこからの応答ではなく直接ドアが開かれた。

「もうできてるよっ、あがってあがって」

愛も黄色いボーダー柄のキャミソールと白いミニスカートに着替えていた。ジャージ姿よりも何十倍も女の子らしく見える。それにこの笑顔、哲平を前にしているときとはえらい違いだ。そんなことを考えて、ふとHR後の映像を思い出してしまった。

僕は勝手にうるたえながらそそくさと玄関に入り、サンダルを脱ぐと「お邪魔します」と言い放ち愛の後を追った。

愛の家は僕の家と同じ建売住宅だ。家具や装飾が違っただけで、構造自体は僕の家と変わらない。けれど、全体的に愛の家の方が明るく華やかに見える。これは住んでいる人間のセンスが違うからなのだろうか、それとも住人そのものの雰囲気こそがそうさせているのだろうか、だとしたら立花さんの家は一体どうなっているのだろうか……ふと無意識にそんなことを考えていた。

ダイニングに入るとキッチンの前に立つ愛のお母さんと目が合った。丁度洗い物を終えたところらしく両手をエプロンで拭いている。

「お久しぶりね、直樹さん」

「ご無沙汰しております、初恵おばさん」

今日に至るまでに、何度か食事を断ってしまった経緯があるので、

僕は失礼の無いよう丁寧にお辞儀をした。

「あらあら、そんな畏まらないで頂戴。大した物じゃないけど、良かったらたくさん食べていってね、天ぷらも頑張って揚げてみたのよ」

数ヶ月ぶりに耳にする初恵おばさんの声は、以前とちつとも変わっていなかった。母親の理想とも言えるような、優しく、とても落ち着いた声。いつも忙しそうに喋る僕の母とは真逆の性格らしい。「愛ちゃんたら、ぼーっとしてないで椅子を引いてあげなさいな」「はぁーい」

「大丈夫ですって、そのくらい自分でやりますから」

椅子を引こうとした愛の手を遮ってそう言くと、僕は急ぐようにしてその椅子に腰掛けた。いつものように僕の隣に愛、その正面に初恵おばさんという位置関係だ。

ふとテーブルを見ると、半ば予想はついていたが、その光景にはやっぱり驚いてしまう。

渡瀬家に食事をご馳走になる人間は、たとえそうめんと聞いていても普通の物を想像してはいけない。ここに並んでいるものは確かにそうめんであることに間違いは無い。それは断言できる。ただ一般家庭とは明らかな違いがあり、それは、初恵おばさんのこだわりから生まれる豪華さにある。

テーブルの中央には涼しそうな色のガラス皿と陶器の皿が並んでいた。両方とも巨大なサイズなので、決してそんなことは無いのだけれど、どことなくテーブルが小さく見えてしまう。

ガラス皿の上には色や太さの若干違う二種類のそうめんが取り易いよう小さく丸められていて、その下には氷が敷き詰められていた。陶器の皿には海老、キス、大葉、茄子、椎茸などの天ぷらが綺麗に並べられていて、なんだか料亭で見るとような緑色の塩まで添えられている。その他にも小鉢やらお新香やらが各席に置かれているのだ。これは本当に一般家庭なのか、と疑いたくなるような光景だ。

もちろん今日が特別というわけではない、むしろ遅くなる父親の

代打として招かれたこともあり、いつもよりも控えめな部類だ。これが客用ともなると更に恐ろしいことになる。渡瀬家に例外は無いのだ。

僕が食事の誘いを断っていた理由は二つあり、その片方がそれだった。

普段からおかず一品という質素な食事をしている僕にとっては、こういう手の込んだ料理は結構キツイものがある。絶対に残してはいけないと、勝手にプレッシャーを背負ってしまうからだ。

それにしてもこんな料理上手な母が居て、どうしても愛は料理が下手なのだろうか。初恵おばさんのようにとはいかないまでも、同じ血を引いていることだし、練習すれば結構良い線までいくような気がするけど。

ああ、それにはまず『毎回難しい料理に挑戦する』とか『同じ料理は作らない』などという変なこだわりを無くさないと駄目か……。

「直樹、麦茶と緑茶、どっちがいい？」

「ええと、これ麦茶だよ、これでいいよ」

僕がテーブルの上に置かれていた麦茶を取ろうとすると、今度はその手を初恵おばさんに遮られてしまった。そして麦茶は愛の手に渡される。

「駄目よう、愛にやらせてあげて頂戴」

「はあ……」

右隣で愛がこぼこぼと小気味好い音を立てて麦茶を注ぎだす。僕はその様子をこそばゆい気持ちになりながらずっと見上げていた。

注ぎ終わると「はい」と僕の前にコップを置いて、今度は自分の分を注ぐ。よく見ると初恵おばさんの前には既に緑茶が置いてあった。

全員が席につき、手を合わせてから食事が始まった。

「こっちが揖保乃糸で、こっちが三輪素麺よ、直樹さんはどっちがお好みかしら」

揖保乃糸はテレビCMなんかでよく耳にするが、もう片方のは何

処だろうか？ よく分からなかったが、とりあえず両方を食べ比べ
てみることにした。

(…………どうしよう、違いが分からない…………)

初枝おばさんはジツと僕を見つめている。どうやら感想を待つて
いるようだ…………。

「多分、こっちの方が好みです。弾力が強くて、えーと…………み、み
わ？」

「三輪素麺ね、愛もそっちが好きなのよー、あなた達って本当に気
が合うのねえ」

「…………はあ」

「お母さんっ、変なこと言わないでよっ！ 直樹困ってるじゃない」
(うわぁ…………。愛、そこで赤くならないでくれ…………。そっちの方が
困るよ…………)

そんなときに限って視線が合ってしまったのだから堪らない。

真っ赤になってしまった顔はこの場所では隠しようが無く、僕ら
は食事に集中する以外に方法は残されていなかった。

そんな光景を見てか、初恵おばさんはくすくすと楽しそうに笑っ
ていた。

…………食事を断る理由の二つ目。

初恵おばさんは何かとつけて僕と愛をくっつけようとしてくる。
これについては細かい説明はいらないだろう。

このままだと無言になりそうなので、他の話題を振ることにした。
「準くんはいつ頃戻ってこれそうなんですか？」

準くんとは歳の離れた愛の弟のことで、確か今年で小学校高学年
に上がるくらいだった気がする。話をするようになったのは高校に
入学して愛に話し掛けられたのとはほぼ同時期だ。壊れた弟のラジコ
ンを直してくれないかと愛に頼まれたのがきっかけだった。

それからは渡瀬家で一緒に食事をしたり、稀にだが、食後に三人
でテレビゲームをして遊ぶこともあった。素直な良い子で、未っ子
らしくいつも愛に甘えていた。

その準くんが体調を崩して入院したのは、丁度僕がリセットを乱用していた頃だった。愛から聞いた話によると《貧血の酷い版》とのことだった。もともと丈夫では無い方だと知ってはいたが、もう入院して一カ月近くになる。そろそろ退院してもいい頃ではないだろうか。

その疑問に答えたのは初恵おばさんだった。

「そうねえ、うまくいけば夏休み中には退院できるんじゃないかしら、良かったら今度愛と一緒に見舞いに行つてあげて頂戴、あの子きつと喜ぶわ。……あ、ついでに二人で遊んできちゃいなさいよ、デートつぱく映画とかっ」

ははは……そこで話を戻しますか……。

すかさず愛がつっこみを入れる。

「もお！ どうしてそうなるのよっ」

過剰に反応した愛は肘をテーブルにぶつけてしまい、麦茶の入ったビンが倒れてしまった。倒れた先には運悪くそうめんの入ったガラスのお皿が置いてあり。大きな音を立ててその両方が砕けてしまった。テーブルいっぱい広がった麦茶とガラスの破片。

「やだっ、ごめんなさい！」

「大丈夫よ、落ち着きなさい」

慌てふためく愛の顔がみるみるうちに泣きそうな表情に変わっていくのを見て、僕はいたたまれない気持ちになってしまい、リセットを起動させた。

*

今回は初めての場所だ。

ここまで何度もリセットを起動させてきた僕は、あることに気付いていた。

毎回マリーの気まぐれでリセット空間の場所が変わるのだが、彼女にも好みというものがあるらしく、何度か同じ場所になることが

ある。カラオケや海なんて軽く十回を超えている。他にも展望台、美術館、映画館、ショッピングセンター、動物園に水族館など様々な場所をそれぞれ何度か経験した。中には学校とか僕の部屋なんてのもあった。

どの場所にも共通して言えるのは人が全く居ないことと、毎回マリーの遊びに付き合わされることだ。

たった一度だけ例外があったが、あれはきつと特別な事情があったからだろう。あれから数日経った今でも僕はその事情を聞くことは出来なかった。

そして今回は初めて見る場所だが、いつも通り遊びの方だと思う。ただ、少し雰囲気がおかしい。

真っ白いクロスが二重に敷かれた正方形のテーブルに、これまた立派な二つの椅子が向かい合って置かれている。そしてそのセットが幾つもの一定間隔で並べられていた。照明は薄暗く設定されていて、各テーブルの上にはガラス細工のキャンドルが灯っていた。

驚いたのは壁一面がガラスで出来ていて、とんでもなく高い場所から展望できるようになっていたこと、そして何よりその風景が都市中央部の美しい夜景だったことだ。

僕の安い頭では《高級レストラン》と表現するのが精一杯だった。

「おまたせ、直樹」

嫌な予感がする……。

振り向いた先には、胸の位置までの黒いドレスに身を包んだマリ
ーの姿があった。

「どうよ？」

「どうって……」

その胸の上には小さな黒いバラのフリルが幾つも咲いていて、くつきりとした綺麗な鎖骨をより美しく彩っていた。その他にも、胸部の可愛らしいギャザー加工、胸の下に巻かれた光沢のある細いリボン、幾重にも折り重ねられ波の形を思わせるようなデザインのスカート部分。手にはドレスと同じデザインの小さなバッグまで持つ

ている。悔しいことに、そのどれもがマリーのためにあつらえたと
思う程、とても良く似合っていた。

銀色の美しい髪も健在だ。今日は何も施していないせいで、腰の
位置まで伸びた長い髪が、その髪質の良さを強調していて、いつも
よりひとまわり上品に見えた。

もう分かった……もう勘弁してくれ……。

マリーは絶世の美少女だ。その格好も並の人間では似合わないは
ずだ。きつと今の彼女を見て惚れない奴なんてどこを探したって
ないだろう、それも認める。

けど、その美少女の前に立たされる僕の身にもなつてくれ……。

部屋着だぞ？ 髪型もぼさぼさだぞ？ 何と言つても裸足だぞ？

もうやだ帰りたい……。

「どうって聞いてんの！ 落ち込む前に答えなさい！」

「あーはいはい、超可愛いです、ええ、それはもう直視出来ないく
らいに」

(そしてこの場から逃げ出したいくらいに)

「あああああ！ もうっ、分かつたわよ……はい」

マリーがそう言い終わると、急に身体が重くなったと思いきや、
次の瞬間には全身が窮屈になっていた。

さっきまで着ていた白いプリントシャツはシルク製のグレーのシ
ヤツと黒いベストに、一年前の夏に母が買ってきたハーフパンツは
縦のラインが入った黒いスリムパンツに変わっていた。先の尖った
革靴を履き、腕には高級そうな時計が巻かれ、いつの間にか髪型は
オールバックになっていた。

「うわっ、うわわっ」

僕はそのひとつひとつを何度も触って確かめる。

「うわっ、うわわっ、じゃないでしょ！」

「ふえ？」

「か・ん・そ・う！ ちゃんともう一度言え！」

「は、はい！ えーと……」

もう一度マリーの姿を上から下まで眺める。けど、頭に思い浮かぶ感想はさつきと同じだったので、少し言葉を変えて言うことにする。

「その、すごく可愛いし、とても良く似合ってる……と、思う、よ？」

「……………」

僕は正直に言ったつもりだが、マリーは俯いたまま黙っている。むしろなんか怒ってる？ また怒鳴られるのかと思い、身構えてマリーの口が開かれるのを待っていると、彼女は意外な言葉を呟いた。

「……食べるか」

「……………はあ？ え、何を？」

なんだかさっぱり彼女のことを理解出来ない。

(食べる？ マリーを褒めたら？ 食べるの？)

「ばっ、ばっ！ 違う！ わっ、わた、わたしをとか、そそそそ
ういうのじゃ」

(えっえっえっ？ なんで勝手にデレてるの！ 僕なんかしたー！
?)

「ないんだからねっっっ！！」

「……………えと、ごちそうさまでした」

その後、きちんと言葉の意味を説明し出したマリーによれば、さつきの『食べるか』とは、『衣装も揃ったし、折角だからレストランでフレンチでも食べていくか？』であることが判明した。

まったくゆとりにも程があるだろう。主語が無いどころか原始時代の言葉じゃないか。

兎にも角にも、そこからはいつもの展開だった。

僕がお腹が減っていないことを伝えると、「ワインでも飲みながら付き合え」と言い。

僕は未成年なのでお酒が飲めないことを伝えると、「じゃあお前

水な」と言った。

そして今に至る。マリーは自分で出したフルコースを時間を掛けて食べていた。既に三十分が経過している。その間僕はノンアルコールのシャンパン（おねだりして出してもらった）を飲みながら、マリーの他愛もない会話の相手をしているだけだった。今回の会話は犬派とか猫派とか、映画の好き嫌いとか、そんな感じのことだった。

リセットの世界とはいえ、こんな美少女とこんな場所で食事をしていると、まるで天国に居るような気分になってしまい、帰りたくないなどと考えてしまわないよう、途中で何度も自分を戒める必要があった。

「それにしてもこんな場所よく知ってたな、ここ確か有名な会員制のレストランだろ？ テレビで見たことあるよ」

「そんなの来たことあるからに決まってるでしょ」

「へえー、こんなとこ誰と来たの？」

「別に誰だっでもいいでしょ」

「……」

前に教えてもらったことがある。

マリーは自分か、もしくは僕が一度訪れたことのある空間しか出現させることが出来ないらしい。要するに、僕はこんな場所に来たことなんて無いのだから、このレストランはマリー側の記憶、ということになるのだ。

そして何よりその事実を、マリーが元々は人間であったことを証明している。これも前に質問したのだけど、例の如く訳の分からない用語ばかり飛び出してきて、僕には何が何だかちんぷんかんぷんだった。でもまあ、その説明は少なくとも否定ではなかった気がする。

とにかく、僕の頭で理解できるのは彼女は元々人間であり、色々な経験をしてきたということだ。

色々と謎は残るが、僕にはそれ以上訊くことは出来ない。マリー

のことを細かく聞こうとすると、さっきのように、どっいうわけに不機嫌になってしまうのだ。

気まずい沈黙を打開するべく、僕は当り障りの無い話をする事にした。

「ところでさ、立花優歌ってどこか普通の人と変わってるよね、おかしいと思わない？」

マリーの手がピタリと止まる。

僕の記憶を把握しているマリーは、立花さんの意味不明な行動に賛同してくれるはずだと考えていた。けれど、そんな僕の意に反して、彼女の口から返ってきたのは酷く冷たい声だった。

「……どうして急にそんなこと言うの」

「いや、だってほら、僕の名前を黒板に書いたり……」

「ちがう」

「え？」

「どうして私との食事中に訳の分からない女の話をするのかって聞いてんの！」

テーブルを叩く音がして、グラスの中のシャンパンが小さく揺れた。

「そんな、別に怒ることじゃないでしょ」

「もういい」

「何が」

質問に答えぬまま、マリーは僕の手を掴むと設定空間への転送を開始した。

「ちよつとー！」

僕の訴えは無視された。次にマリーが口に出したのは、暗闇の世界になってからだ。

それも「時間設定」という業務用の言葉だった。

夢のような食事風景が終わり、今度は愛との平凡な食事が再開される。

僕は初恵おばさんの話をよそに、そつと麦茶のピンを愛の前から遠ざけた。

頑張つて食べたおかげで、なんとか二種類のそうめんが無くなりかけた頃、電話の音に呼ばれて初恵おばさんが席を立った。あれからマリーのことが頭から離れない。どうしてあんなに怒つたのだろうか。

「ねえ、愛」

「ん？」

「立花優歌つてどこか変だよ、何考えてるんだろう？」

「……」

「どう思う？」

「……そんなこと私に訊かないで」

「……………ごめん」

愛はスツと立ち上がり、空いた皿を下げて洗い物を始めてしまった。

僕が招いた沈黙の中、初恵おばさんが戻るのを待ちながら、きつと間違っているのは僕なのだと、そう考えることにした。

*

翌日の放課後、哲平とのバカ話も早々に切り上げ、立花さんの身辺調査を兼ねて美化委員の仕事に向かうことにした。

僕が教室を出る頃には既に立花さんの姿は無かった。もしかしたら先生よりも先に花壇に着いているのではないだろうか。

今日一日見ているだけで、どうやら彼女には『間』という概念が存在しないらしい。どんな場合でも次の予定があるのならば、迷うことなくそれを実行する。

授業が終わった途端に次の授業の準備に移り、それが終わると鞆から文庫本を取り出して黙々と読み始める。誰とも話をしないし、

誰とも遊ばない。昼休みは一人でどこかへ行ってしまった。さすがに後を追うなんてことはしなかったが、きつと誰も来ない静かな場所。昼を過ごししているのだろう。

似たような性格の人間を何人か知っているが、立花さんの場合は特殊すぎる。

友達になろうと近付いてきた人をことごとく突き放してしまうのだ。いくら一人が好きで暗い性格の持ち主でも、そこまでする人間を少なくとも僕は見たことが無い。

それに、たまに見せる哀しげな表情。最初の頃は気のせいかと思っていたが、あれは間違いなく素の表情なんかじゃない。涙こそ流れてはいないが、僕から見ればそれは泣き顔と言っても何らおかしくない表情だ。

それらを総合すると、彼女には何か大きな悩みがあり、それを人に悟られたくないがために、他の人間の接近を拒んでいる。そんなふうに見える。もちろんそんなのは僕の勝手な憶測でしかないので、これからそれを確かめてみようと考えていた。

昇降口を出ると、立花さんと先生が作業を開始するところだった。「先生、昨日はすみませんでした」

なるべく元気な声でそう言うと二人の視線が僕に集まった。立花さんは表情を崩さなかったが、先生は驚いたような顔をしている。

「今日はちゃんと最後まで働きますよ」

「傷は大丈夫なの？ 手伝ってもらえるのはありがたいけど無理はしないでくれよ？ 君はこの学校の期待の星なんだから」

僕は少し後ろめたい気持ちになりながら「大丈夫です」と答えた。「ええと、それじゃあ今日はこの花を花壇に植えてもらうね。今から見本を作るから同じようにやってくれればいいよ」

相変わらずのんびりした口調でそう言うと、おもむろに作業を始めた。

先生はプラスチックケースに植わったたくさんのお花から、丁寧に一束だけを引き抜いて花壇の端に植えた。再び花を引き抜くと、今

度は手のひら分の間隔を空けてまた植える。それをたっぷり時間を掛けて繰り返し、ようやくひとつの花壇が完成した。こんなのでよく昨日の重労働が終わったものだ。

しかし、時間を掛けただけあってその出来栄は見事なものだった。黄色い花束が等間隔に四本植えられ、それが綺麗に二列並んでいた。何を当然な事と思うかもしれないが、花が植わるために花壇があるということ、僕はその光景を見て改めて認識していた。

それでもまあ、難しい作業ではないので安心した。花の扱いなど微塵も知らない僕にも、一度見ただけで簡単に真似できそうだ。

「こんな感じかなあー、出来そう？」

「はい、大丈夫です」

立花さんも僕と同時に小さな声で「はい」と返事をしていた。

「植える苗は花壇の前に置いてあるから、東条君と立花さんはあっち側を頼むよ」

「あれ、今日は星野先輩は来ないんですか？」

「大会も間近に迫ってるからねー、今日はさすがに抜けられないみたいだよ」

(あれ？ そっいえば……)

昨日水泳部を応援する垂れ幕が外されていたことを思い出して、ふと視線を上に向けた。よく見ると『目指せ！ 全国大会！ 桜学水泳部』だった文字が『通算四度目！ 全国大会出場決定！ 桜学水泳部』に変わっていた。

知らなかった。いつの間に予選を突破していたのだろう。僕は垂れ幕が外されていたのを見て、てっきり予選敗退したものだと思っていた。今度会ったらきちんと応援の言葉を掛けてあげよう。

「分かりました、それじゃあ反対側やってますね」

「頼むねー」

振り向くと、いつの間にか立花さんの姿が消えていた。慣れていたので驚きはしない。早足で立花さんの後を追うと、すぐに反対側の花壇に到着した。

足元には先生の言った通り、花の植わったケースが置かれていた。よく見るとさっきの花と種類は同じみたいだが色が違う、今度の花はオレンジ色だ。

気になって隣の花壇に目をやると黄色い花が見える。どうやら黄色とオレンジを交互に植えるらしい。

立花さんが早速作業を開始したのを見て、僕も慌ててケースに手を伸ばす。

(ん？ なんだこれ、見ていたのと違う？)

おかしい。さっき先生は一束を取り出していたが、実際に見るとどこからどこまでが一束なのかよく分からない。立花さんはいとうと、特に困った様子もなく先生と同じ手つきで淡々と花の束を引き抜いている。とうとう僕がもたついていている間に既に一束植え終えてしまった。

焦った僕は、大体八分の一と見切りを付けて束を引き抜こうとすると、『ブチッ』と嫌な音が響き渡った。どうやら枝分かれした根がこのうちいくつかが干切れてしまったようだ。

(あ……)

無意識に立花さんを見ると、彼女も僕に目を向けていた。

「あ、あれだね、意外と難しいねこれ……」

「……」

(なんか言ってくれよ……)

無言の訴えが続く。責めるような冷たい目だ。僕はバツが悪くなり、逃げるように立ち上がると、辛うじて残った根を花壇に植え込んだ。

恐る恐る振り返ると、立花さんは花と花の間に腕を潜り込ませて、ケース奥側の土に人差し指を突き立てていた。すると今度はそのまま指を手前に引いて一本の線を書いた。

僕が呆気にとられている間に、彼女はそれを何度か繰り返して土を八等分させた。もしやと思い、そのひとつを引き抜いてみると、意外な程あっさりと抜けてしまった。

「えっ、っそ」

これは話し掛ける良い口実だと思い、色々訊いてみることにした。「すごいね、なんで分かるの？」

既に作業を再開していた立花さんは、その手を止めはしないものの、きちんと僕の質問に答えてくれた。

「……なんとなく」

そうくるだろうと思って次の質問も用意してある。

「花が好きなんだ？」

「……好き」

思わずドキツとしてしまう言葉だ。

僕は折角始まった会話が途切れてしまわぬように、あたふたと作業をしながら次々と質問を投げかけた。

「これなんていう花？」

「マリーゴールド」

「ああ、聞いたことある。そういえば小学校とかにもよく植えられてるよね」

「……」

「えと、こ、この花ってどのくらいもつの？」

「……十月の終わりまで」

「へえ……そう……」

(あ、駄目だ、会話が続かない)

普段受身の会話しかしていない僕にとって、立花さんは強大すぎる相手だった。付け焼刃でどうにかしようという考えが甘かったのだ。なんとか話題を見つけなくてはと考えてみるが、どうも立花さんの興味を惹くような話が思い浮かばない。終には話を探し当てる前に、花の苗が尽きてしまった。

まばらに土だけが残ったケースと一緒に、虚しい気持ちになりながら、次の花壇へと向かう立花さんの後ろを歩く。

二つ目の花壇に着くと、立花さんは何も言わずマリーゴールドのケースを八分割してくれた。僕はその様子をジッと観察するが、や

はりどつという理屈でそのように分かれるのか理解出来なかった。

少しだけこの作業に慣れてしまったせいで、さつきよりも数段早く、花壇は黄色いマリーゴールドで埋め尽くされていった。未だに会話の糸口が見出せないままだ。

けれど、どつという訳が悪い気分じゃなかった。

立花さんが教えてくれたこの花、僕は花を愛でたことなど無いに等しいのだけれど、この花を見ていると心の奥がぼんやりと暖かな感情に包まれるようだった。

二十センチくらいの茎の先端に咲いた黄色いマリーゴールドは、丸みを帯びた可愛い形をしている。所狭しと広がる花弁は、まるで窮屈な茎の中からスポンと飛び出してきたかのように、溢れる生命力を開放させていた。

その中央、開花と共に露になった雄しべや雌しべを見ていると、何故だかは分からないが、それがとても尊いもののように思えて、すごく切ない気持ちになる。

僕はこの花が好きなのかもしれない、そう思った。確かにこいつのおかげで立花さんが花を好きだという事実が判明した。けれどそういうのじゃない、ただ純粹に、マリーゴールドがもつ魅力に惹かれていたのだ。自分でも不思議に思う。

「立花さん」

「……なに」

彼女は返事をする、二つ目の花壇を完成させたところで僕に顔を向けた。

「僕、この花が好きかもしれない」

「……そう」

僕の唐突な宣言に驚かされたのは、立花さんではなく、僕の方だった。

本当に一瞬のこと、僕に向かって返事をする間際、立花さんは目を細め、口角を僅かに上げた。それは僕の知っている《笑顔》という表情だ。

恐らくは数秒、僕の機能は停止していた。視界から立花さんの姿が完全に消えるまで、その微笑があつた空間から視線を動かすことが出来なかつたのだ。

立花さんの足音が聞こえた次の瞬間、僕の頭は思い出したかのように疑問だらけになった。どうして僕は意味不明な宣言をしたのだろうか。どうして彼女は僕に微笑みを向けたのだろうか。どうしてこんなにも胸が高鳴っているのだろうか。

考えたところで答えなど見つかる筈も無かつた。僕の思考回路は立花さんの笑顔が焼き付いてしまつて、うまくその役割を果たせなくなつていたので。

可愛かつた。美しかつた。いや違う、惚かつたんだ……。

彼女の笑顔は形容のし難い惚さを感じさせた。それは、マリールドの中央に存在する雌しべ達と同様に、大切に保管され続けた果てに生み出されるものだ、そう思わせていた。

気付いたら僕は駆け出していた。相変わらず自分の行動が理解出来ない。最近自分自身のコントロールが下手になっていると思つのは気のせいだろうか。

僕は勢い良く立花さんを追い抜くと、最後の花壇の前で腰を下ろし、遅れてやつて来る立花さんに向かって頼みごとをした。

「僕にやらせて」

少し息の上がつた声でそう言うと、彼女の答えを待たずに行動に移つた。

彼女を真似て花の間に腕を入れると、次々と土の上に線を書き込んでいった。根拠などは全く無い。全て感で書いたのだから。僕が線を書いている間、立花さんは黙つたまま、オレンジの花を見つめていたようだった。

「よしっ」

無理矢理自信を持たせるような掛け声を発してから、恐る恐る一束引き抜いてみると、拍子抜けするほど花の束はあっさりと抜けてしまつた。

「おお」

その束を戻して隣の束を持ち上げる。と、それも簡単に抜けてしまった。僕は飛び上がる程の嬉しさを必死に抑えて次々にその行動を繰り返した。

本当に些細なことだけど、花の束を引き抜く度に少しずつ立花さんに近付ける気がして、本当に嬉しかったのだ。

が、調子に乗った僕は良い結果で終わった例が無い。

……残念ながら今回もそうだった。

五つ目の束を勢い良く引き抜いた途端、一際大きな音を立てて茎が根元から千切れてしまった。最初の失態とは違って、今度はほぼ全ての根が土の中だ。どう見ても再生不可能であることは明らかだ。見なくても立花さんがどういう顔をしているのか想像がついてしまう。きつとこのマリーゴールドと同じ気持ちなのだから……。

(折角……たのに……)

僕は左手をポケットへ静かに潜り込ませると、指先に触れた長方形の塊に向かって、胸の中で渦巻いている感情を注ぎ込んだ。

*

「そんなに怒らなくてもいいじゃないか」

さつきからずつと黙ったままの背中に向かってそう言った。

「頼むから話を聞いてよ、ねえ、マリー」

「……」

ここはリセット空間に出現した僕の部屋だ。何度か話し掛けてみても、机に座っているマリーは頬杖をついたまま動こうとしない。

昨日のことをまだ怒っているようだ……。

「その、僕が悪かったよ」

「……なにが」

「昨日のこと」

「……ふうん」

「僕が無神経だったよ、謝るから……その、許して欲しい……」
「……」

マリーはそのままの体勢でありつただけの空気を吸い込むと、何かを表現するように大袈裟な溜め息をついた。固唾を呑んで見守っていると、彼女は何かぼつりと呟いた気がしたが、よく聞き取れなかった。

「えっ？ なに？」

僕の問いかけに答えは返ってくることはなかったが、ゆっくりと椅子が回転して、ようやくマリーの顔がこちらを向いた。

「まあいいわ、許してあげる」

彼女のデフォルトである、上から物を言う態度に戻ったマリーは、何かに気付いたように不思議そうな顔になる。

「なによそれ、花？ まさか私のために持ってきたとでも言うつもり？」

「ん？ ああ……違うよ、これは……って、そんなのいつもみたい
に記憶を読めば分かるんじゃないの？」

「別に、いいじゃない……私の勝手でしょ、それより違っつてどう
いうことよ」

マリーが疑問形で話をしてくることはとても珍しい、全く無い訳
ではないが、あるとすればわざと口に出して言わせようとするとき
だ。そしてその大半が恥ずかしい言葉であることは言うまでも無い。

今回はそういう類の話ではないのに、どういう訳か本当に記憶を
読むつもりが無いみたいだ。何故マリーがそうしないのかは分から
ないが、深くは考えずにここへ来た理由を説明してあげた。もちろ
ん立花さんの名前は出していない。

「ふうん、随分と命を大事にするのね。今までそんな素振り見せた
ことないのに。その花、マリーゴールドよね。ちよつと貸して」

「へえ、よく知ってるね、もしかして花のこと好きなの」

差し出された手に、そつとマリーゴールドの束を乗せてやった。

「もしかしなくても花は好きよ」

すると彼女は椅子を回転させて机の方を向き、いつの間にか出現していたシンプルなガラスの花瓶にそれを活けた。

しばらくの間、彼女は僕のことなど忘れてしまったかのように、机に両肘を突き、指を交差させ、その上に顎を乗せてマリーゴールドを愛でていた。

僕もベッドに腰を下ろして、その様子をぼーっと眺めていた。

同じ花好きでも、立花さんとマリーは何かが違う。二人とも花がとても似合う点は同じなのだけど、何故だろうか、立花さんは育てる側、マリーは楽しむ側、そう感じてしまうのだ。

それは単に今の状況下がそうというだけではなく、どんなに想像しても、二人の立場を逆にすることが出来なかったからだと思う。

きっと立花さんは花瓶の花を愛でることが出来ない。きっとマリーは花を育てることが出来ない。おかしな話だけど、そう考えてしまっ程、二人の雰囲気は対極して見えていた。

心の中で何かざわつく……。

《自ら望んで一人になろうとする女の子》

《リセット空間でいつも一人きりの女の子》

《死と再生を繰り返す生命》

《枯れゆく定め of 儂い生命》

僅かの時間にこれら全てを目にしたことは、果たして偶然なのだろうか。

何かを暗示しているようで、僕は一抹の不安を覚えていた……。

「マリー」

「なあに」

「マリーは居なくなったりしないよね」

「どうかしらね、私にも分からないわ」

少しセンチメンタルな声でそう答えた彼女は、マリーゴールドを眺めたまま、ひとつ、小さな溜め息をついた。

「この花は直樹が元の世界に戻ったら消えてしまう。私もそうならないとは限らない。私は人間の都合によって造られた物だもの。きっと、人間の都合で消されてしまうわ」

僕は質問しておきながら、それ以上マリーに何も言えなかった。

リセットの世界から戻ったのはそれから数分後。半ば追い出すように、マリーは僕を元の世界へ送り届けた。

戻った先の僕は、千切れる前のマリーゴールドに手を伸ばしているとこらだ。今度は千切ってしまうぬよう、慎重に根の周りの土を掘り返していく。

マリーは人の手によって造られた存在。

考えたことが無かった訳ではない。彼女の生まれた理由、不自然なまでの人間らしさ、自由に創り出せる不思議な空間、目的、誰の何故、……リセット。

どうして僕なのか……。

聞いても教えてもらえないと思っていた。いつしかリセットの世界では深い詮索などせず、マリーとの時間を楽しむだけになっていた。

動機の無い創造物など在りはしない。きっと誰かが、何かのために、僕にリセットを寄越した。それは善意だろうか、それとも悪意だろうか。

もう何もかもが分からない。

どうして僕なのか……。

今度は無傷でマリーゴールドを引き抜くことができた。

これでまた元の完璧な世界だ。恐れや不安と関係の無い虚空の世界。

今までも……。

これから……。

そんな自虐的とも言える考えを巡らせていると、意味不明な言葉が飛び込んできて、僕を更なる闇へと突き落とした。

「そんなことでいちいちリセットを使うのね、少しは巻き込まれる身にもなってくれないかしら」

僕は何を思っただろうか。きちんと思考は働いていただろうか。ただ分かるのは、目の前の人物が立花優歌であることだけだった。

四章 【理由】（前書き）

【登場人物】

東条 直樹 とうじょう なおき

情けない自分を変えたい願う平凡な高校二年生。真面目で大人しい性格。その中性的な顔立ちから、女子達の間ではひっそりとした人気がある。

ある日、誰かの手によって『リセット』という機械が送り届けられる。

渡瀬 愛 わたせ あい

直樹の幼馴染。中学では疎遠になっていたが、高校で再び話すようになる。明るく活発な女の子で、バスケット部ではエースとして活躍している。

本人は料理が得意だと思っているが、その味はとても不味い。

相澤 美玲 あいざわ みれい

直樹が憧れを抱いている女性。才色兼備なお嬢様。愛と仲が良く、そのおかげで直樹と話すようになる。生徒会役員の仕事が忙しく、皆とゆっくり話をする機会は少ない。

園塚 哲平 そのづか てっぺい

直樹とは親友なのだが、愛とは犬猿の仲。いつもバカなことばかりしているが、たまに大人な一面を見せたりする変な奴。
部活や委員会には入らず、いつもバイトをしているらしい。

立花 優歌 たちばな ゆうか

二年始業式の日、桜学へ転校してきた不思議な女の子。初対面にも拘らず美化委員の相手として直樹を指名する。無口な性格で、近寄

りがたい雰囲気をしている。

マリー

リセット空間に現れる謎の美少女。とてもわがままで直樹を恰好の遊び相手に仕立て上げる。多くのことは分からないが、とても美しい声で歌う。

四章 【理由】

四章 【理由】

高校一年生が終わった日、とうとう私の両親は離婚した。

母と二人で暮らすことになり、住み慣れた街や仲の良い友達とも別れることになった。

引越しを終えると、パパにお別れを言った。

パパはとても悲しんでいたけれど、正直なところ、私はそれほどでもなかった。離婚の原因は、パパが違う人を好きになったからだと、ママに教えてもらったから。だから、そんなに悲しい顔をされなくても、私には嘘としか思えなかったのだ。内心ホッとしているに違いない。

さようならの後、『どうか新しい人とお幸せに』と、付け加えるつもりだったけれど、泣いているママの前ではとても言えなかった。

新しい家は前に住んでいた都心部から少し離れたところにあるマンションだらけの街。

折角受験した高校には一年間しか通うことが許されなかった。その反動からか、もうすっかり勉強熱は冷めてしまい、数ある高校の中から桜ヶ丘学園を選んだのは、ただ近いという理由からだった。

それほど難しくない編入試験を受け、無事に二年の始業式から新しい高校へ通うことになり、それが済んでしまうと、私の前には二週間という長い時間がぼつかりと空いてしまった。

一人きりの春休みはとても長い。

パパから振り込まれる養育費で充分やっていける筈なのに、どういふ訳かママは仕事をする時間を増やしてしまい、一日のほとんどを一人で過ごすことになった私は、街をふらふら探索してみたり、ベランダで花を育てたりする以外は、本ばかりを読んで部屋に籠っ

ていた。

一日に数回、仲の良かった合唱部の子達と、交換日記みたいなメールをするようになった。宿題の進み具合だったり、焼いたケーキの出来栄えだったり、本当に他愛も無い内容ばかりだけど、今の私にとっては、それがかけがえのないもののように思えていた。

去られる側と、去っていく側とでは先に待っているものが違う。私は新しい学校でうまくやっていけるだろうか、前みたいに楽しく笑えるだろうか。そんな不安を抱えながら、ついに誰にも打ち明けることは出来なかった。

一人きりの春休みはとても寂しい。

それが昨日までの私だった……。

転校初日の朝、私の頭はおかしくなった。

ある三つの記憶がその細部に至るまでハッキリと頭に刻み込まれていたからだ。夢かとも考えたけれど、机の上に置いてある物体にその考えを否定された。

リセットシステム。タワー型のセンター端末と、備え付けのホルダーに綺麗に収められた二十二枚のリセット端末。

私はひとつずつリセット端末を手に取って眺めた。

それぞれに違う絵が描かれていて、それぞれが違う意味を持っていた。そうなるように私が決めたからだ……。

そう、リセットシステムを開発したのは他の誰でもない、この私……。いつ、どこで、何故そうなったのかまでは分からないけれど、私はリセットを開発し、そして未来からここまで戻って来た。

三つの記憶だけ抱えて……。

リセットの際、記憶は三つまでしか所持できない。

未来の私が選んだ三つの記憶の内、一つ目はリセットシステムについて。その使用方法から内部構造まで熟知している。もちろんこれを忘れてしまっただけは元も子も無いのだから当然と言える。

問題は残りの記憶。

二つ目に私が選んだのは《東条直樹》という人間にリセット端末を渡すこと。

これだけでは全く意味が分からない。そもそもそんな人間を私は知らないのだから。

しかし、三つ目の記憶にその答えがあった。東条直樹という人間は二十年後の七夕の日、私を庇って交通事故に巻き込まれてしまい、植物人間になってしまう。

その記憶は私が東条直樹にリセットを渡す理由になると同時に、私がこの時間に戻ってきた理由にもなっていた。

未来の私は随分お人好しらしい、まさか自分の二十年をふいにしてまで人を救うなんて。命を救われたからといって簡単に出来ることなんかじゃない。それに、私が確実にリセットを渡すとも限らない。東条直樹が最低な人間なら、私はきつと渡さない。それを分かっていたのだろうか……。

ふと扉をノックする音が聞こえ、私はリセットシステムを机の脇に隠した。

「優歌？ そろそろ準備なさい、遅れるわよ」

「……はい」

やはり私の頭はおかしくなっているのかもしれない。

今、聞き慣れた筈の母の声が、どういう訳かとても懐かしい声に聞こえた気がする。手早く着替えて母と朝食を食べていると、その感覚は次第に強くなっていった。母の顔を見ても、ハッキリとは説明できないが何か違和感を感じてしまうのだ。

「あなたちよつと変よ？ どこか具合でも悪いの？」

「……別に」

「そう……。新しい学校に通うのは不安かもしれないけど、しゃんとしてないとお友達出来ないわよ」

「……はい」

私はちよつと変。その理由は記憶を辿れば簡単だった。

記憶の混同と感情の劣化。

それは実験段階で確認できたりセットの副作用だった。これは戻した時間の長さによって比例する。

影響の度合までは分からない。けれど、私の場合は少なくとも二十年以上戻しているのだから、それなりの影響を受けているに違いなかった。

そのとき、初めて未来の私と東条直樹を恨めしく思った。

「東条直樹」

驚いたことに、その名前を聞いたのは家を出てから数十分後、教室の中だった。

先生の点呼に返事をする男の子。彼は女の子みたいな声と容姿をしていた。とてもじゃないけど、自分の身をなげうってまで人を救うようには見えない。ひよっとしたら何かの間違いではないだろうか。届くはずも無い未来の私に向かって、そう質問せずにはいられなかった。

「立花優歌」

「……はい」

気付いたら私の番まで点呼が回ってきていた。先生に指示され立ち上がると、私が転校生であることを皆に説明した。視線が私に集まり、少し不快を感じて、気付いたら東条直樹を睨んでいた。

出席確認が終わると、入学式兼始業式を行うため、先生に先導されて体育館へ向かう。その途中、二人の女子に声を掛けられた。

「ねえねえ、立花さんて何処から来たの？」

「可愛いよねえー、絶対彼氏いるでしょー」

何処から来た？ 可愛い？ 彼氏？ この子達は一体何の話をしているの？ 私はこのくだらない質問に答えるべきなのだろうか。

「ねえ、聞ってる？」

「あれ？ 立花さんで合ってたよね……」

「……合っているわ、それがさっきの質問に関係あるのかしら」

「……え、えーと」

「行こう、なつちゃん。ほら、あつちにターコが居るよ」

「う、うん、じゃあまたね立花さん」

走っていく彼女達を見てしばらく考えてみたが、結局、私に話し掛けてきた理由と、その質問の意図は分からなかった。

式を終えて教室に戻ると、今度は委員会の選出が始まった。先生に指名された女子によって、次々と各委員が決められていく。

私はどうやっておかしくなった頭を元に戻すかを考えていた。けれど、東条直樹の記憶がその邪魔をしてくる。まるで未来の私が「早く彼にリセットを渡しなさい」と急かしているみたいに。

分かった。私もこの記憶から早く開放されたい。ならば私も急いで彼を見極めよう。そう考えたとき、委員決めの進行がピタリと止まっていることに気が付いた。

私は何の委員かなど微塵も考えずに手を挙げた。

前に呼び出され、初めて私が美化委員に立候補したのだと知った言われるがまま黒板に自分の名前を書き入れると、続いてその隣に《東条》と書いた。

チョークの音に混ざって背中から間抜けな声が聞こえた。きっと彼の声だろう。

驚くのは当たり前前の反応だ。知らない人に勝手なことをされているのだから。でもこれは私からの些細な仕返しでもある。会った事もない貴方のために、私は頭がおかしくなってしまった。少しくらいこの理不尽を味わっても良いと思う。

皆に煽られ、仕方なさそうに前に来た彼は、訳の分からないといった表情をしていた。

「えと、どっかで会いました？」

言うと思った。

「いえ」

更に彼を惑わせるために敢えて即答する。うろたえている彼を見

るのは少しだけ面白かった。

HRが終わると彼は三人の男女に囲まれていた。明らかに頭の悪そうな男の他は二人とも女の子だった。その片方はさっきまでサクサクと進行を務めていた綺麗な子。友達なのだろうか楽しげに話をしている。意外と人脈はあるみたいね。

私が東条直樹の自宅にリセットを郵送したのはそれから一週間経ってからだった。

確かに渡しはしたが、それは彼を認めたからではない。本当のところ、どうでもよくなった、というのが正解。

一週間の内に彼が起こしたのは周りの人間と真逆の行動だった。何も言わず、何も聞いてこない。私があればほど不可解な行動を起こしたのに、彼は何一つ私に話しかけてこなかった。多分これが彼なのだ。言うならば事なかれ主義。

そう思った途端に、彼のことなど別にどうでもよくなって、二十枚のリセットの中から一枚を引き抜き、自作した説明書を同封して送りつけた。

彼に渡す絵柄は記憶によって既に決められていた。

中央の地球。四隅に描かれた天使、鷲、雄牛に獅子。

これはタロットカードの《世界》を表している。

正位置では《成功》や《完璧》といった意味を持ち、逆位置では《失敗》や《墮落》を意味している。

未来の私はどういう訳か、この《世界》が彼に必要なだと考えたらしい。

それと、説明書を同封したのは優しさからではない。単にそうしないとリセットを渡したことになるからだ。端末だけ送られたのでは、誰だっ理解に苦しむだろうと考え、知っている限りの知識を打ち込んだ。

これで彼のことを考えずに済む。自分のことに集中できる。記憶

を修復して、また元の女子高生に戻ることができる。

けれどそのときの私は、ある重要な事実を見落としていた。それに気付いたのは五月に入って間もない頃。

私は大型連休の全てを破損してしまった記憶の修復に費やしたのだけれど、とうとう最後の日になっても成果を出せずにいた。

夕刻、例のごとく母から帰りが遅くなると連絡を受けた私は、近くのスーパーへ買い物に行こう考えた。ところが、着替えるために上着に手をかけた瞬間、数あるリセット端末の内のひとつが急に激しく光りだして、私は視界を奪われてしまった。

（これは……起動の……）

*

私は白い閃光に包まれながら、リセットの起動条件を思い返していた。

起動するには二通りの方法がある。

ひとつ、手で触れながら起動をイメージすること。具体的には電気のスイッチを入れる瞬間のようなものをイメージすれば良いし、『戻りたい』とか『やり直したい』と願うことでも起動する。

もうひとつ、他のリセット端末の起動にリンクして、全ての端末が起動する。

この場合、リセットを一度でも認証（起動）させた人間は、端末から離れていても強制的にリセット空間へ連れていかれ、更には起動者が設定した時間へ戻されてしまうのだ。

これは同じセンター端末を介しているリセットにのみ起こる。要するに、私が未来から持ってきた二十二枚のリセットに認証した人間は、リセットを破壊しない限り永遠に道連れということになる。

今現在、私の他にリセットを起動できる人間は東条直樹しかない……。

迂闊だった。彼にリセットを渡しても半月の間リンクが起ころな

かったので、このことをすっかり忘れていた。

自分に苛立ちながら目を開けると、そこには私の脳をデータ化して造られたオペレーションシステム、《ユウカ》が立っていた。

彼女は自由にこの空間を操れる。場所、気温、時間、それだけでなく自分の体格から容姿まで全てが自由自在。

今この空間はどこかの病院らしかった。

見たこともない病院の一室。私の記憶に無いということは、これは彼女の記憶、つまりは未来の私の記憶に他ならない。

私が覚えている限り、これまで百回を超えるテストを行った。その度に彼女は場所を変え、姿を変えた。あるときは可愛らしい部屋に少女で現れ、あるときは格調の高いホテルに美しい女性で現れた。……ところが、いつからか彼女は姿を定着させるようになった。

歳は中学生ほど、銀色の長い髪に青い瞳、何度質問しても何故そうしたのはか答えてくれず、結局それは今でも分かっていない。

上層部へ提出したレポートにはこう書いた。『ユウカは執拗に自己意識を確立しようとし、他者にそれを認めて欲しいと願っている。ユウカは私であることを恐れ、否定し、わざと私とはかけ離れた容姿を定着させている。そしてそれが今の彼女の全てである』と。

研究所の下した判断は《凍結》。更にはリセットシステムに人工知能は必要無いと結論に至った。

そのとき、私はリセットを持ち出すことを決意した。

彼女が私を嫌いであるように、私もユウカが嫌いだった。それでも、リセットには彼女がどうしても必要なのだ。リセットを使えば自由に人生を書き換えることが出来てしまう。そんな物を使い続けると人間はどうなってしまうのか。次第に感覚が麻痺し、失敗することへの恐怖を感じなくなり、結果、永遠と辿り着けない理想を追い続けることになる。

それは恐らく人間ではない。

その為、使用者を人間として留めておける《人間》が必要なのだ。

ユウカにはそれが出来る……。

「初めてリンクされる気分はどう?」

声のした方を見ると、いつの間にかユウカは病院特有の白いベッドに腰掛けていた。

私の気分なんてどうだっついていい。

「……彼のリセット理由は?」

「そんなの、直樹に聞けばいいじゃない」

「私を怒らせたいの」

「怒らせる? 滅相も無い。あんたが《本当に》聞きたいのなら教えてあげるわよ」

わざとらしく両手を広げて弁解をしている。私を馬鹿にしているようだ。

「そう、じゃあ質問を変える。リセット設定時間は」

「高校生に戻っても嫌な女のままね……」

「答えて」

「四月三十日」

四月三十日? 六日前? まさか、限度まで戻らないなんて……。

四月三十日まで不満が無かったとでも言うのかしら。そうは見えないかったけど……。

「記憶は?」

「何も」

「何も、とは?」

「その通りのことよ、何も記憶せずに戻った」

意味が分からない。何よそれ。それじゃ全く同じ道を辿るだけじゃない。

「それがどういう意味か分かってるわよね」

「直樹がそう望んだのよ」

「……呆れた。ところで彼のこと、どうして名前で呼ぶの」

「そんなこと、あんたに関係ある?」

「……もういい、転送を始めて」

彼女も早く私を追い出したいのだろう、無言で手を差し出して
る。

その手を握ると、すぐにシステム中枢部^{コア}への転送が開始された。
爪先から細胞のひとつひとつが、ゆっくりとユウカに接続されて
ゆく……。

この感覚。私はユウカが嫌いだけど、この感覚だけはとても好き
だった。まるで身体が液体に変化し、優しくて温かい、生命の海と
混ざり合うような心地良さだ。

転送が完了し、記憶の選択をする。リセット先が四月三十日とい
うことは私にとっては非常に助かる。何せ四月二十九日までの記憶
がそのまま残るのだから。

要するに、戻される六日間の間で忘れたくないことを記憶すれば
良いだけの話だ。

私は、《リセットについて》と《記憶の修復について》だけを記
憶してリンクを受け入れた。

四月三十日。私は学校を休み、一日中考えを巡らせていた。

彼がこの日を指定した以上。かなりの確率で今日中にもう一度リ
ンクが起こるはず。記憶をせずに戻るとはそういうことだ。

恐らく彼は私の書いた説明書を読んでいない。このままだと永遠
と四月三十日を繰り返すことになってしまう。

けれど、恐らくそれは無い。

きつとユウカが彼に説明するはず。彼女も毎回記憶喪失者の面倒
を看るのは御免だろうから。

問題はその先、彼がどこまで戻すのか。

特別なことが無い限り、戻せるまで戻すことが自明の理というも
の。彼もそうするようなら、私は戻される際の記憶を慎重に選ぶ必
要がある。

四月七日の私は何も知らないのだから……。

まず《東条直樹という人間にリセットを渡す》という使命は既に果したので消しても問題は無いのだが、それだと彼がリセット所持者だということ忘れてしまう。更に、《私の代わりに事故に遭う》という記憶を消してしまうと……。

そうか、なら一緒にしてしまえば良い。

《東条直樹について》と、まとめてしまえば一つスペースが空く……。

(えっ?)

変だ……。何かがおかしい。

未来の私は何故最初からそうしなかったのだろうか。

同じクラスメイトである彼の記憶を残さなかったのは何故？ どうしてまわりくどい方法でリセットを渡させたの？

記憶容量を充分に把握している私なら、ひと一人の情報を全て記憶することが可能だと分かっていたはず。要するに《東条直樹にリセットを渡す》だけで通じるのだ。それなのに敢えて《東条直樹という人間》と置き換えて記憶している。これだと彼がどんな人間で私とどのような関係があったのかが分からない。

考えられるのは、わざと彼の情報を消した、ということになる。

何故……？

予想通り午後をいくらか過ぎたところでリンクが発生した。

前回と同じ病院を模した空間。ユウカは部屋の奥、壁の中央に開いた窓から外を眺めている。

私は戻される時間を聞こうと近寄った。

すると彼女は急に身体を翻し、銀色の髪がふわっと宙を舞った。

「私、マリーになったから」

見たことの無い表情だった。女の私でも見惚れるくらい純粹で無垢な笑顔。ユウカの言った意味不明な言葉よりも、その表情に驚い

て声が出せなかった。

「だから、今からあなたのこと、優歌って呼ぶわね」

彼女がそう言った瞬間、頭にピリピリと奇妙な刺激を感じた。

「……言っている意味が良く分からないのだけど」

「ふふつ、分からない？ 私はもうあなたではなくなったのよ？

ああ、なんて素敵な気分なのかしら」

純粋な心を持った乙女が、教会のマリア像に向かってそうするよ
うに、彼女は手を組んで目を閉じていた。

「……マリー？ それがあなたの名前だというの？」

「そ。優歌もこれからそう呼ぶのよ」

馬鹿らしい……。名前を変えただけで人格が変わるだなんて信じ
られない。

でもそれ以外に先程から彼女が見せている笑顔や、私を優歌と呼
んだことの説明がつかない。

彼女がこうなった原因はやはり東条直樹にあるのだろうか。一体
何がどうなるうとしているの？ これが良い傾向なのか、悪い傾向
なのか、それすらも分からない。

それに……。これは……。

私の中に湧き上がる感情は何？

「驚いた！ 優歌も喜んでくれるの？」

「……分からない」

どうして喜ばなくてはいけないのよ。そんなの可笑しいじゃない。
分からないわよ！

「直樹がね、私を女の子として、マリーとして認めてくれたの。そ
れに、『またね』って言うてくれた。私こんなこと言われたの初め
てよ」

まただ、また頭が微かに痛む。なんだか無理矢理に感情を植え付
けられているみたい……。

「もういい……私を転送して」

私は片方の手で頭を押さえながら、もう片方の手を彼女に差し出

した。

「いいなあ、優歌はいつでも直樹と会えるんだもの」

相変わらず彼女は笑顔を崩さないまま、スツと私の手を取り転送を開始した。

コアに着いて同期したユウカに時間の確認をとると、やはり戻る時間は四月七日だった。

私は恐らく最善といえる三つの記憶を選んだ。

《リセット》 《東条直樹》 《記憶の修復》

もしかしたら、私はこの三つの記憶に縛られたまま、ずっと生きていくのかもしれない。だとしたら……。

リセットを所持してから二度目、累計としては恐らく三度目になる高校二年生の春が始まった。

徒歩で学校に向かっている間も、教室に着いてからも、私はユウカについて考えていた。

彼女は私が付けたユウカという名前を捨て、新たにマリーと名乗り始めた。

その行為に込められた思いを私は知っている。

ユウカは私のコピーとして造られ、生まれてからずっと、リセット研究に協力することを強いられてきた。恐らく不可解な行動を起こせば自分が凍結されてしまうことを分かっていたに違いない。

だから研究所から抜け出た今、オリジナルになりたいという希望を叶えたのだろう。名前を付け、他人に呼ばれることで自分がオリジナルになったと《思い込んで》いる。

恐ろしいのはこの先。彼女は独立した後、何を望むだろうか。

そんなの決まっている。私への復讐だ……。

それを防ぐ為、今朝、私に宛てて手紙を書いた。

『記憶を消された私へ』

『無駄かもしれませんが、私はここにリセットに関する事実を書

き記すことにします」

そこにはリセットの仕組み、ユウカの存在、記憶を取り戻す方法を順に書き連ねた。そして最後に、ユウカを削除する方法と、その際必要となるパスワードを記した。

それが記憶を消された私に出来る、唯一残された方法なのだ。

ユウカを削除し、外部記憶から手動で記憶を取り戻す。確率は十パーセント以下。

始業式が終わって、教室に戻ってから私の分析は続いた。

東条直樹。

見た目も行動もおよそ男らしくない彼は、これから何を望んで、世界をどう変えていくのだろうか。

どういふ訳かユウカは彼のことを親しげに話していた。彼女にとって東条直樹とは、生まれて初めてできた友達といった存在なのだろうか。あるいは味方、か。

どちらにせよ彼の行動を監視しておいて損はないだろう。そう思い、前回同様私は彼を強引に美化委員へと仕立て上げようとする。

ところが、驚いたことに、彼は潔く自ら手を挙げ立候補してきた。前回と同じでは何か都合が悪いのだろうか。よく分からない男だ。

三度目のリンクはその日の内、下校して家の玄関を開けたときだった。

光に包まれながら、私はうんざりと首をうな垂れ、疲れたときと同じような長い溜め息をついた。

「今度は何？」

ユウカへ向けた質問は、違う意味で受け取られてしまう。

「えへへー、これ中学のときの制服よ、覚えてる？」

裾を両手で広げて一回転して見せる。

「当たり前でしょ、今の私は一年前までそれを着ていたの。知って

いるでしょう」

「ねえねえ、直樹に似合うつて言われちゃった」

「そう」

「それにね、綺麗な歌声だって褒めてくれたの」

「そう……」

「嬉しいなっ」

ああ、まただ……、この感覚。

両手を後ろで組んだ彼女は、弾むように私に近付いてくる。ここは相変わらず病院のままだけど、彼女の雰囲気の前よりもずっと華やかに感じさせる。その姿は長年患っていた病気が完治して、これから退院する少女のように喜色で満ちていた。

ユウカは充分に私に近付くと、後ろに組んでいた両手を広げ、そして、私に身体を委ねてきた。

「ありがとう……優歌。直樹に会わせてくれて……」

彼女の冷たい身体とは反対に、私の心は温かい毛布に包まれるようだった。

もう、言い逃れは出来ない。

嬉しい……。

彼女が喜んでくれることが、私は嬉しい。

恐る恐る、私よりも少し小さなその背中を抱きしめた。

「……良かったわね」

「……うん」

私はこの子。全てが同じ。何も変わらない。

この子は私。私が造った分身。システムの中でのしか存在できない私。

忘れもしない。私の記憶とリセットのデータを統合し、初の起動実験が行われた日。

私と対面した彼女は喋ることもままならない程に酷く怯えていた。出てくる言葉と言えば、ここはどこ、どうして私がいるの、といった質問ばかりだった。

あらかたの動作チェックが終わり、手動で現実世界へ戻るとき、
『お願い、置いていかないで、私はどうすればいいの』と懇願して
いた。

それから何度もエラーが起こり、私はそれを何度も修復した。
きっと彼女は消えたかったのだらう。でも、それは許されな
かった。

酷な言い方をすれば彼女はこのシステムにとって、重要な《部品
》なのだ……。

暫くの間彼女は口を噤み、心を閉ざし、ただ命令に従うだけの部
品を演じていた。私がこんなことを言うのはお門違いだと思っけど、
存在理由を知ってしまった当初は相当辛かったに違いない。それも、
壊れてしまう程に……。

その後百回を超えるテストの間で私に反発するようになり、そし
て今、彼女は心から喜んでいる……。こんなことが起こるなんて……。

あなたは許してくれるの？ それとも忘れてしまったの？
違うわね、そんなこと、今はどうでもいい。

良かったね、マリー。

ふと、目じりにうつすらと涙が溜まっていることに気付く。

私はマリーから手を離し、悟られぬように人差し指でそっと拭っ
た。

不思議な感覚の正体は、流れ込んでくるマリーの感情だと思っ
ていた。リセット空間が彼女の作り出した場所である以上、それが一
番理にかなっている答えだから。

けれど、間違っていた。この涙は正真正銘私の涙。マリーに対す
る私の涙。

もしかしたら感情が修復されている？

「マリー」

彼女の肩を掴んでゆっくり身体を遠ざける。

「あなたが私の記憶を戻してくれているの？」

言葉が理解出来ない子供のように、首を傾げて不思議そうな顔をする。

「なんのこと？」

「……そう、分からないのね……。ならもつひとつ」

彼女の肩から離れた両手を、今度は自分の腰に当てて質問を続けた。

「東条直樹は私達にとって一体どんな存在なの？」

目を下に向け、少し考えた後にマリーは呟いた。

「……大切な人」

「それは私の身代わりになったから？」

彼女は大きく首を横に振った。

「違うの？　じゃあどうして？」

「ごめんなさい……。優歌との約束でそれは言えないの」

私との約束。

それは未来の私との約束という意味。

リセット空間で起きたことは覚えてはいるはずなのに、そんな記憶は見当たらない。

それはわざと未来の私がそうしたからだ。

私は何を隠しているの？

私に何をさせるつもりなの？

*

ついに謎は解明されないまま、無情にも時間ばかりが進んでいった。

それまで私は東条直樹のリセットに何度もリンクさせられた。

何度も。何度も。何度も。

腹が立つ。本当に腹が立っているの。……でも、その度にマリー

は東条直樹との時間を楽しそうに話し、私はそれを嬉しく感じていた。

今の私はあべこべの感情の狭間で生きている。とてもじゃないけど普通の人間なら平静を保っていられないはず。

けれど、私には罪がある。ユウカを生み出してしまった罪が、マリと名乗らせてしまった罪が……。

彼女が笑ってくれるなら、私はそれだけで良いと思っていた。

このまま自然に感情が戻るのを待ち、その後リセットを破壊する。それで私は解放され、全てが丸く収まると、そう考えていたのだ。

ところが、一学期も残り僅かとなったある夏の日。

太陽が輝く空の下から、再び海の底へと引きずり込まれてしまった。

俗に言うフラッシュバック。

一度脳に記憶された情報を消すことは不可能。未来の科学力を以つてしても、その記憶が表に出ないよう鍵を掛けることが精一杯。

しかし、どんなに頑丈な鍵を掛けようとも、偶然扉が開いてしまうことがある。

本人の意思とは関係無く、それは起こってしまう。

抗うことはもはや不可能だ。今の私がそうであるように……。

映し出された映像は全てが東条直樹との日常。

水族館、動物園、ショッピングセンター、映画館、美術館、展望台。それからカラオケボックスで私の歌を絶賛する彼。微笑む私。場面が変わる。海、海、海……。様々な海を彩る様々な太陽。その太陽によって形が変わる二つの影。

そこにあるのは恐らく……《幸せ》。

(……これはなに。……これはどういうこと。……これではまるで)

映像は止まらなかった。数々の幸せ。教会。指輪。口付け……。

交通事故……。

「なおき！ なおきっ！」

気付いたら私は叫んでいた。私に覆いかぶさるようにして気を失い、頭から血を流す彼に向かつて。

そこからの行動は曖昧だった。たぶん、傍にいた女生徒の力を借りて自由になった私は、美化委員の先生に事情を説明し、校内を駆け回って身体の大きな先生を探した。

彼が先生方に抱えられて保健室に運ばれると、そこで急に力が抜けて座り込んでしまった。

何かを考えなくてはいけない。けれど頭の中は血で染まった彼の顔でいっぱいだった。いつの間にか戻ってきていた先生に肩を叩かれるまで、ずうっとそんな調子。

「動けるか？」

「……大丈夫です」

と、言いながらも一人では立つことが出来ず、結局先生に手を借りてしまった。

「立花さん、顔を洗ってきなさい。それに、今日はもういいから」

「私なら大丈夫です」

「こっちは平気だよ、さつき彼を運んだ先生がね、後で手伝ってくれることになったから。君は明日頑張ってくればそれでいいよ」

「……分かりました、それでは失礼します」

「うん、今日はありがとね」

軍手を返却して、私はお手洗いへ向かう。

鏡と向かい合い、ようやく自分が酷い顔をしていることに気が付いた。

頬から耳にかけて引かれたひとつの赤い線。これは東条直樹の血液。私の身代わりに流した赤い血液。

恐らく先生が顔を洗うことを勧めたのはこれが一番の理由。けれど、その線を指で辿るうち、もうひとつの理由を見つけてしまった。その線は途中で切れていた。違う、正確には縦に引かれた線によ

って上書きされていた。いつ、どのタイミングで流れた涙だろうか。相変わらず私の頭はおかしいらしい。

流した涙にすら気付けないなんて。おかしくて笑えてくる。溢れてくる感情に耐えられなくなった私は、その場でしゃがんで、少しだけ笑い、また泣いた。

いつものように一人で帰り、一人きりの家で、一人分の食事が済んだ。

このまま一人で居たい。誰とも話したくないし、触れ合いたくない。そんなときでもリンクは起こる。

私は今以上にリセットを壊したいと思ったことは無い。

お願い、一人にして……。

誰に頼めば良いのかわからないその願いは、もちろん誰が叶えてくれる訳もなく。代わりに、見慣れてしまった病院とマリーの姿だけが押し付けられていた。

「まさか直樹が二度も優歌を助けるなんて、これは何？ 運命かしら」

あて付けるような口調で、彼女の不機嫌さが手に取るように分かる。でも一体何に苛立っているのだろうか。澄んだ青色の瞳は真っ直ぐに私を見つめている。

「偶然、でしょう……」

「そうね。偶然。でも、分かったでしょ。直樹が悪い人間じゃないってこと」

そう、悪い人間ではない。でも彼は知らないうちにマリーを助け、私を壊していく。

そして、そうさせたのは未来の私自身。

結局何がいけない事だったの？ どこで間違えたの？ どうして貴方は私を庇うの？

「驚いた……」

めにリセットを使うことを考えていた。

枕元に置かれた私のリセット端末。

表面にはタロットカードで云うところの《審判》が描かれていた。赤い翼をもった天使が、地上に並べられた棺に向かってラツパを吹いている。これは一度失われた生命を天使が蘇生させる構図を描いたものだ。

正位置での意味は《再生》や《復元》。占いで言えば、自分を肯定し、安心して前へ進むときを表している。

逆位置の場合は《挫折》や《別れ》。過去に戻って出直すべきだという意味となってしまう。

私はどうするべきなの……。四月七日に戻り、全てを忘れ、リセットを破壊するべきなの？ それとも、このまま、この感情を胸に抱いたまま、辛くとも先へ進むべきなの……？

何もかも分からない。

そう思った私は、リセットを裏返し、くるくると何度も横に回転させた。完全に分からなくなったところで、再びリセットを裏返す。

現れた天使は、下に向けてラツパを吹いていた……。

私は、前に進む覚悟を決め、私に必要なことをした。

センター端末にアクセスし、一部の機能に制限を加える。

心を読み取る機能。

私は直樹の記憶を思い出してしまった以上。彼を好きになってしまふ。それは仕方が無いことだと思う。でも、それは私だけの心。彼女がマリーと名乗るのなら、尚更この心を読まれる訳にはいかない。

間違っていないよね。マリー。直樹……。

*

「そんなことでいちいちリセットを使うのね、少しは巻き込まれる

身にもなつてくれないかしら」

マリーとほとんど会話をすることなくリセット空間から戻った私は、満足気に花を引き抜く直樹に向かつてそう言い放った。

言葉とは裏腹に、内心では少しワクワクしていた。

もちろんリンクされることへの腹立たしさもまるきり無かった訳ではない。

けれど、今回に限って言えば、少なくとも花のためにリセットを使ったのだから、むしろ喜ばしいことと思えていた。

直樹を想うこと、話すことで感情が蘇る。もっと話がしたい

……。

「……………なんて……………」

彼は花を右手に持った状態で固まっていた。

「そのままの意味」

「……………そんな、立花さん、リセットのこと分かるの？」

「そう……………。やっぱり彼女から聞かされていないのね……………」

「それって、マリーのこと……………？」

ようやく彼は花を手から離し、立ち上がったから「じゃあ……………」

と続けた。

「もしかして立花さんもリセットを？」

「持っているわ」

「そっか……………。でも……………でも、『巻き込まれる』って、何のこと？」

マキコマレルツテナンノコト？ ですって？

「あなたまさか、知らないとも言うの？」

「えっ？」

「呆れた……………。説明書、読んでないのね」

「……………」

図星らしい、折角彼のためにわざわざ作ったのに。本当に馬鹿。なんでこんな人と。

気付くと、私の口からは大きな溜め息が漏れていた。

私は花壇に花を植える作業に戻りながら話を続けた。

「リセット同士は繋がってる。ひとつが起動するとリンクを起こして全てが起動するの。行き先は起動した人と同じ時間」

「それって……」

「つまり、巻き込まれるってこと」

「そんな、でも僕は巻き込まれたことなんて……」

彼は呆然と立ち尽くしたまま考えを巡らせている。私はというと、ただ花を摘み、花壇に植えるだけ。彼が考えていることが手に取るように分かる。

途中、彼が何かに気が付いたような声をあげた。

「そんな……それじゃあ……立花さんは、一度も……」

花を摘み、花壇へ植える。

「そうね、別に使う必要、無かったから」

「僕はっ！……僕は、そんなこと知らなくて……」

花を摘み、花壇へ植える……。

直樹、別に私はあなたを責めているわけじゃない。そんな顔しなくたっていいの。私は、あなたと同じ時間に生きている。それを知って欲しかったから……。

「……立花さんを巻き込んでるなんて知らなくて、僕は何度も」

「出来たわ」

彼の顔が上がる。

「これはあなたが救った命、そうでしょ」

殺風景だった花壇には華やかなオレンジが咲き誇っている。ひとつも欠けることなく。干切ってしまったのは直樹だけど、それを後悔と感じてくれた。だから、恥じることなんてないの。

「さっきはあんなこと言ってごめんなさい。私なりの冗談と受け止めてもらって構わないわ。深い意味は無いの」

「……謝るのは僕の方だ。変なことに巻き込んで、本当にごめん」

つい可笑しくて笑ってしまった。マリーが見たら何て言うかしら。

「ふふっ、あなたは勘違いしているわ」

「えっ？」

「巻き込んだのは私の方。あなたにアレを送ったのは私よ」

「どう……いうこと？」

「付け加えて言うと、リセットを開発したのも私」

それを聞いた彼は目を丸くして口をパクパクさせている。信じられないもの無理もない。今の私は彼と同じ高校二年生なのだから。

なんだか楽しい。ううん、面白い。

「先生も終わったみたい、行きましょう」

「え、あっ、ちよつと！」

直樹は土だけが残ったケースを抱え、慌てて私を追いかけてくる。そんな光景の中、私は彼との出会いを思い出していた。

もうどれくらい前になるのか分からないほど大昔、彼と私は本当に出会っていた。

それは、運命とは程遠い、ごく普通の出会いだった。

「ええ！？ それじゃアマリーと立花さんって同一人物ってことなの！？」

私は直樹の案内で学校の近くにある小さな公園に来ていた。途中のコンビニで彼がしつこく奢ると言うので、仕方なく小さなペットボトルに入った緑茶を買ってもらった。

公園に着き、木陰のベンチに腰掛けると、彼はリセットの開発について色々と質問をしてきた。

どうしてそこから聞くのだろうかと思いつつも、私は彼が理解の出来る範囲で教えてあげた。

未来で私が在籍していた研究機関のこと。

正式にはリセットは一種の通信装置であり、タイムマシンとは違うということ。

脳への負担が大きいため、三つまでしか記憶できないこと。

センター端末を転送したのが四月七日であるため、それ以前には戻れないこと。

マリーが私の脳をデータ化して生まれた人工知能搭載型のオペレーターシステムだということ。

理解しているのかは分からないけれど、彼は終始黙って頷いていた。

それなのに、最後の項目で急に大きな声を上げて驚くものだから私はビツクリしてしまい、ペットボトルの口からお茶が少し飛び出してしまった。

ハンカチを取り出して、スカートに染み込んでしまったお茶の跡を、軽くぼんぼんと叩く。

「ご、ごめん」

「いいけど、そんなに大きな声を出して驚くことかしら」

「だって、全然似てないよ」

「同じだったら気持ち悪いでしょう」

そう言いながら、彼女が私と全く同じ姿だった頃を思い出していた。

「それに、彼女はもう私じゃない。彼女は自分の立場を知ったうえで、姿形を変え、一人の女の子として生きているの」

「……そっか」

それから質問は続き、私は淡々と答えた。

リセットが全部で二十二枚あること。

私と彼以外に持っている人が居ないこと。

説明書に書かれている会社は存在しないこと。

そこで質問の矛先が私のことに移ってしまったので、なるべく当たり障りの無い嘘で答えることにした。

リセットの研究以外覚えていない、と……。

ようやく質問の嵐が止むと、すっかり温くなったお茶をひとくちずつ飲みながら、しばらくの間、広場で駆け回る子供達を見つめていた。

頭上にそびえる大きな木が揺れ、木漏れ日がチラチラと足元を照らしている。

さわやかな葉の擦れる音、それをかき消す蝉の声が耳に痛い。

今年の夏は良い季節になるのだろうか……。

「あの……」

「なに」

「その、どうして僕なの？」

それは……。

「たまたまよ。研究所が実験サンプルとしてあなたを選び、私がその監視役として任命された。ただそれだけの話。……詰まる所、私にも分からないのよ」

「でも、どうやって報告するの？ これって過去専用なんじゃ……」

「私のだけは未来への通信が可能なのよ」

かなり無理のある設定ね……。

流石に彼も納得の出来ない表情を浮かべていたが、それ以上聞いてくることは無かった。

不意に背後から女性の声が投げかけられた。

「直樹くん？ それに……」

顔だけで振り向くと、木の合間、胸の高さの柵の向こう側に、クラスメイトの相澤美玲の姿があった。

「うそ、立花さん？ あ、そっか、今日は美化委員の仕事があるって言ってたわね」

「あとっ、あっ、そ、そう！ 仕事でちょっと疲れちゃって、休憩して帰るとこなんだ」

素っ頓狂な声で直樹が答えた。どうしてそんなに焦る必要があるのだろうか。

それと、私を見るなり開口一番に出た『うそ』とはどういう意味？

「あつ、そうだね、直樹くんが教室から出た後にね」
車が通過する音に遮られ、最後の方は聞き取れなかった。

「えっ？ なに？」

彼は立ち上がり彼女に近寄っていった。

私は何故だか心がざわついて座っていられなかった。

立ち上がると、今度は勝手に足が動き出し、直線を引いて二人から離れてゆく。

まるで逃げているみたい……。

どうして私が逃げているの？ 一体何から？

彼が相澤美玲と話している。ただそれだけじゃない。どうして？
どうして……。

『どうして僕なの？』

……その答えは私が考えていたよりも、もっと複雑だった。

だから私は逃げているのね。彼から。彼の周りから。

「……さん」

もう嫌、考えるのは止めよう……。

またいつものように一人になろう……。

「立花さん！」

肩を掴まれてから気が付いた。直樹が私を追いかけて来たことに。
ほんの少し息の乱れた声で彼は言った。

「急にどこ行くの？」

「質問は済んだでしょう？ 帰るのよ」

「う、うん……分かった……」

私の肩から手が離れてしまう。

そう、帰るのよ……。

再び出口に向けて歩こうとしたとき、とても懐かしい言葉を聞いた。
た。

「またね」

時間が一瞬で巻き戻る。

振り返ると、記憶の彼と瓜二つの顔が、いつも別れ際に見せる、少し困ったような表情をしていた。

何度も、何度も、本当に何度も交わした別れの言葉。

私はこんなにも鮮明に覚えているのに、あなたはまだ知らないのね……。

切なくて、涙が出そうになる。

私は溢れる感情を必死に抑え込み、ひとつだけ頷くと、出口へ向かって足を踏み出した。

一歩進む度、直樹との思い出が容赦無く私の胸を突き刺して、出口を通過する前に、涙は零れ落ちてしまった。

直樹にリセットを渡した本当の理由。

それは交通事故なんかではない……。

私は植物人間になった彼の脳内を、実験と称し、データ化して覗いてしまった。

そこに渦巻いていたもの……。

それは、《後悔》だった。

些細な事から重大な事まで、ありとあらゆる事柄に向けられた後悔の念。彼の頭の中は、その強い念によって埋め尽くされていた。

私への想いが無かった訳ではない。それどころか、私は特別な場所ですぐに抱えられていた。

嬉しい。けれど、とても悲しかった。彼がこんなにも後悔に苛まれていたなんて知らなかったから……。

数日後、ユウカの凍結が決定され、私はリセットを無断で使用した。

行き先は彼の後悔が一番集中していた高校二年の年。

起動直後、私は馬鹿なことをしたのかもしれないと思った。

直樹の後悔は、私ではなく、別の女の子に向いていたのだから

細かい内容までは分からなかった。けれど間違いなく、私以外の女の子への後悔が他のものよりも強く残っていたのは確かだった。

もしかしたら直樹はその子と……。そんな考えが浮かんでしまい、私は怖くなって、わざと記憶から彼を消すことにした。

直樹は自らの意思で後悔を消す。

それがリセットを渡した本当の理由。

私は彼の交通事故を防ぐだけ。それでいい……。

それだけで良かったのに……。

どうして思い出しちゃうの？

この気持ちはどこに行けばいいの？

*

夏休の間、リンクは一切起こらなかった。

それは私に気を遣ってのことなのか、それとも既に後悔は消えてしまったのか、もしくはそのどちらでもなく、私の見た後悔が未だに訪れていないだけなのか……。

美化委員の仕事は夏休みに入っても続いていた。クラス別の委員が交代で花壇の世話を任せられ、毎週水曜日が私達の当番だった。

とても面倒な仕事だと思う。けれど、私も彼も一度も休まなかった。

炎天下の中、可憐に咲き誇る黄色とオレンジ。

ふと横を見ると、もうすっかり慣れた手つきで直樹が水を撒いている。私の目には、水を与えている直樹も、与えられている花達も、とても楽しそうに映っていた。

ジョウロの水が無くなり、水道まで一緒に歩く。

蛇口をひねり、ジョウロを水で満たしていく。

私達はたつぷり時間をかけて、これを何度か繰り返す。その間はずっとも緩やかに時間が流れ、僅かながら昔と似たような愛おしさを感じていた。

形は違えど、これは、紛れもなく二人だけの時間。

ようやく半分が終わろうとしたとき、直樹が少し強張った表情になりながら、私に向けて話し掛けてきた。

「あ、さ、すごく急な話なんだけど……」

「なに？」

「来週の月曜日から一泊二日で海に行くんだ。哲平達と」

「そう」

「それで、その」

「それで？」

「良かったら、立花さんも……どうかな、なんて……」

ジョウロから降り注ぐ雨はとても小さくて優しい音をしている。注意していないと聞こえない程の弱々しい音なのに、今はその音が全てであるかのように、しっかりと私の耳に届いている。

私はもう笑顔を隠せなかった。涙が隠せないように、笑顔だった。意思とは関係無く溢れてしまうものなのだと、そのとき初めて分かった。

「ごめんなさい、その日は予定があるの……」

「そっ、そうだよね！ やっぱり急だよね！ ごめんね変なこと言っちゃって」

「そうだ、隠せないのならもういっそのこと……」。

「ううん、嬉しい、誘ってくれてありがとう」

ありがとう。直樹。でも、ごめんなさい……。まだあなた達の間で混ざることが出来ないの。あなたの後悔は、もしかしたら、私が近くに居るせいで生まれてしまうのかもしれないから。

だから、もう少し後、私がリセットを渡した本当の理由を話せるようになったら、それを聞いたうえで、それでも私を傍に置いてく

れるのなら、そのときは……。

二十センチくらいの茎の先端に咲いた黄色いマリーゴールドは、丸みを帯びた可愛い形をしている。所狭しと広がる花弁は、まるで窮屈な茎の中からスポンと飛び出してきたかのように、溢れる生命力を開放させていた。

その中央、開花と共に露になった雄しべや雌しべを見ていると、何故だかは分からないけれど、それがとても尊いもののように思えて、すごく切ない気持ちになる。

あなたと一緒に、私もこの花が好き。

「ねえ、直樹、くん」

「ん？」

「マリーもね、この花が好きなのよ」

「……うん、そんな気がした」

「私に気にせず、自由にリセットを使って」

「えっ？」

「たまにはあの子にも、会ってあげて……。きっと、待ってると思うの」

「でも……」

「お願い」

「……うん、分かった」

全ての花壇に水をやり終えた私達は、校門まで並んで歩く。

特に会話は無いのだけれど、この僅かな時間が一番好きだった。

間に一人分の空間を保ちながら、いつも、出来るだけゆっくり歩いた。

百メートルにも満たない二人で歩く帰り道。

過去でもない、未来でもない、今だけを感じることが出来る唯一の時間。

校門をくぐり、お互いに身体を向き合わせ、ぎこちない笑顔を二人で作る。

「またね」

今の私はこれだけで充分。
別れるときに別れを言える。
私の中の確かな幸せ。

> i 1 4 6 0 3 — 2 0 2 4 <

四章 【理由】（後書き）

まだまだ謎が色々と残っておりますがここで第一幕の終了となります。

ここまで読んで頂いて本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6614o/>

MARIGOLD - マリーゴールド -

2010年11月29日00時10分発行